

はたらく魔王さま! 14

異世界エンターイスラから、魔王を追って時空を越えた勇者エミリア。無事東京へとたどりついたものの、魔王を見つけられず、たった一人、街を彷徨っていた。そんな勇者が迷い込んだのは、永福町に建ついわくつきの高級マンションで——「勇者の部屋探し」。

さらに、恵美と千鶴がお寿司を食べながら友情を深めた「回転寿司」、マクロナルド随々各駅前店店長・水崎が幼なじみと銀鬚を繰り広げた「マクロ店長会議」のほか、「魔王の破けたズボン」「黒猫の圧力鍋」「魔王新しい機帯を買う」など、書き下ろし中編を含む全4編でお贈りする特別編！



わ-6-15



はたらく魔王さま! 14

和ヶ原聡司



電撃文庫



9784048653794



1920193005905

ISBN978-4-04-865379-4  
CD193 ¥590E

ASCII MEDIA WORKS  
アスキーメディアワークス

KADOKAWA 角川株式会社KADOKAWA

定価 本体590円

税別価格が別途表示されています



和ヶ原聡司

「ドツボから抜け出した和と画と図にしない情熱」

和「ようやく兄が見えた兄がする」  
画「その兄とやらを仕事と行動で示そうが」  
和「境界が明るくなっただけという愚問も」  
画「口を開けて仕事と行動で示そうが」

【電撃文庫特編】

はたらく魔王さま! 1~14  
はたらく魔王さま! 0

イラスト:029

電撃文庫(PC)への掲載はご好評のためとさせていただきます！  
そろそろP24を買う時が来たように。



9784048653794



1920193005905

ISBN978-4-04-865379-4  
C0193 M590E

ASCII MEDIA WORKS  
アスキーメディアワークス

KADOKAWA 発行●株式会社KADOKAWA

定価 本体590円

※消費税別価格・送料は別途



和ヶ原聡司

「ドツボから抜け出した和ヶ原と知にしない4巻」

和「ようやく兄が見えた気がする」  
和「その兄とやらを仕事と行動で示そうか」  
和「境界が明るくなっただけという意見も」  
和「口を開けて仕事と行動で示そうか」

【電撃文庫作品】

はたらく魔王さま! 1～14  
はたらく魔王さま! 0

イラスト:029

電撃文庫 PCへの配信は、お断りしております。  
そのほか、PC4を買った方がよいです。



Sasashi Wajuhara  
Illustration & Omake  
イラスト ■ 029  
和ヶ原聡司

14

## はたらく魔王さま! 14

異世界エンテ・イスラから、魔王を逃  
 げて時空を越えた勇者エミリア。無事東  
 京へとたどりついたものの、魔王を見つ  
 けられず、たった一人、街を彷徨って  
 いた。そんな勇者が迷い込んだのは、永楽  
 町に建ついわくつきの高級マンションで  
 ——「勇者の部屋探し」。

さらに、恵美と千鶴がお寿司を食べな  
 がら友情を深めた「回転寿司」、マクロ  
 ナルド隣々各駅限店店長・永崎が幼なじ  
 みと密会を繰り広げた「マクロ店長会議」  
 のほか、「魔王の秘けたズボン」「星の  
 圧力鍋」「魔王新しい携帯を買う」など、  
 書き下ろし中編を含む全4編でお贈りす  
 る特別編！

はたらく魔王さま! 14

和光出版

電撃文庫

2987

はたらく魔王さま! 14

電撃文庫

電撃文庫

DENGEKI BUNGO

—業界最強の新人—



THE UNIVERSITY OF CHICAGO

「それでは、お話を聞かせて下さい。」

社に準いられ  
日曜の聖一商店は必ずしも開店し、その店  
は開くも、大抵大抵として、その店を開いてい  
る。

1985年，中国科学院南京地质古生物研究所的科学家们，在南京地区发现了大量的三叶虫化石。这些化石的发现，为研究三叶虫的分布和演化提供了重要的实物证据。

[illegible][illegible][illegible][illegible]

**THE UNIVERSITY OF CHICAGO**

國產的麥芽糖、甘糖、饅頭、蜜餞、餅乾、糖果、

[illegible]

● 2010年10月1日起，凡在中华人民共和国境内销售货物或者提供加工、修理修配劳务以及进口货物的单位和个人，均应按照《中华人民共和国增值税暂行条例》及实施细则缴纳增值税。

だが、直の外に下る漏れも車の押さの  
間隙を拾って、奥の壁も叩くも到底に

Figure 1. The overall structure of the proposed system.

[illegible]

「平の、田中マキがヤシ。よろしければまた、お電話の連絡先を教えてください。」

田舎の文化

中國政府對香港問題上採取「一國兩制」方針，是根據香港歷史和現實情況而提出的，是解決香港問題的唯一正確途徑。

[illegible]

その結果、**「日本は、戦後、戦前よりも、**

「三國志」卷之六十五「魏書」中，有「魏書」一書，其書名與「三國志」相同，但其內容則為魏國之歷史，而非三國之歷史。此書之編纂，係由魏國之史官所完成，其內容之真實性，應較為可靠。然此書之編纂，亦非易事，其內容之真實性，亦非易於判斷。故在研究「三國志」時，應注意此書之編纂背景，及其內容之真實性，方能有正確之認識。

「第二、第三」の二語は、この二語の間に、

本報記者張永祥攝

本書は、本書の著者の経験に基づき、

關於經濟發展與環境保護，這兩者互為前提，不可分割。

[illegible]

「五、個人収支の調査が極めて、取

【附】**“三三制”**  
 中国共产党在抗日民族统一战线中实行的政权组织形式。1940年6月，中共中央在《关于统一战线的策略》中提出，在抗日根据地政权组织中，共产党员、非党进步分子和中间分子各占三分之一。

一、の四二五の頁を五頁に六丁縮小した

「お邪魔しますね、高橋さんへ。」という



1-0 7月17日 10月17日 10月17日

國手は千鶴に言及して、戻道客に逢う時

り工員を減らすに成功し、半額に減らすのを目標に置いた。ところが、大工の組合は、大工の数を減らすと、大工の技術が失われると主張し、大工の数を減らすのを拒否した。大工の組合は、大工の数を減らすのを拒否した。大工の組合は、大工の数を減らすのを拒否した。

**E**

HAWAII  
WAWA



MEGAMI...

MAYUMI KISAKI



MAYUMI KISAKI

# はたらく魔王さま！

14

和ヶ原聡司

イラスト ■ 029

Satsuki Wagahara  
Illustration © Otsuka







## CONTENTS

**勇者**と**女子高生**、友達になる

P011

**魔王**、節約生活を振り返る

P061

**魔王**、**勇者**の金で新しい携帯電話を手にする

P079

**勇者**、敵科部の力に驚嘆する

P107

**魔王**、上司の過去を知る

P159

はたらく前の**勇者**さま!

—a few days ago—

P227

はじめての  
創作活動

Satoshi Waghara  
Illustration © Oniku

イラスト 026

和ヶ原聡司

14





ほとんど客の姿の無いマダロナルド・谷駅前店で、佐々木千穂は終始暗い顔をしていた。それでも咎められなかったのは、店長である木崎真弓が、客入り不振の理由が分からず千穂に負けず劣らず暗い顔をしているからだ。

そう。木崎はこの店から歩いてほんの数分の場所です、ついさっき何が起こっていたのか知らないのだ。

「なあちーちゃん」

そのとき、アルバイト先の先輩である真奥真夫の声に、千穂は小さく身を震わせ、心の中を滑られたのかと一瞬で不安になる。

そして恐る恐る真奥の顔を見ると、当の真奥は、全くこちらの様子に気づいた気配は無く、むしろ千穂以上に恐る恐るといった顔つきで尋ねてきた。

「俺の力があれば、その、嫌な記憶だけを消すこともでき」

そこまで聞いて、急激に千穂の頭に血が上る。

顔と耳が熱くなるのが自分でも分かり、感情が沸騰する。

それが明確に顔に出ていたらしく、真奥の方も不穏な気配を感じて、

「る……ぞ」

と、尻すばみな声になる。

千穂は、口元が震えるのを抑えられなかった。

今日という特殊な一日を経験した千穂の心は、実のところやはり相當に混乱していたのだらう。

真真さん、嫌な記憶って、なんのこと言ってるんですか。

私が真真さんと、あのお姉さんの関係を勘違いしたこと？

真真さんと吉屋さんが、実は逢方もない怪物みたいな人だったってこと？

それとも……。

「嫌です」

「へ？」

気づけば、そう言葉にしていた。

何が嫌なのか、常識的に考えて思い当たる節は山ほどある。

怖い思いをした。痛い思いをした。

常識では考えられないことの連続で、聞きたいこと、知りたいことは山ほどある。

それでも。

「真真さんのバカっ！」

千穂の人生の中でも数えるほどしか発したことがない、罵声。

「ええええええ？」

真真は心迷った様子だったが、それがまた千穂の背立ちを加速させる。

頭のどこか冷靜な部分では分かっている。

真奥は、異常事態に巻き込まれた千穂の精神的なショックを察しているのだろう。

魔法とか、戦し合いとか、悪魔とか、そういうものを目の前で見た自分のことを察してくれて、そんな記憶を消してくれようとしているのだろうか。

だが、千穂の心に本当にわだかまっているのは、たった一つのことだけ。

そしてそのことについて、真奥はなんの反応も見せなかった。

その後は、千穂のシフト終わりの時間まで、真奥と千穂は一言も会話をすることなく、

「お疲れ様でした、また次のシフトで」

千穂は帰り際に殊更事務的にそう言い、真奥の返事も聞かずに店を後にした。

最後まで真奥は困惑しっぱなし。

千穂が怒っている理由が分からないのだろう。

「真奥さんの……ばか」

街灯に照らされた甲州街道を歩きながら、千穂は小さく一人ごもる。

「私は……自分の口から言いたかったのに」

怒りと、それ以外の感情で火照る顔を押さえながら、千穂は大胆に歩を進める。

真奥一人を責めるのは間違いかもしれない。

実際具体的に何かを言われたわけではないし、それを言ったのは異世界から来たという二人

の人間だ。

でも、それにしたって、少しでもいい何か反応してくれてもいいと思う。

「受信する側の条件はこうだ。『四六時中、魔王のことを考えている人間』」

「へー、魔王も実外剛に置けないんですねー」

異世界の二人の言葉が脳裏に蘇りこみます。

千穂は、自分の意識の全てが変わった朝から今までの出来事の中で、たった一つだけ、記憶ではなく事実を消したいのだ。

「私は……どんなことがあっても、自分の口から、好きだって、言いたかったのに……」

※

人が空を翔け、剣戟と魔法が飛び交う、そんな世界は物語の中だけのことだと思っていた。学校に行き、アルバイトをし、アルバイト先の先輩にはのかな慈心を抱く、そんなどこにもある女子高校生佐々木千穂の日常は、一瞬で崩壊した。

東京豊島、六疊一間の本番アパートに友達と二人で住んでいると言っていた、大好きなアルバイト先の先輩は、同居の友達ゆみで異世界の悪魔だった。

知り合ったO1のお姉さんは、何も無い所から剣を取り出して空を飛ぶ、異世界の勇者だっ



た。

それで悪魔と勇者が対決するならまだしも、二人が協力して別の怖い人達と戦って、戦いが終わったら当たり前のようにマダロナルドクルーとOLに戻ってしまった。

そして今までと全く変わりなく、自分に接してきた。

気持ち悪いとは思わなかった。戦いの最中は正直、ちょっとだけ怖いと思った。戦いが終わった後、未知なる真実を知り興奮もした。

今は……よく分からない。

なぜか自分以外の世の中では、あのときのこととは無かったことのようになっているけれども、あの人達の真実を知って、それを無かったことにすることはできない。

接し方が分ならず、今までのような気の置けないやりとりができない。

できないから、遠くなる。遠ざかってしまう。

でも。

やっぱり、遠いと、辛い。

源

「……やっぱダメ」

今日何曜日だろう、こうやって目の前で引き返すのは。

千穂は、京王線笹塚駅から歩いて五分のところにある本通アパート、ダイヤ・ローザ管理の前で踵を返し、来た道を引き返そうとしていた。

一丁歩いて立ち止まり、深いため息を漏らす。

どうしても、あのアパートの階段を上がる勇氣が出ないのだ。

「今日は真央さんお休みだし、いきなりお邪魔したら、悪いよね」

あの戦いの日から、真央と顔を合わせる回数が極端に減った。

元々シフトが重ならない日が多い週であるというやむを得ない理由はあるのだが、それは全体の半分。

残り半分は、千穂が真央を避けてしまっているからだ。

決して時間が無いわけではないのに、部活の新生の基礎指導や、中間テストを理由に、月二回のシフト提出で、丸一週間休みを入れてしまった。

そして残りも真央があまり入らない土曜日や、真央が閉店と同時に入り、午後八時に帰る日

の午後七時から十時までといった内容でシフトを出し、真真と顔を合わせる機会を少なくしようと思案した。

学校のことを持ち出すと店長の本略は納得はしてくれたが、何かと似い妓女のことである。薄々千穂が真真を避けていることに感づいている様子が端々に見て取れた。

一度だけ、

「何があつたか知らないが、自分の手に余るようなことがあつたなら遠慮なく言え」と面と内かつて言われたことがある。

手に余るといえばもちろん手に余る。

だが、今までと違い、誰かに相談してなんとかなるような悩みでは決してない。

「うう……」

千穂は唖つて、今引き返してきた道を、もう一度基みはじめた。

それでも遠くにアパートの屋根が見えはじめると、遠路に歩みが鈍くなる。

「私、何してるんだろ」

自問する千穂。

最初は、あまりに自分の態度が悪いことを、謝ろうかと思つたのだ。

その上で、自分の言葉できちんと、真真に伝えたいと思つたのだ。

「私は……真真さんのことが、好き……」

だが、アパートの共用階段の目の前まで来て、千穂は気づいた。

『真奥貞夫』とは、何者なのか。

自分が見た全てが現実起こったことならば、あのとても人間とは思えぬ巨大な異形の姿こそ、『真奥貞夫』の本当の姿である、ということになる。

すると自分が好きになった、あのアルバイト先の気のいい頼り甲斐のある先輩は、偽りの姿ということにはならないか？

あのとき、崩れそうになった首都高を支えていた姿こそが真奥の真の姿ならば、今アパートの部屋にいる『真奥貞夫』と、自分はどうか接すれば良いのだろうか。

そこまで考え、今日もまた、何度も往復した道を千穂は逃げ出していた。

あの首都高での異次元の戦いの直後は、心がマヒして、全ての事象を受け入れそうになった。それでも、時間が経てば経つほど、これから先、真奥とどう向き合えばいいのか分からなくなっていた。

自分の好きになった人を信じていたい。

自分の口から、好きだと言いたい。

でも、自分の好きになった人が、本当のその人ではなかったとしたら？

あのアパートに住んでいるのは、本当に私が好きになった人なのか？

千穂が短距離走のような勢いで街中を走り抜け、そして、あの戦いの現場であり、今はその

眞面目すら無い管絃のガード下に差し掛かったとき、

「あつ、す、すいませ……」

「こ、ごめんなさい」

また、人とぶつかってしまった。

思えばあの日も、勘違いがあつたにせよがむしろに違ひて、あの恐ろしい人とぶつかって、あんな暖かいに巻き込まれたのだった。

一瞬その記憶がフラッシュバックするが、ぶつかつた相手は女性で、それもごく最近知り合つた……。

「あ」

「あれ？ あなた……」

向こうも、すぐに千穂に気づいた。

美しい長い髪と意志の強そうな瞳が印象的なその女性をどう呼ぶべきか、千穂は一瞬迷つた。

「遠佐……さん」

「千穂ちゃん、久しぶり……ってほどでもないかしら」

遠佐恵美。

真実と同じく、地球のどこでもない遠く世界から来た、異者だという女性。

そして、

「アルバートさん、エメラダさん……」

遊佐真美の背後に控えている、外国のアスリートのような体格の男性がアルバート。千穂よりも小柄な女性がエメラダ。

二人共、真美の「旅の仲間」であるらしい。

アルバートは最初に出会ったときと変わらぬ姿だが、いかにもファンタジー世界の魔法使いといった服装だったエメラダは、日本の街中を歩いていると違和感の無い服装に変わっていた。エメラダはともかく、ハンマー投げの選手と言っても通じそうなアルバートの体格に合う服が、恐らく見つからなかったのだろう。

「真美さんのおうちに、行くんですか？」

千穂は囁きに、そう尋ねていた。

真美と後ろの二人は、彼らの世界では真美を討伐するために旅をしていた仲間だということだった。

まさか今度こそ、勇者と魔王の決着をつけようとやってきたのだろうか。

真美との接し方で悩んだ末に逃げ出してきた癖に、千穂の中では真美に敵対する者への警戒心が湧いてくる。

するとなぜか、真美の後ろの二人が、意外そうに顔を見合わせた。

「嘘ちゃん、俺達のこと覚えてんのか？」

「は？」

大膽な男、アルバートの問いに、千穂は驚くと共に軽く奇立ちを覚える。

忘れようにも忘れられるはずがないではないか。

そもそも千穂は、アルバートの軽はずみな言葉のせいで悩みに悩んでいると言つても過言ではないのである。

「これは、ちよつと予想外です」

エメラダも何を驚いているのだろう。

笹塚駅を爆発させ、首飾高を崩壊させたあの戦いは、ほんの一週間と少し前の出来事である。

それこそ一生忘れられないであろう出来事だと思ふのだが。

しきりに驚くアルバートとエメラダとは対照的に、恵美は得心願で頷いた。

「ね、言つたでしょ？ 彼女は絶対に私達のこと覚えてるって」

「遊佐さんまで……何言つてるんですか」

そもそも恵美や真奥達のことを千穂に語つて聞かせたのは恵美自身ではないか。

するとそんな千穂の疑惑に答えるかのように、恵美は千穂の目を見る。

「変なこと言つてごめんない。今日はそうね、確かに真奥……うん、もう千穂ちゃんの前

では『魔土』って呼ばせてもらうけど、確かに魔土の様子を見に来たわ。でも、そのあと、

谷のマダドにも行く気だったの。千穂ちゃん、あなたの様子を見にね」

「え？」

「あなたが、私達のことを……あの日のことを覚えているのか、魔王に、何か変なことがされてないか、確かめるために」

「俺もエメもな、娘ちゃんも俺達のことおれてると思ってるんだ。てーか」

「忘れさせられてると思ってた」

アルバートとエメラダの言葉に、千穂の胸がざわめく。

「それは……町の人か、あのときのことを何も覚えていないみたい……ですか？」

千穂が静かにそう言うとき、

「……やっぱ、気づいてたのね？」

恵美が神秘的な面持ちで頷く。

「気づかないわけじゃないですか。真央さん以外誰もあのことを話す人もいないし、テレビにも新聞にもネットにも、あのときのこと、何も出てない。真央さんが遊佐さんが、なんだか魔法みたいなことしたんだなって、うっすら思っていました。それに……」

「も、千穂ちゃん？」

「お、お嬢ちゃん？」

「あ、あのー？」

千穂の言葉を聞いていた恵美とアルバートとエメラダが、三番三度うろたえはじめる。



「ま、真実さん、わたし、私に、記憶、銷すかって、私、嫌なこと、何も、無いのに……」

唇が震え、脳が焼けたようにこめかみが熱い。

頭が潤むのを止められない。

「あのバカ……」

そんな千穂の様子を見て、恵美は口の中で呆れの言葉を呟いた。

「悪魔……とか、違う世界、とか、全然分かんない、ですけど……っ、でも、私、真実さん、

やつぱり……でもっ、どうしたらいいかっ……分かんないわぶっ」

道行く人が思わず振り向くほどに、もはやぼろぼろと涙を流して止めることができない千穂を、恵美はしっかりと抱きしめた。

「ごめんね、いっぱい混乱させちゃってるよね」

「……」

「私達で良かったら、あなたの知りたいこと、全部話すわ、だから、ごめんね」

「……道佐……さん、……うんうん」

千穂は、今日まで心に秘めていた混乱と焦燥のすべてを吐き出すかのように、恵美の胸の中でしやくり上げる。

その二人の様子を後ろから見ていたアルバートは、

「………いつか………どう考えちゃいいんだ？ 真実ってのは、魔王のことだよな？ 嫌ちゃん

つまりは……」

頭を掻いて傍らのエメラダに尋ねるが、帰ってきたのは半眼のどこか冷めた顔。

「本人の目の前でし、あんなこと言っちゃうデリカシーの無いアルにはく分らないと思ひます」

エメラダが言うのは、六畳一間の魔土城でアルバートが放った軽はずみな一言だった。

当初、行方不明になった恵美を探して日本にやってきたアルバートとエメラダ。

恵美の居所を絞り込むために、概念感受と呼ばれるテレパシー技術を用い、「常に魔土のことを考えている人間」に対しコンタクトを取ろうとしたのだ。

ところが常に「魔土＝真奥」のことをより強く考えていた千穂が、恵美よりも敏感に彼らの概念感受を受信してしまい、そのことを真奥本人の前でアルバートが喋ってしまった。

千穂にしてみれば、自分の秘めた想いを見知らぬ他人にいきなりバラされたに等しい大事件となつてしまったのである。

「知い、トダのある言い方すんな……てか、お前だってノッてただろうが」

アルバートも、自覚だけはあったらしい。

だが自分が自分だけにあるのではないと言いたげにエメラダを睨むが、

「私はく女の子だからいいんです」

「デリカシーに男も女もあるか！ 大体お前もう女の『子』ってトシじゃあぐあぶっ」

單手の革パンツを貫くエメラダのトキヲクが腰に直撃し、アルバートは激痛に悶える。  
すかさずエメラダはうずくまったアルバートの喉元に手刀を差し込むと、周囲に見えないよ  
うに手元を不思議な力で光らせはじめた。

その光に下から照らされる目は、穏やかな声色に反して全く笑っていない。

「死にましようー」

「ま、待て、わ、悪かった！ 悪かった！」

「そっちは何してるのよ……」

千穂を抱きしめつつも背後で繰り広げられるコントに呆れ顔で振り向く惠美。

「どうせお昼食べるつもりだったんだし、千穂ちゃん連れてどこか暮ら着けるところに行きま  
しょう」

「……何を話すんですかー？」

まだ泣きやむことのできない千穂を見ながら、エメラダがいぶかしげに問う。

アルバートはまだ涙目で唇をさすっている。

惠美は真剣な顔で答えた。

「全部よ、何もかも。私達のこと、魔王のこと、エンテ・イスラのことを」

## 源

「源佐さん、遠う世界の人とか、嘘ですよね」

「いふなり何？」

千穂の唐突な発言に東美は首を傾げる。

「だって」

千穂は、ある種の期待と不安を抱いて東美の後に従った。

遠う世界の話、東美の話、アムバートとエメラダの話。自分をさらった一人の話、声霊の話、

そして、真奥の話。

それらの真実を明かす、と言われて緊張の面持ちで案内された店が、よりにもよって、

「どうして回転寿司屋さんなんですか……」

酢飯と海鮮の香りが充満する店内のボッタス席で、千穂は泣きほらした目をこすりながら疑

問を呈した。

「お寿司は嫌い？」

「そんなことはないですけど……」

そもそも好き嫌いの問題ではないだろう。

「はい五番さん、規計二丁目」

「十七番さん、お会計です！」

「ありがとうございます！……えー、色皿が十九枚、金皿三枚……」

店内は盛況らしく、大半の席が埋まっており、卓もひっきりなしに入れ替わっているようだ。店員の掛け声もにぎやかで、とてもではないが落ち着いて話をできる雰囲気でも空気でもない。

第一『異世界からやってきた勇者』が密談の場所に選んだのが寿司屋というだけで、どうやらアクションを取ればいいのかまるで分らない。

「大丈夫よ、私が奢るから」

「そういうことも心配してるんじゃないです！……あと、自分が食べた分くらいは払えます！」

「ええー!?」

すると千穂の言葉に、驚いた声を上げたのはなぜかエメラダだった。

「は、本当ですか？」

「な、何がですか？」

それがバカにしている様子ではなく、本心から驚いているように見えたので千穂も動揺する。

「オスシって生のお魚料理なんですよねー？」

「そ、そうですけど……」

生の魚料理、という考えで寿司を扱ったことのない千穂は目を白黒させる。

「高級料理ですよー？ 配達を警戒するのは分かりますけどもここはエミリアに払ってもらった方がいいですよー」

「え、だって、百円……」

千穂は思わず、席に設えられているメニュー表を指さす。

「回転寿司魚々苑」は中堅回転寿司チェーンで、基本的にはほとんどの寿司ネタが一皿百円（税別）である。

一部の旬の食材や高級食材、味噌汁やアラカルトなどに関してはその限りではないものの、千穂一人が無理やりお腹一杯食べたところで千円を超えるかどうかといったところだ。

「エメ、落ち着いて。ここで私達四人がお腹一杯食べたって、精々がアイレニア銀貨一枚になるかどうかってところだから」

「おー！ そりやマジかぞ」

惠美の言葉に機嫌を上げたのはアルバートである。

「ええー？ 有り得ないですよー！ 生のお魚なんて！ 宮廷生活してた私だって！ 嫁に出るまでそう何回も見たことなかったのにー」

「いいから、とにかく千穂ちゃんも、エメもアルも座って、はいお茶」

惠美は慣れた手つきで、プラスチックの湯呑みに備えつけの粉末緑茶を入れ、給湯口から熱

湯を注ぐと三人に配る。

「この、飯屋で真水や茶が無料つてのも、すげえ話だよなあ」

アルバートは恐る恐る湯呑みに口をつける。

千穂はそんな三人の様子を見ながら段々訳が分からなくなってきた。

異世界の不思議な話をするために来た場所が回転寿司屋である理由も分からないまま、日本文化に驚く外国人のドキュメンタリー番組を目の前で見せられている気分だ。

「で、回転寿司にした理由だけど」

全員に茶とペーパーおしぼりと割り箸と醤油受け皿が行きわたったところで、ようやく恵美が千穂に向かって口を開く。

「ボックス席は広くて隣や向かいの席との間隔が開いてる、周囲は騒がしい、お客は次に何を取るかに集中してて隣やお向かいの会話には注意を払わないってことで、結構密談には向いてるのよ。その割に視界は開けてるから、聞き耳立ててるようなのがいたらすぐに分かるしね」

「……そういうもの、ですか」

千穂は思わず周囲を見回す。

確かに今まで意識したことが無いが、カウンターにでも座らない限り隣のダラープの会話に耳を澄まそうとしてもまるで聞こえない。

お客の視線は例外なく寿司を運ぶコンベアか注文用タッチパネルに注がれており、誰も自分

の席以外に注意を払っていなかった。

都内のビジネス街が近いこともあって外国人客もわずかではあるがいて、アルバートとエメラダもそれほど目立っていないのにも気づく。

「さ、まずは少し何かお顔に入れますよ。難しい話は頭に血が通るようになってから」

そして千鶴が釈然としないながらも状況を受け入れたことを察した惠美は、拍手を打って早速コンペアを流れるお寿司を一皿手に取った。

最初にきょうとは、淡いチヨイスである。

「こうやって、流れているものを取って、食べたならお皿だけ卓に重ねて置いておくの。お会計はお皿の種類と数で決まるわ」

もちろんこの解説は、エメラダとアルバートに向けられたものだ。

ちなみに席順は、コンペアに近い内側に惠美とエメラダが向かい合い、通路側でアルバートと千鶴が向かい合う形になっている。

「この香りはちよっとまだ慣れないですけどでもこれ本当にお魚なんですかー？」

コンペアを流れる色とりどりの寿司を物珍しげに眺めるエメラダ。

「そうよ、生のお魚の身をこの形に切って、依型に握った酢飯の上に重ねてるの」

「あの黒い輪切りの丸太みてえのはなんだ？」

アルバートが、ちよっと流れてきたかっぱ巻きを指さす。



「あれは海苔巻ね。周りの黒いのが海苔って言つて……海苔の加工食品って言えばいいのかしら。丸ごと食べて大丈夫よ」

「わ、わ、わりー！　なんか、お魚の卵みたいのがそのノリ？　に載ってますよーか」

「ああ、あれは軍艦巻きね。載ってるのはイクラっていつて、お魚の卵よ。おいしいわよ」  
「ダンカン？」

「そ、横から見た見た形が軍艦みたいでしょ？　だからそう呼ばれてるの」

「へえー！　酒落がきいてますねー！　そう言われてみるとーあの緑色の風スライスみたいなのがう船の帆に見えますー」

イクラ軍艦に添えられたスライスきゅうりを見て、エメラダは目を輝かせている。

ここからどう真面目な話に展開するのだろうか。千穂は自分そっちのけで盛り上がりつつある三人を冷やかな目で見ていた。

それに、アルバートとエメラダは、箸は使えるのだろうか。生魚はともかく、ワサビは平気なのだろうか。

SUSHIを初めて食べる外国人を見る日本人の疑問をヨソに、

「ま、物は試しだ。エミリア、適当に見繕ってくれ」

アルバートはコンベアを指し示す。

「俺にはどうしても魚に見えねえ。そこの赤いのなんぞ生肉って言われた方が納得できる」

「あ、中トロのこと？ 試してみる？」

アルバートが額で示したのは、ちょうど流れてきた中トロ一貫振りである。

一皿に二貫載っている他のものとは違い、中トロやズワイガニなどの高級ネタは、お値段、お置きの代わりに一皿一貫で流れている。

赤い身に甘そうな白い脂の筋が美しく通っているその様は、確かに生肉と言っても差支えないかもしれない。

恵美は中トロの皿を無造作に取ると、アルバートの前に置く。

その一挙手一投足をまた、エメラダが真剣な観察で見つめている。

「うーん……やっぱ生肉にしか見えねえが……本当にこのまま食って平気なものか？」  
自分の前に置かれた小さな中トロ盛りを、大柄なアルバートが真剣な顔をして睨んでいるのが、どこか滑稽である。

「大丈夫だから。はい、このお醤油……日本特有のソースだと思って……つけて食べてみて。お寿司は手で食べても大丈夫だから」

「お、おう……」

やはり箸は苦手なのだろうか。千穂はどうでもいいことを心の隅で思う。

アルバートは真剣な顔で中トロ握りをつまむと、本当に恐る恐る、といった様子で寿司を醤油にはんのちよっただけつける。

「醬油はシャリではなくネタにつけるのが正しい食べ方と、どこかで聞いたことがあった、千穂だが、今それを言ったところで混亂させるだけだろう。」

アルバートはゆっくりと中トロを持ち上げると、思い切って一口で口の中に入れる。

慣れない食感に戸惑い咽を人の字にししながらこれまたゆっくりと咀嚼する。

そこからの反応が劇的だった。

何か重大な事実に気がついたようにカッと目を見開いたのだ。

その瞬間千穂は、身を乗り出していた隣のエメラダがびくりと体を震わせたことに気づく。

二人共、寿司一貫で緊張しすぎた。

やがてアルバートの咀嚼スピードが速まり、視線が空をさまよい、

「うっ!!」

なぜか鼻を押さえて顔をしかめる。

千穂と恵美は何が起こったか瞬時に理解したが、寿司に馴染みのないエメラダは、

「な、何か悪いものでも……?」

と心配顔だ。

だがアルバートも、顔を曇めたのは一瞬だけ。

すぐに落ち着くとまたしばし咀嚼を続け、そして嘔吐する。

「……………はあ」

アルバートは目を見開いたままの緊張の面持ちで、顔に手を当ててる。

その顔には緊張のあまりか、冷や汗すら浮かんでいた。

「だ、大丈夫ですか？」

心配そうに問うエメラダには答えず、アルバートはなぜか、目の前の千穂に向かって真剣な

口調で尋ねた。

「……焼ちゃん」

「は、はい？」

「……これは……本当に、魚なのか」

「は？」

まさしくアルバートは戦慄していた。

「生なのに、生臭くねえ……いや、それどころか、甘い」

「あ、甘いんですか？」

「あ、ああ、かといって、砂糖の甘さじゃねえぞ？　こう、なんて言っているのか、肉の甘さ

……<sup>肉質</sup>の甘さ、それがこのソースと穀物が混ざり合って、口の中がキゅっとなるような旨み

……ああ、これめ、旨みだ」

使っている単語が寿司屋らしくない上に終盤もはや強白になっているが、アルバートが中ト

口を美味<sup>おいしい</sup>しいと感じたことだけは千穂にも分かった。

「い、一体どういうことですか？」

「いや、これは、いや、エメ、食え、お前も食え、そうじゃなきゃこれは分からねえ。俺は、信じられねえ、これが魚だとか？俺達が今まで食ってきた、煙と塩の味しかしねえものと同じ食い物とは思えねえ……」

言うなりアルバートは、頭を抱えて卓の上に突っ伏してしまふ。

「あ、アルバートさん？」

「懐かしい。私も初めてお寿司を食べたときには、こうだったわ」

アルバートの大袈裟なりアタシヨンに千穂は懐けるが、恵美はどこか感傷深そうに遠い目をしていた。

「ううう……でも、なんか途中でウツてなってませんでした？ やっぱ臭みがあるんじゃない……」

エメラダはといえば、食え、と言われたもののアルバートが具体的なことをあまり言わないので不安が拭えないらしい。

エメラダが「途中でウツてなって」と表現したのは、アルバートが鼻を弄さんだからだろう。それが新鮮な「わさび」による刺激であることは日本人であれば周知のことだが、千穂はさう言おうとしてふと悩む。

わさびって……何？

その存在や概念を知らない人間に対して、錦くれだった緑色の植物の根をすり下ろして作られる、辛みと甘味と鼻に抜ける独特の刺激のある香りが特徴のライムグリーン色のペースト状の物体の意味と味と存在意義を、どう伝えれば良いのだろう。

無暗に説明しようとすればするほど、毒物としか思えない単語の羅列になってしまい千穂は悩む。

恵美もナーブル醬えつけの使い切りわさびの袋を手には悩んでいたが、千穂と同じ考えに至ったのか何も言わずにわさびを山に戻した。

と、

「ならさっきのイタラはどうかしら？ 丁度来てるし、これはアルが『ウア』ってなったのは入ってないから食べやすいと思うわ」

アルバートの衝撃の独白の間にコンベアが一周したのか、エメラダが最初に目をつけたイタラ軍艦がまたやってきていた。

「魚の卵なら、食べたことあるでしょ？」

「は、はい……でもう、魚醬と塩で煮しめたものでしたし」

「食べられなかったら私が引き受けるから」

「う、ううう」

エメラダは死にそうな顔で、流れてくる赤いイタラの軍艦を凝視している。

「アルも言つてたでしょ。物は試しよ」

「わ、分かりましたよし、えいっ！」

イタラ一つ取るのに気合いが入りすぎている。

エメラダは自分の前に置いてからもさんざん遠慮した末に、軍艦の海音を強く掘りすぎて崩しそうになりながら、小さな口になんとか一口でいくらの軍艦を放り込み、最初の一噛みで、目を見開く。

そして、

それ以降、異世界の人間同士の真面目な話し合いは、二時間経つても始まらなかったのだ。た。

「……六十五」

千穂は、テーブルに載った皿の数をカウントしてそうつぶやいた。

もちろん四人で食べた寿司の皿の枚数である。

「エメ、俺、この国に住みてよ」

「はい、憎むたくないです……」

大柄なアルバートはまだ分かるが、千穂より小柄なエメラダも、この小さい体のどこにそれ

だけ入るのかと目を疑いたくなるような勢いで寿司を食べ進めた。

六十五枚中、千穂が食べたのは箸りの連環もあってわずか六枚。恵美が十枚と女性にしてはそこそこ食べているが、残りをエメラダとアルバートが折半していることを考えれば、ほとんど誤差の範囲である。

「食い終わった後に言うのもなんだが、本当にこんな美味いもんをこんだけ食ってもアイレニア銀貨一枚なのか」

茶をすすりながらアルバートが恵美に尋ねる。

「二枚、かしらね」

恵美も、さすがにこの枚数は予想外だったらしく苦笑していた。

「『ビヤクエン』って、凄いですねー」

千穂の隣では、エメラダが至極の顔でシートにもたれかかっていた。

「あんななめらかでー、甘すぎない美味いケーキは初めて食べましたー。宮庭の砂糖の味しかないケーキをもう食べられないですー」

エメラダは寿司以外にも、ポナトやから揚げなどのアラカルトや茶碗ん蒸しに味噌汁、果てはデザートにまで手を出していた。

中でもチョコレートケーキは相気に入っただけで、三皿は食べていたように思う。

「あのケーキをウェズ銅貨五枚と同じ価値の貨幣でなんてー、ちよっと償じられないですー」。



セント・アイレでこんなケーキを食べようと思つたら、一体いくら取られるか、それ以前にどこにあるか……」

エメラダは手放しで絶賛するが、千穂にとって回転寿司屋の百円のケーキは、やはり百円のケーキだ。

千穂の家の近所にある安くて美味いケーキ屋のことを思い出して、案内したらどうなるだろうとふと想像する。

すると恵美が、

「千穂ちゃん、お腹一杯になつた？」

「……お二人の、見てるだけでなんだか」

千穂も普段特別少食というわけではないが、それを添し引いてもエメラダとアルバートの食いつぶりには圧倒されるものがあつた。

「確かにね」

恵美は二人の様子を見てもありなんと頷くと、自分も一口茶をすすってから、姿勢を正した。

「ところで千穂ちゃん、突然だけど、私達、何かあなたと違ふところ、あるように見える？」

「……まあ、お腹の容量は置いておくとして」

「……へえ」



あまりにも唐突な問いかけに、千穂は目を瞬かせる。

「一応、ここには真面目な話をするために来たことは忘れてないつもりよ。まあ、ちよつと食べすぎたかもしれないけど」

「はは、面目ねえ」

「だって美味しかったですし」

思ひれる様子の無いアルバートとエメラダ。

そこで千穂は、ようやく寿司を食べはじめる前のことを思い出す。

「エメもアルも私も、あなたと同じ人間よ。まあ私は天使が半分らしいけど、少なくともお腹の容量だけで言えは二人の方が化物じみてるわよね」

「は、はあ……」

どうやら本当に更紗が真面目な話をするらしいと察した千穂は、お茶で口の中を濯ぎ、自分も姿勢を正す。

アルバートとエメラダは、満腹姿勢のままだ。

「二人が最初、生のお魚についてあれだけ疑ってたのは、私達の世界では庶民の食卓に生のお魚が上がることはまずあり得ないからなの。日本みたいに物流や冷凍技術が発達してるわけじゃないから、大抵は醃製にしたり塩漬けにしたりしたものを焼いて食べるくらいね。それだって十分に高級品。一年に一回あるか無いかのレベルよ」

千穂は、その話を聞いて父の実家のことを思い出していた。

千穂の父の実家は山間の農家であり、正月などには鯛を丸ごと一尾使った料理が必ず食卓に供される。

かつて海の魚が高級品だった時代の名残なのだろうだ。

「でも、私達はそういう国で生まれ育った。だからこう考えてもらおうと、少し分かりやすいかもね。千穂ちゃんは今まで知らなかった、日本とは縁もゆかりもない科学の理れてる国から、私達はやってきたのよ」

縁もゆかりもない割に三人共日本語があまりに流暢すぎるが、そこは突っ込むべきところではないだろう。

「その国、世界の名前が……」

「『聖十字大陸エンテ・イスラ』。私達はそのエンテ・イスラで暴虐の限りを尽くした魔王を追って、この国にやってきた。その魔王こそが、あなたの知ってる、『真奥貞太』なの」

その瞬間、千穂は胃の膽がぐっと重くなるのを感じた。

それは目の前のアルバートの食いつぶりに乗せられてつい海鮮サラダ軍艦を二枚も食べてしまったからではないはずだ。

真奥の名が、なぜかとても遠くに聞こえてしまう。

「遊佐さん……あ、あの、そういえば『遊佐真実』って名前……」

東美に尋ねようとして、ふと、その名が彼女の本当の名前でないことを思い出した千穂。  
早速言いよんどんでもしょうが、

「今まで通りでいいわ。当分日本にすることにするつもりだし、外で会ったときに「エミリア」とか呼ばれても困っちゃうから」

東美はそう言って肩を絞めてから、

「千穂ちゃん、私は……あなたが今、何に悩んでいるのか、ある程度分かってるつもり。でも、立場上、あなたの悩みを解決していいものかどうか、判断できないでいるわ」

そう厳しい声色で言う。

「今日笹塚に来たのは、魔王達のこともあるけど、第一に千穂ちゃん、あなたに会って確かめないことがあったの」

「確かめたいこと？」

「ええ、あなたは、私達と真真真夫の正体を知った。そして魔王は日本の中でした。あなたの記憶だけは消さずに残している」

千穂は息を呑む。

確かにその事実、千穂の胸から拭えない懸案の一つだった。

何故真真は、自分だけ、自分の記憶だけ特別扱いしているのか。

「そのことの意味を考えながら、どうして私や魔王が日本に来ることになったのか、聞いては

しいの。きっと、あなたにとっては辛い話になるわ。聞きたくなければ、それでいい」

恵美は「瞬間エメラダとアルバートに目くばせした。

二人はいっぱいになったお腹をさすりながらも、目だけは恐ろしく真剣だった。

「どうかしら。私達と真奥……魔王の戦い。奴が魔王として私達の世界に現れ、私が勇者として立ち、今日まで続いた因縁の話を聞いてくれる？ しつこいようだけど、決して生易しい話じゃないわ。聞きたくなければそう……」

千穂は、恵美に昔まで言わせなかった。

「聞かせてください」

「……いいのね？」

「私、知りたいんです。私が知っている真奥貞夫という人が……本物なのか、偽物なのか」  
その千穂の言葉を聞いた瞬間、エメラダとアルバートは顔を真赤なせた。

「今まで、何をしてきたのか、どこから来たのか……本当は、どんな人なのか」

「まあ、俺らにしてみれば、あの魔王サタンが人間に口を使われて飯屋で働いてるってだけで、本物だとは思いたくねえんだがな」

「アル、変な事々入れないで」

恵美が言わないでおいたことをアルバートが簡単に口に出すので、また千穂の表情が硬くなる。

「それじゃあ順を通って話していくわ。しつこいようだけど、聞きたくなくなったらいつでも止めてもらっていいわ。それくらい、ハードな話になるから」

「分かりました」

千穂は、決意を込めて頷く。

「……じゃあ、話すわよ」

恵美も千穂の決意を感じ取ったようで、はっきりした口調で語り始める。

「魔王が大勢の悪魔を率いてエンター・イスラにやってきたのは今から七年前……私が、十歳のときよ」

「え!? 邊佐さんって私と一歳しか違わないんですか!?」

千穂は恵美の話の内容から導き出された真実に驚きを抑えず、初っ端から話の腰を折った。

そして恵美は語り出そうとして開いた口をしばしばくばくと動かし、顔に手を当てる。

「……その驚きの意味するところがなんなのか、追及するのはやめておくわ。私の年齢と今の仕事の関係についても、後でちゃんと話すからまずは聞いて頂戴」

「あっ……す、すいません」

千穂も、今の自分の発言は、恵美の見た目が実年齢よりずっと上に見えていたと取られても仕方のない驚き方だったと即座に反省する。

「と、とにかく」

夏美は一つ嘘払いをして、続ける。

「世界中が魔王軍と戦って、負けて、次々に国が支配されていって、ついにルシフェル……あなたを誘拐した、あのチビね……の軍が私の村に追ってきた日に、私は魔王を斃す勇者の使命を負わされたの。まだ、何も知らない農家の娘だった私が」

千穂にとって予想外だったのは、全てを聞き終えても自分の心に大きな変化が無かったことだった。

夏美は語り口に、敢えて感情を乗せなかったのだと思う。

魔王軍のせいで父親を喪った、という箇所以外は、努めて自分が見聞きしたことを年表順に箇条書きにしていくように旅の話をつづった。

異世界エンテ・イスタの人間と悪魔の戦い。

高屋を含む魔王軍四天王、悪魔大元帥達が人間世界を侵略していったこと。

それを指揮していた魔王サタン。

族の間に見てきた悲劇の爪痕。

人間世界の反転攻勢。

魔王城で勇者の一行と魔王サタン・悪魔大元帥アルシエルが対峙した最後の戦い。



「不慮の事故による（と思われていた）恵美の日本滞留、  
監視での、勇者と魔王の再会……」。

「冷静に考えよう」

隣から、申し訳なさそうにエメラダが言う。

「ごはんの後にする話題じゃなかったかもですわー」

エメラダもアルバートも、終始千穂の顔色を半面通りの意味で窺っていた。  
刺激の強い話で千穂の気分が悪くなりはいないか、心配していたのだろう。

だが千穂は、想像していた以上になんのシロクタも受けていない自分に驚いていた。

「大丈夫か？ 気分悪くなったりしてねえか？」

アルバートの声は優しくかったが、千穂は自然に首を振った。

「大丈夫です。ありがとうございます」

千穂は大きく深呼吸をすると、

「質問、していいですか？」

「どうぞ？」

「遊佐さん達が魔王サタンに会ったのは、魔王城の決戦が最初ですか？」

「……………」

恵美とアルバートとエメラダは、説明顔を見合わせた。

質問の内容が予想外だったからだろうか。

代表して恵美が応える。

「いいえ。私達がエンター・イスラ東大陸を解放したときが最初ね。アルシエルの撤退を許可しに現れたのが、初顔合わせかしら」

「なら、魔王城の決戦が二回目？」

「……そうね」

千穂は得心したように頷く。

その表情に、三人は訝しげな顔をした。

千穂が何に納得しているのか、訝り兼ねているのだろうか。

それには構わず、千穂は続ける。

「色々話してくださって、ありがとうございます。正直、実感には堪えませんが、遊佐さん達が嘘を言っていないことは、あのときのことを思い出せば分かります」

口にするのは勇気が要る。

でも、この面々の前では今更だろう。

はやる心を抑えながら、千穂は口を開いた。

「最後に一つだけ、聞いていいですか？」

三人の目をしっかりと順繰りに見ながら、息を吸う。

「私は……このまま真樹さんを好きでいて、いいですか？」

※

「はああああー」

エメラダは、まるで子供のように目を輝かせて、少々みっともない声を上げながらショーケースに張りついている。

ショーケース内には色とりどりのケーキが並んでおり、千穂の家ではケーキといえば、この『バティシエ・ティロン』のケーキが定番であった。

「かっつわいいいいいですねえー」

定番のショートケーキやチヨコレートケーキやセンブラン以外にも、個人経営の店とは思えない多様なケーキを日替わりで提供している。

大きな店ではないので一日に店頭に出される種類は多くないが、今日はフルーツタルトとチヨコレートケーキ系が多く見られた。

「え、え、エミリアー、いくつまで買っていますかー」

「ガキじゃあるめし」

興奮しすぎた様子のエメラダにアルバートはやや引き気味であるが、エメラダはそんなこと

には構わない。

「おっさんはいらないうっていつてるんでーその分忍買つていいですよー」

「おっさ……」

「エメ、落ち着いて、全部買うわけにいかないんだから、千穂ちゃん、おすすめ教えてくれないう。」

恵美の常識的なお母さん発言に千穂が応えるより早く、エメラダが不満の声を上げる。

「ええええええええー！ 全部買いましょうよう？」

「私の財布にも限度があるのー」

「ですから国に帰ったらきちんと色々返りますからー」

「日本で使えないお金や〇しに分不相協な宝物とか返られても困るのよ」

見た目に反してエメラダの方が恵美より年上と聞いていたのに、二人のやりとりを観察していると恵美が縮ポジションについているとしか思えない。

千穂は、私の好みですけど、と前置きし、

「……ええっと、ロールケーキは間違いないですけど、シュークリームは種類あるし、あと面白いのはタヌキのケーキとか……」

並ぶケーキを順々に指さす。

「タヌキー!? お肉が入ってるんですかー!?」

「遠いです。チョコやマジパンを細工して、タヌキみたいな形にしてるだけです。その端っこの……」

「あああう…… かわいいいいいいー！ エミリアー！！」

「……はいはい、じゃあ一つはそれね。あと一個よ。アルは本当にいいのね？」

「ああ。俺の分はそのガキに一個くれてやってくれ」

おっさん呼ばわりには腹巻するアルパートだが、エメラダは横わず、

「ええうあと一個う……むう……」

真剣な顔でシューケースと腕めっこしている。

夕刻の笹塚百貨店通り商店街。

回転寿司屋を出た四人は、千穂の案内でお土産のケーキを買いにやってくる。千穂は、

寿司屋には申し訳ないが、エメラダに、あれが日本のケーキの標準と思われても困る。

果たして色とりどりのケーキにエメラダは夢中になってしまっていた。

「でも、意外だったわ」

「何がですか？」

エメラダの背を見ながら、恵美が言う。

「あんなことを聞かれるとも思ってたし、本当のことを話したらもう、私達とは関わってくれないんじゃないかと思ってたの。まして、エメのためのケーキ屋さんを案内してくれる

なんて」

「遊佐さん達があの答えをくれてなかったら、多分こんなことしてないです」

微笑む恵美にしかし千穂ははっきりと言った。

瞬間恵美は、目を丸くする。

「だって、他に答えようがないじゃない？」

「そんな遊佐さん達だから、美味しいケーキ屋さん紹介しなきゃって思ったんです」

千穂は意気込む。

※

「私は……このまま真実さんを好きでいて、いいですか？」

千穂のこの問いに、恵美はしばし逡巡したのちに、こう答えた。

「その気持ちをおあなたから奪うことは、私達にはできないわ」

恵美に続いて、アルバートが口を開いた。

「エミリアが爆りもしねえ、魔王も殺さねえって言うんで最初は驚いた。でもな嬢ちゃん、あんたを俺達の事情に一方的に巻き込むのはフェアじゃねえって思えるくらいには、今の俺達にも余裕はあるんだ。まあ、本当言っちゃえば、あんたが何もかも忘れてくれたら、魔王を認

して悲しむ奴は誰もいない、野郎をぶっ倒してめでたしめでたしで済んだんだがな」

「アルはまた余計なこと言うう」

エメラダはどこまでも正直なアルバートを詰める。

「もちろん応援はできませんし、魔王が今後危険な行動に出た場合は、千鶴さんの気持ちよりも魔國の人の命や安全を優先しますすけど」

「私も、エメも、アルも……友達を泣かせる趣味は無いの。元々魔王をこっちの世界に逃がしたのは私達が負うべき責任で、あなたにはなんの関係も無い。だから、私達の、エンテ・イスラの話を聞いてもまだあいつのことを好きだと言うなら」

恵美は寿司の皿を律儀に十枚重ねの山に分けながら言った。

「私達に構う必要は無いわ。あなたの気持ちには、これからもずっとあなた自身が決めて」

## 巻

「それじゃあり私達は明日にはエンテ・イスラに帰っちゃいますすけど」

「エミリアのこと、よろしく頼むぞ」

管駅（パイステーション）の改札。

結局恵美を拝み倒して大量に購入したターキが入った大箱を抱えて満足顔のエメラダと、そ

れを苦笑して見下ろすアルバートから、千穂はそう別れの挨拶を告げられる。

「この国はいい国だ。飯は美味いし金も物も豊かにある。順ちゃんみたいないい人間もいる。エミリアはこの国で少しゆっくりした方がいい」

切符売場でエメラダとアルバートの分の切符を買うために料金表を眺めている恵美をちらりと振り返る。

「あの娘に私達以外の『友達』ができたのは初めてのことですから、私、本当に嬉しいです」  
「え？」

エメラダの語尾から酸味が消えて、千穂ははっとする。

「魔王を放置しておくのは不安だか、なんだろうな、魔王が自分の意志で順ちゃんの記憶を残してゐるのが、妙に納得できるというか」

「エミリアの顔が、見たことも無いくらい明るくなってるのはきつと、この日本って国で千穂さんや魔王に出会ったせいだと思います。色々厳しいことは言いましたけど、エミリアのいい友達でいてあげてくださいね」

すぐに学校の調子に戻ったエメラダ。

その思いのこもった言葉の裏を、千穂は読むことができなかった。

日本で戦を得るために年齢を二十歳と偽っているが、恵美の実年齢は千穂と一つしか変わらぬ十七歳だという。



十七歳の少女が世界の運命を背負い、世界の壁を越える戦いを強いられていること、そして彼女一人に運命を背負わざるを得なかったエンテ・イスラの人間世界の不変なるを、今の千穂に察しろという方が無理だろう。

千穂の反応が薄いことに気づいたエメラダはそれ以上は何も言わず専ら微笑むと、きつと真面目な顔を崩して千穂に顔を寄せる。

「それに、あんまり心配しすぎなくても、大丈夫だと思いますよ？」

「エメラダさん？」

「魔王もさつと自分のことを千穂さんに覚えていてほしいんですよ。だからあまり悩みすぎないで、少しずつ理解していけばいいんだと思います」

「そ、そ、そうですか？」

「あー、エメの言うことはあんまり真に受けんな。基本無責任なんだからよっぐっ」

エメラダの無言のトキキッタをもらったアルバートが悶絶し、その威力に千穂まで嘔み上がったところに、

「お待たせ、カード使おうと思ったらチャージ足りてなくて、切符買うの手間取っちゃった」  
恵美が切符を二枚持ってきてきた。

「なんの話してたの？」

「いや、別に。……いてて」

「エミリアのことをよろしくって言ってただけです」

「そう？ それじゃ私達はそろそろ帰るわ。千穂ちゃん、今日は時間取ってもらってごめんなさいね」

「いいえ」

千穂が首を横に振ると、恵美と一緒に改札に向かおうとするエメラダと、なぜか目が合った。

「あ、そ、そうだ、遠征さん」

「ん？ なあに？」

先ほどのエメラダの言葉が何を意味しているのかは分からない。

だが、千穂の生きてきた、恵美とは全く違う人生の中で、ごく自然に行われてきた「友達」との儀式を提案していた。

「携帯……」

千穂は自分の、折り畳み式携帯電話を取り出すと、

「あ、それドコモのP.N. 0411Sのフラワーピンクね？」

さすが、携帯電話の関係会社に勤めているというだけあって、背面の形を見ただけで千穂の携帯電話の型番どころか他の名前までも言い当ててる恵美。

やはり、異世界の勇者、という経歴は、納得がいかない。

心の中で苦笑しながら、千穂は自分の携帯電話を握って一呼吸置くと、恵美の目を真っ直ぐ

見て言った。

「私と、番号とアドレス、交換してもらっていいですか？」

「……え？」

「まだ……私には、判断できないんです、決められないんです。いっぱい悩んじゃうと思います。迷惑かけると思いますが、それでも、私、もっと知りたい。色々な話を聞きたい。お話ししたい。エンチ・イスラのこと、真壁さんのこと、それに、遊佐さんの、エミリア・ユスティーナのこと……」

「千穂ちゃん……」

恵美は、千穂の思わぬ申し出に立ち尽くす。

エメラダとアルバートは、その後ろで安心したような、困ったような笑顔で顔を見合わせた。

「もし良かったら……」

夜に悪魔に伏え、朝に復讐に溺き、世界を燃えて刃を磨き、權を得るため人に見える己を偽つてきたエミリア・ユスティーナと、

「私と、友達になってくれませんか」

全てを洗滌された当たり前の世界から、地球上の誰も知らぬ未知の世界へ一歩踏み出した佐々木千穂は、

「これからこそ、よろしくね」

異世界の少女の手を、強く握ったのだった。





**魔王、節約生活を繰り返る**

夕方の百号通り商店街は、買い物客と仕事や学校から帰ってくる笹塚駅の利用客で一氣に  
 満ちあふつゝ。

人ごみを器用に避けながら店先を流し見して、その日の夕食用の食材を吟味していた鎌月鈴  
 乃はよと、小柄な鈴乃の目線でも気づくほど頭一つ背の高い見知った後ろ姿を発見した。

街中で偶然出会ったからといって別に親しげに声をかける同柄ではないが、住んでいるアパ  
 ートの部屋は隣同士だ。それに彼の安売りをかきつける喫食は悔れない。

「声くらいはかけておくか」

ヴィラ・ローザ笹塚二〇一号室の住人、声屋四郎の後頭部を見ながら近づいていく鈴乃は妙  
 なことに気づく。

「ん？ あそこの店はこの間テナントが撤退したと……何をしているんだ」

声屋は、シャッターの閉まった店の前で、ぼんやりしているようなのだ。

道の端だから通行の邪魔にはなっていないが、音波の声屋なら道端でぼんやり立ちどくすよ  
 うなことはまずあり得ない。

「おい、四郎殿、どうした」

鈴乃は声屋に近づき、様子を窺いながら声をかける。

声屋の両手には買い物物の荷物と思しき二つの袋。片方は彼が常用しているエコバッグだが、  
 もう片方は妙に大きい紙袋で、中身もかなりの重量物のようだった。

「……おい、四郎殿、四郎……アルシエル！」

一度声をかけても気づかないのか、西屋は振り向かない。

普段彼を日本の下の名で呼ぶのは鈴乃しかいないため、もしかしたら気づいていないのかと思ひ、雑踏に紛れて本当の名を呼んでみると、

「……………ああ、クレスナイア・ベル」

西屋はようやく振り返った。だが、明らかに様子がおかしい。

目の焦点が合っていないし、何より往來で鈴乃のことを本名で呼ぶなど、注意深い西屋にはあり得ないことだ。

「ど、どうしたんだ。どこか具合でも悪いのか」

最近本来の立場を忘れて、単なるご近所さんとして接することの多くなった彼の様子がおかしいことに、鈴乃は純粋に心配になる。

「これ……」

すると西屋は震える声で、彼が今まで右手に持っていた重さうな紙袋を持ち上げてみせた。

「ん？　なんだ、何が入っている……」

鈴乃は大きく開いた紙袋の口から中を覗き込んだ。

するとそこに入っていたのは……。

「当たったのだ」



「は？」

声屋のぼんやりとした声が頭上から降ってきて、鈴乃は紙袋の中に入っている箱に書かれた文字の意味を理解する前に顔を上げる。

「こんなことはあり得ないと……空想上の讀みと誤っていた……」

日本人、いや、地球上の人間からしてみれば十分空想上の存在である声屋が、ゆっくりと視線をある方向に進ませる。

鈴乃もつられてそちらに顔を向けると、そこには白い天幕が設置されていて、「百号通り商店街大福引大会」の文字が。

「……おいアルシエル、まさか今ここでぼんやりしていたのは……」

鈴乃は、一瞬でも声屋を心配したのが急速にバカバカしくなる予感に囚われた。そうして改めて紙袋の中を見る。

順文のようなボール紙の箱の表面には大きく「デ・アール 圧力鍋 4L」の文字。鈴乃の口から大きなため息が漏れた。

その銀色の剛体に煩うりせんばかりの声屋を見て、ヴィタ・ローザ館（二〇一）号室に集まった全員がかすかな憐憫の情を覚えた。

かつて異世界エンテ・イスラの一大陸をその膝下にひれ伏させた悪魔大元帥アルシエルが、  
 招引で圧力鎧を手に入れたことを小躍りしながら喜んでいるのである。

彼らを討伐するべく日本に渡った勇者エミリアこと姫佐恵美をして、その姿は同情するに余  
 りあるものだった。

「魔王、ルシフェル。あなた連絡つかしくないの？ こんなことさせておいて」

「いや、その」

恵美の厳しい視線に魔王サタンこと真奥真夫は唇を引き結んだまま俯いてしまい、

「招引で圧力鎧を当てたくらいで茫然自失するほどに身を粉にして貴族らの生活を支えている  
 のだ、少しは労ってやったらどうだ」

「えー、まあ……うーん」

鈴乃に説教される悪魔大元帥ルシフェルこと漆原千蔵は面倒くさそうな声を上げる。

「吉屋さん、本当に嬉しいんですね」

「おなべ、うれしいの？」

「うん、あのお嬢ね、買うととっても高いんだよ」

そして地球上でただ一人、真奥や恵美の真実を知る人間、佐々木千穂は、魔王と勇者の  
 「娘」であるアラス・ラムスに吉屋の喜びをなんとか理解させようとする。

恵美と鈴乃の非難の視線に耐えられなくなった真奥は、わざとらしい笑みを浮かべて吉屋に

言った。

「そ、その、なんか、悪かったな、今まで苦分のかけ通しで」

「何を仰いますか魔王様！ 今日この日のことを思えばこれまでの苦分など！」

唐屋は真美の気遣いを受け取ったのかより一層笑顔を見せて、新商品の輝きが眩しい圧力鍋をシンクに運び、流水で洗いはじめた。

早速今日の夕食の支度にでも使おうとしているようだ。

「どんな苦勞してきたか知らないけど、圧力鍋一つで吹き飛ぶ悪魔大元帥の苦勞ってなんなの」そんな唐屋の背を見ながらの真美の突っ込みも致し方なし。

唐屋の普段の生活を知る人間にしてみれば、圧力鍋獲得が彼の主夫生活に於いて非常に大きなインパクトをもたらしたことは理解できる。

が、唐屋の正体を知る人間にしてみれば、鍋一つで解われる苦勞が果たして大きいのか小さいのか、それこそ鍋の割りようがないのだ。

「高いとは言うけどさ、実際のところ、この鍋どれくらいの値段なの？」

真美と同じように、唐屋の背を見ながら胡散くさげな顔をする唐屋は、圧力鍋の空き箱を手元に取り寄せて眺める。

真美もつられてそちらを見ると、唐屋の言葉に千穂がこともなげに答えた。

「小っちゃいのも一万円以上するのがありますよ」

「いぢまんえんっ？」

その瞬間、漆原の手から箱が零れ落ち、真真も驚愕で額が外れそうになる。

「な、箱一つで一万円？ 何それ？」

「そ、そんなに高いのか？ これ？」

驚く陸大使と悪魔の王の横から、恵美が箱を手に取り言った。

「一万なら安い方よ。これ4リットルって書いてあるから二万円以上するんじゃない？」

「にまんえん？」

再び真真が叫んで、驚きの余り鼻から涙を浮かす。

「そ、そんなにするならどっかに売ってお金にした方が……」

「嫌です」

会話をきちんと聞いていたのか、真真が思わず漏らした言葉に漆原が敏感に反応した。

「日用品など未使用でも売ったところで二東三文にしかありません！ 私は絶対にこれを手放しませんよ！」

「分かった分かった！ ちょっと言ってみただけだって……」

漆原の剣幕に、真真は慌てて発言を取り消した。

「前々からチヤシューというものを作ってみたかったです！ それにこれだけ大きければポトフやシチューも思いのまま……ああ！ 夢が広がる！」

鍋から湧き出る夢がとめどなくなっている吉屋に対して、

「そのまま鍋の中に夢を広げて世界征服願めないかしら」

「吉屋さん、醒いてる！」

「苦勞したのだな……アルシエル」

恵美、千穂、鈴乃の口から次々に同情その他の感情が湧き出てくる。

「おい漆原、あの鍋に触るなよ。まかり間違つて壊したりしたら、後遺症されるぞ」

「僕が鍋なんか触るわけないだろ。今日の吉屋怖いよ」

一方の真奥と漆原は、今まで見たことも無い吉屋の姿に少々引き気味だ。

「でも吉屋さん、手に入れてすぐに圧力鍋使う料理できるんですね」

「まあ、料理本とかで下調べだけは色々してるみたいだからなあ。しかし二万円の鍋かあ」

真奥はキッチンに並ぶ調理器具を遠目から見やる。

「フライパンなんか、確かスーバーで七白円くらいで買ったやつだったっけか？」

「そうですね。包丁も千五百円くらいだったかと。鍋に至りては十分細身になってしまいました。

それだけに圧力鍋など、夢のまた夢と思つておりました」

圧力鍋を洗い終えた吉屋は、布巾でさっと水気を拭き上げる。

「置く場所の問題もありましたし、油濾し器を買ったときにこれ以上調理器具を増やすのを諦めたことを思えば、本当に今日はいいい日です」



酒屋の発する一言一言には、隠しよりの無い圧力論に対する喜びが透っている。

「日本に來たばかりの頃は、調理器具の制約のせいで節約料理すら作れないことがありましたからね」

「節約料理が作れない？ どういうことだ？」

鈴乃が首を傾けると、恵美が顔を上げた。

「節約料理って、要するに普段捨てちゃうカイワレの根とか食べ終わった後らとっておいて育てて使うようなことよね？ アラス・ラムスが玉ねぎのお茶が好きで、最近私も玉ねぎの皮をとっておいてるわ」

「玉ねぎのお茶あ？」

玉ねぎとお茶という、日頃あまりリントしない単語を繋ぎ合わせる恵美に顔を顰める真真だが、それを拾ったのはやはりと言うか、当然と言うか、声限だった。

「外側の茶色の皮を煮出すのだろう？ 砂糖や蜂蜜を入れて飲むと聞くが」

「大丈夫なのかよ、そんなもの子供に飲ませて、確か蜂蜜って赤ん坊には毒なんだろ」

「あん、ばばわしやわしややーの」

真真がアラス・ラムスの髪を撫でると、アラス・ラムスはくすぐったそうに微笑む。

「それくらいあなたに言われるまでもないわ。あげすぎには注意してるし、それに乳児ボツリノス症を引き起こす可能性があるのは一歳未満の猫が未発達な頃だけよ」

「まあ、カイワレや玉ねぎ茶くらいなら良かったのだから。本格的な節約料理は、調理環境が整っていないとできないものも多いのだ。例えばそうだな……枝豆のサヤの揚げ物などはその典型だな」

「枝豆のサヤって食べられるんですか?」

芦屋が挙げた例に千鶴が目を見開いて驚き、

「悪魔が枝豆のサヤを食べようと思うことに疑問は無いの?」

寛美が別ベタトルで驚く。

「普通はもちろん食べはせん。だが日頃は捨ててしまうものも調理次第では食べられるという意味での節約料理として紹介されることが多いのだ」

芦屋は話しながらも、手早く手元で噂の玉ねぎの皮を細いてゆく。

「枝豆のサヤ揚げは上下のスジとヘタを取り除いてからサヤを二つに割り、小麦粉をまぶして油で揚げるだけで簡単に作れる、と言われていた。だがな」

芦屋はさらにジャガイモ、ニンジンなどを大き目に切つてゆく。

「そもそも小麦粉や揚げ物用の油を大量に使う時点で、昔の我々にとっては節約料理でもなんでもなかった」

日本に流れ着いた当時の、真鍋に金が無かった頃の真虎と芦屋にとっての節約料理とは食材が安価なのは当然として、さしずせそ以外の調味料を必要とせず、かつ調理器具への投資が不



要なものに限られていたのだ。

揚げ物を作るには大量の食用油を必要とするが、一度使った油は小麦粉の汚れなどの影響で酸化しやすく、適正に保管しなければ使えなくなってしまう。

廃棄物の生活では揚げ物の油を一度で廃棄するなどあり得ないため、揚げ物をするには大量の油を再利用できる環境が必要になる。

しかしそのためには耐熱濾過し器や濾過用のキッチンペーパーを用意した上で、濾過後に保管した油が劣化しない内に新たに油を使った料理をするなどの総合的な対策が必要になるのだ。

枝豆のサヤのような、本来捨ててしまうものを食べる、というのは一見節約の理に適っているように見える。

だが、節約をするための環境を整えることは、ギリギリの生活をしている間は不可能なのだ。「それに揚げ物用の鍋は焼いたり煮たりする鍋とは別にしないと寿命を縮めるし、洗うときにはより多くの洗剤が必要だ。そもそも節約料理を作りたいがために新たに調味料を買い足すなど愚の骨頂。家庭料理とは、冷蔵庫の中に残ったものを最大限生かし、長期的な観点でも資金を必要としないレシピこそが……」

「もう分かったわー！ 分かったわよー！ 私が悪かったわよー！」

恵美は別に何も悪いことはしていないが、部屋から出る節約料理への思いを止める為に敗

て謝る。

「なんだ、折角フライパン一つ包丁一本でできる節約料理を教えてやろうというのに」

「間に合ってるから結構よーほら、アラス・ラムスがあなたが新しいことしてるの分かって楽しみにしてるから、はやくご飯にして頂戴」

「ふむ、そうか。しばし待て、初めて挑戦するから慎重を期さねば。コンソメは……最初は少し入れてみるか」

アラス・ラムスの視線に気づいた声屋は、一つ頷くと手元の料理に集中しはじめた。

「まあ……」

声屋の熱気が冷めやらぬ中で、真真が苦笑する。

「あの頃は確かにその目を流ぐので精一杯だったからなあ。声屋が本当に料理にこだわりはじめたのなんて、俺がマダロナルドに入ってからじゃなかったかな」

真美との戦いに敗れて日本に流れ着いた真真と声屋の手には、正真正正何も無かったのだ。ヴィタ・ローザ館の大家志波美輝の厚意が無ければ、それこそ栄養失調で死んでいてもおかしくなかったほどに。

「あの頃はよくプロッコリーの芯とかも食ってたしスーパーで捨てられてるキャベツの葉とかもらったりしてたしなあ。あとはなんだってまよしたまよしー」

プロッコリーの芯は、皮の固い部分だけを削いでから煮の目状にし、キャベツの外側の葉も

傷んだ部分を丁寧に取り除けば、炒め物にも汁物にもサラダにも使える万能食材となる。

もやしはスーパーに行く日を選べば十四前後で購入できることもあり、量も揃えて栄養も豊富だ。

もちろん恵美が言っていたような再生野菜も多く食べたし、パン屋が出す食パンの耳や豆腐屋が出すおからなど、格安で手に入る食材はなんでも試してみた。

そんな努力の甲斐あつてか、なんだかんだで腹が膨れなかった日は減るに無かったように思う。

「……僕そんな生活したくない」

「そんな生活の中でも西屋は、結構頑張って工夫して色々作ってたから、それはど食生活は貧しくなかったんだぞ」

ふつくと言う西屋の背中を、真央は軽く蹴る。

「感謝しろよ傲慢し。お前がそんな悠長な生活してられんのも、西屋の節約生活の賜物なんだからな」

魔王城の今の生活しか知らない遠原に対して、真央は剣を刺すようなことを言った。

「……西屋さん、何かお手伝いすることありますか？」

すると、そんな要魔達のやりとりを見守っていた千穂がおもむろに立ち上がり、西屋に声をかける。

西屋は微笑みながら振り返ると、

「よろしいのですか？　でしたら冷蔵庫の下の方にトマトが二個入っていますのでそれを摘み取っていただきますか。鍋はそちらのを使ってください」

目で道具の場所を指示する。

「……私は漬け物でも切つてこようか。スーパーのものだが、最近気に入っている美味いメーカーのものがあつてな」

鈴乃もさつと立ち上がると、自分の部屋に戻つて食卓に加える彩りを準備する。

「な、何、アラス・ラムス」

そんな音の様子を見て、アラス・ラムスがじつと恵美のことを見上げた。

「ままは？」

「え？」

「おてつだい、しないの？」

「う……」

鏡の無邪気な瞳に、恵美は絶句する。

千穂と鈴乃が片腕を手伝いはじめたので、恵美も何かすると思つたのだらう。

だが生憎と、恵美には今日の食卓に供せる準備は何も無いのだ。

「……何よ」

「いや？　別に？」

目の端には、アラス・ラムスの無類な瞳に映えあぐねている恵美を面白がっている真奥の顔立たしいしたり顔が映っていて、恵美はこみ上げる怒りをぐっと吞み込み、

「……今度は、私も何か作ってくるわ」

と、アラス・ラムスにというより、この場の全員に対して宣言する。

「ま、無理すんなよ。お前いつも仕事爆りなんだし」

恵美が、いつの頃からか定例化してしまった人魔入り乱れての魔王城の夕食会に来るのは、大体が仕事の爆りである。

例えば何か自宅で作ったとしても、会社に持っていくのも、家に取りに戻るのも手間だろう。

「なあアラス・ラムス、ままはな、意外と頑張ってるんだぞ？」

「意外とは何よ意外とは――」

真奥はアラス・ラムスを抱き上げて、恵美の弁護をしてやる。

「それよりアラス・ラムス、ルシフェルに言っただけでやってくれ。何かお手伝いしないのってな」

「こっちに飛び火させないでよ」

迷惑そうな顔をする真奥をアラス・ラムスは少しの開大きな瞳で見つめるが、やがて小さく首を振る。

そして困ったような顔で、真奥を見上げ、そして言った。

「ばば、もしよえるはおでつだいしないよ？」

「……」

「なっ？」

真美と東美はもちろん、会話を聞いていた西屋と千穂も同時に息を呑み、当の漆原は弾かれたようにアラス・ラムスを振り向いた。

そして、

「なんだ、何があった？」

小鉢に漬け物を切ってきた鈴乃が戻ってきたときには、二〇一号室は漆原以外の全員が腹を抱えて笑っていたのだった。

顔を真つ赤にして震える漆原と、それぞれの場所でこらえきれずに笑う四人、そしてきょんとした顔のアラス・ラムス。

詳しいことは分からないが、鈴乃は自分が面白い場面を見逃したらしいことだけを察する。

「ちょ、ちょっと、ルシフェルいいの？ アラス・ラムスにこんなこと言われて、くくく」

「……」

東美の言葉に益々顔を赤くする漆原は、入ってきた鈴乃をきつと睨むと、

「余計なこと聞くなよ!!」

そう釘を刺してから、

「……………いいよ、食器は僕が洗うよ。その庄力鍋以外は…………」

と、蚊の鳴くような声で言った。

「これは本当に面白い場面を見逃したようだな。悔しいから詳しく聞かせてもらおうか」  
 津原の自主的な手伝い宣言に鈴乃は益々興味津々な顔になり、

「余計なこと聞くなって言っただろ!!」

津原はこれ以上突っつかれたら護装がまわす確みつかんばかりの有様だ。

「子供の日ってのは、すげえもんだな」

「本当にね」

そして真実と事実が、アラス・ラムスの慧眼に撞つて感心したように頷く。

「若屋さん、湯割き終わりました。あはは……」

千穂は笑いながらもきちんと作業はこなしていたが、ついつい笑いを零してしまう。

「ありがとうございます佐々木さん。ああそうだ津原、食器洗いはいいから、炊飯器のスイッチを入れておけ。それくらいはできるだろう」

「バカにすんなよ!! 怒るぞ!!」

若屋の指示に肩をいからせながらも津原は素直に炊飯器のスイッチを入れに行く。

炊飯器が音を立てて、今日この部屋で人間と悪魔が食べるための米を炊きはじめる。

やがて圧力鍋と炊飯器から発せられる湯気と香りが部屋を満たし、騒がしい食卓が用意され、そして今日も変わらぬ毎日の一日が終わるのだった。





「いらつしやいませ！ 本日はどのような……」

「これ、なんとかなりますか？」

「ご用件でしよえっ」

恵美は、店員の笑顔と営業トークが妙な語尾と共に一瞬で緊張のを見た。

しかしそれも仕方あるまい。何せ真央が差し出したのは、元が携帯電話だと辛うじて分かる程度のスタラップだったのだから。

それでも都心のロケーションで最初にお客様と接する役割を負うその店員は、店舗の顔であるという自負と必死の精神力で再び笑顔を浮かべる。

プロだ、と恵美は心の中で舌を巻いた。

「あ、その、恐れ入りますがお客様、修理を、その、ご希望でしょうか」

「まあ、できれば。まだ修理に入るんでなんとかなるかなって」

「……なるわけないでしょ」

恵美は誰にも聞こえないようにそう呟き、店員側も、

「あ、あの、その状態で電源を入れるのはとても危険ですのでおやめいた方がいいと思いますっ」

慌てて真央を止めようとする。

「と、とりあえずその、修理のご要望で承りますので、こちらの番号札を持って待合スベ-

スでお持ちくださいませ」

「あ、はい。やっぱダメなのかなあ」

「だから言ったでしょ。無茶だった」

「え？ あ、ああ……」

恵美に服を引っ張られて、真真もとりあえず目の前の店員にこれ以上無茶を言うのをやめたようだった。

番号札を手にした真真は、携帯電話会社への直営ショップの最新機種が陳列されている棚には目もくれず、どっかりと待合スペースのソファに腰を下ろす。

「まあ、あれ、ままの知しこと……」

すると、恵美に抱きかかえられたセフィラ・イエソドの化身にして恵美と真真の「娘」であるプラス・ラムスが、受付カウンターの方を指さして恵美の肩をてしてしと叩いた。

視線を向けると、胸元に大きなリボンのついた制服を纏ったショップの店員達が、やってきたお客とそれぞれカウンターの越しに対応している。

「……そうね」

恵美はほんの少しの心の苦味を噛みしめながら、微笑んで頷く。

会社も業務内容も違うが、今カウンターの途中で働く彼女らと同じように、自分は少し前まで同業他社の携帯電話関連業務に従事していたのだ。

こうしてかつての自分の仕事を振り返ると、魔王である真奥がマドロナルドで働いていることに文句を言えないほど、ドコデモのサレアボとして働いていた勇者である自分、というのも甚だおかしいものだっただろう。

「ままだ あしたはおしごと？」

アラス・ラムスの何げない問いに、恵美の心の傷が少しだけ沁みて痛む。

恵美の「娘」であるアラス・ラムスは恵美の持つ聖剣と不可分な存在であるが故に、今まで恵美がドコデモの仕事をしている時間はずっと恵美の中で融合状態にあった。

そのため、アラス・ラムスは恵美の仕事中の様子を知っているのである。

「……ううん、ドコデモのお仕事は、しばらくお休みなのよ」

恵美はアラス・ラムスの無気な固い「母親」として嘘をつく。

これまでの仕事を、恵美は解雇された。

それは自分の行動の結果でありやむを得ないことではあるのだが、それでも日本で得た居場所を失ったことは、やはり多少なりとも心の傷として残っている。

思えば魔王である真奥を殺すために世界を渡ったあの日から、時間的な意味でも、状況的な意味でも、ずっと意図に由来してしまった気がする。

「おい恵美。別にいいんだぞ、一緒にいなくても」

そんな恵美の視線に気づいたのか、ソファに座った真奥がこちらを見ずに言う。

「……え？」

「だから、きちんと領収書切つて渡すから、その、金だけ後でくれれば……」

真美は感嘆（きんたん）ぶつきらばうに言うが、恵美が前職を解雇されたことを気にしているのだろうということは分かる。

全く、金計な気遣いをしていないでもない。

ただでさえ、こちらは真美からの借りを目覚めているのだから。

「……そういうわけにはいかないわ」

恵美は軽く鼻を鳴らすと、真美からわずかに距離をとって同じソファに座る。

「まだ次の仕事も決まらないんだもの。もしかしたら次はyycが、ソフトタングのチレアボや店舗業務をやるかもしれないわ。少しくらい他所（ほか）のお店のことも見えておかないと」

「そ、そうか。うん」

真美は前切れ響く顔（こゝろ）が、それでもそれ以上は何も言つてこなかった。

妙（た）に居心地が悪（わる）そうにしているが、それはこちらも同じでお互いさである。

「それで次の携帯は、結局どれにするの？」

「え？ あし、その」

真美は思わず手の中のストラップを見る。その規模の意味するところを察し、恵美は先制した。

「だから、絶対に修理なんか無理よ。ただでさえ古い機種なのよ。それをそこまで外装がボロボロになつてゐるのに充電してたなんて信じられないわ」

「えー……」

真奥は悲しげにスタラップに目を落とす。

真奥が持つていたまゝの携帯電話は、元々まゝに吸収合併されたテューカーという会社がリリースしたモデルであつた。

テューカーがまゝに吸収合併されたのは真奥達が日本にやってきた頃のことであり、ブランド消滅直前のテューカーキャリアの新機種を購入できたこと自体奇跡であると言わざるを得ないし、そんな奇跡を起こしてまで購入する機種でもない。

そして真奥は、奇跡的に購入し愛用してきたその携帯電話を、先だつてのエンテ・イスラ親征でボロボロにしてしまったのである。

天界、魔界、エンテ・イスラの様々な思惑によつて囚われの身となつた真屋、アラス・ラムス、そして東美を助けるためのエンテ・イスラ親征。

その最中、この携帯電話は水に落ち、爆発と交通事故に巻き込まれ、天使達との戦いの間もずっと真奥のポケットに入つていたらしい。

液晶画面の左半分が完全に沈黙し、数字キーのカバーは全てどこかに消えて基盤が露出しており、二つ折りの関節部分が碎けて配線が露出してしまつて二つ折りにできなくなつてしまつ

た。

真美曰く、それでも充電できるし電話もできると言うのだが、水落ちした上に基盤も配線も引き出しの携帯電話に通電すること自体、感電や爆発などによる怪我や死亡事故などの重大事に繋がりがねない危険極まる行為である。

恵美は真美に「エンテ・イスラ親任の費用の補償」を請求されており、その中で何を置いても最初になんとかしなければならぬと考えたのがこの携帯電話だった。

魔王である真美を、これまでのように単純な気持ちで討伐することができなくなってしまった恵美だが、携帯電話の不適切な使用で真美に重大な事故に遭ってもらってもそれはそれで困るのだ。

魔王サタン、破損した携帯電話を使い続けて漏電事故による火災で死亡、などということになっても、三面記事にもなりはしない。

「と、ところでよ」

真美から請求された費用はかなり高額だったのだが、恵美はそれをほぼ二つ返事で受け入れた。

当初高圧的に補償を迫ってきた真美はそれが意外だったのが、それ以降妙に恵美に対する態度がどこもない。

恵美は深いため息と共に返事をする。

「何」

「い、言っておくけど、俺は欲しいもん買うぞ」

「どうぞ、好きにすれば？」

「い、いいんだな？ やめろって言われても、やめねえぞ。約束だからな。ちゃんと請求書には……」

「分かってるから。好きにすればって言うてるでしょ。別に最新のスリムフォンだって文句言わないから、それを修理するのは謝めなさい」

「お、おう……えん、えーと」

恵美のどこまでもフラットな態度に、真奥はさらに調子を狂わされるのか、すぐ傍にあって雑誌棚に入ってたその最新機種を纏めたパンフレットを手にとってわざとらしく読みはじめる。  
「……まあ？」

恵美に抱っこされたアラス・ラムスは、そんな真奥の横顔を見る恵美の顔を見上げて不思議そうに首を傾げる。

「まあ、ちよつとうれし？」

「んー？ どうかしらね」

恵美はアラス・ラムスの方は見ずに答えると、冷房がよく効いた店内であるにも関わらず密な汗をかいている真奥にまた声かける。

「ねえ」

「んっ!?」

わずかだが腰を浮かした真奥にまた面倒な反応を起こされてもこちらも面倒なので、恵美は真奥が何か言う前からある方向を指さす。

「彼女、止めなくていいの?」

「は? 何が」

「アシエスちゃん」

「んんっ!?」

真奥は目を瞬いて立ち上がる。

恵美が指さす先には、ショップの店員を捕まえて質問攻めに行っているアラス・ラムスの「妹」アシエス・アーラの姿があったからだ。

「おいアシエスっ!」

真奥は憶<sup>おぼ</sup>えて、目の玉が飛び出るような価格が表示されている最新機種の前で目を輝かせているアシエスに駆け寄った。

「あ、マオウ! ねえねえどれがいいと思っ?」

「何がだ!」

「携帯電話! マオウ、この前私にも買ってくれてるって言ったじゃん!」



「そんなこと言ってねえよ！ あ、す、すいません！ というのは放っておいていいんで！」

真美はアシエスに絡まっていた店員に説いてアシエスをソファまで引っぱり去るが、

「言ったじゃんカァー エンテ・イスラでアルバートと会ったときにサァー！」

アシエスが言っているのは、エンテ・イスラでの祭の道中の出来事のようなのだ。

アシエスもまた、アラス・ラムスと等質の存在であるセフィラ・イエソドの化身であり、アラス・ラムスが真美と融合しているのと同じように、真美と融合状態にある。

真美とアラス・ラムスが故郷でもある異世界エンテ・イスラに囚われた際、真美と共に助けに現れ、その際真美が死別したと思われた父ノルドと再会したように、アシエスもまた、姉であるアラス・ラムスとの再会を果たしている。

こうなるような気がしたから、アシエスと行動するのは面倒なのだ。

「買ってやるとは言ってねえよ！ お前に持たせるなら子供用だって言っただけだ！」

「異議ありダー！ それは事実上買ってくれるのと同じことダー！」

「異議を却下する！」

真美はアシエスの意見を撥ねつけ、真美の隣に強引に座らせると大人しくするよう説きを利かせる。

するとそれに便乗するように、真美に抱かれたアラス・ラムスが横から手を伸ばし、アシエスのオデコにびたりと手を当てた。

「あしえず、わがままめつよ」

「ワガママじゃないとネーサマ！ ネーサマだって満足欲しくないノ？」

「けーたい？」

「アラス・ラムスに妙なこと吹き込まないでほしいんだけど……」

東美は困った顔で姿勢を変えると、アシエスからアラス・ラムスをやんわり引き離そうとする。

「ダイジョーブだよー エミにタカろうとは思ってないからサー！ 私はマオウに約束のリコウを要求してただけだ……」

「約束の存在がまず意義ありだ！ 頼むから大人しくしてろよ！ 騙がねえって言うから表に出してやってるんだぞー」

「は、本当に落ち着きがないのね……」

「ちよっとマオウー エミからの私の評価が下がっちゃったじゃないか！」

「下げたのはお前自身だ！」

真奥は辟易して眉を蹙とす。

アシエスが出先でなんらかのトラブルを引き起こすことは目に見えていたから、真奥だってこんな所に連れてきたくはなかったのだ。

だが東美とアラス・ラムスが一定の距離以上離れられない仕組みは、どうやら真奥とアシエ

スの間にも成立してゐらしい。

その一定距離も恵美とアラス・ラムスと同程度であり、築塚から新橋までとなると、完全にその範囲を越えている。

結果、真央がこうして郁心にやってくるときには強制的にアシエスが寄附することになってしまふのだ。

だがアシエスは、姉のアラス・ラムスと違い体も心も日本の中学生程度に成長しており、それでいてアラス・ラムスよりはるかに聞き分けが無い。

外出となれば真央との融合状態のまま大人しくしているはずもなく、表に出てきて真央を振り回すので、慣れたとはいへ疲れることには変わりなかった。

一方の恵美は、アシエスと知り合つて間が無いことと、アシエスが長期間、生き別れになつた恵美の父であるノルド・ユステイナーと生活を共にしていたという事実のせいで、アシエスとの距離感を未だに掴つかめずにいる。

だが距離感を掴めないのはどうも恵美だけのようで、アシエスはほぼ最初から他の面々と接するのと同じような態度で恵美に忌憚なく接してくる。

「……」

恵美は、なおも真央に対して携帯電話購入について駄々をこねる少女を複雑な思いで見ろ。

臆病とは少し違う。

アラス・ラムスと尊貴の存在であるアシエスがいることで、父の命が守られていたところは多々あっただろう。

惠美自身全てを聞いたわけではないが、離れ離れの間、父が自分と再会するために色々と手を尽くしたことも知っている。

それでもなぜか、惠美はアシエスに不思議な引け目を感じるのだ。

「ント ナニ、エミ」

ふと、アシエスが惠美の視線に気づいて顔をこちらに向けてきた。

大きな紫色の瞳や、銀髪の中の一房の紫色、何よりその面差しは、見れば見るほどアラス・ラムスにそっくりだ。

「えっと……」

特異点があつて見ていたわけでもない惠美は答へに窮するが、そのとき、

「番号札五十五番でお待ちのお客様——」

「あ、はい—— っと、おいアシエス—— とにかく今日は買わないからな—— 悪い惠美—— ちよつとこのバカ見ててくれ——」

「え？ あ、ちよつ……」

真夏の音が来てしまい、真夏は惠美の基準も聞かずにアシエスを置いてカウンターに行ってしまった。

「ナニがこのバカだバカマオー!!」

アシエスは真実の音にべーっと舌を出してから、またすぐに惠美を振り返った。

「ア、それでナニ？」

「え？ あ、その……」

「そーいやエミってサ」

「う、うん？」

「オトーさんの娘なんだよネ？」

「……そう、だけど……」

突然、何を言い出すんだろう。惠美は驚くが、アシエスはなんら変わらぬ口調で先を続ける。そして続いたその言葉は、惠美の心の奥底に重い一撃を投げかけた。

「ごめんネ。私がずっと娘になってテ」

「……え」

「やっぱヤだよネ。離れ離れだった親にイキナリ馴れ馴れしい奴がムスメヅラしてくっついてたらサ」

先ほどと変わらぬ、なんら裏を感じさせない明るい口調であっけらかんと言ひ放たれて、惠美は言葉を失った。

「ただ、これだけは分かってはしーんダ。この前モノゴコロついたときに目の前にいたのがオ



トーさん……ノルドさんだったんだ。親子って言った方が、日本で暮らすのに色々都合良かったからってのもあったシ、だからサ」

アシエスはまるで恵美を安心させるように、満面の笑顔で恵美の肩を叩く。

「ノルドがエミのことを忘れたことなんて一度も無いカラ、私が娘って呼ばれてたことは許してもよーだいナ」

「アシエスちゃん……」

恵美は、悟った。自分がアシエスに対して覚えていた違和感の正体を。

「タニンギローギは好きじゃないナ。呼び捨てでイイヨ。マオウなんか最初っから私のこと呼び捨てダヨ？」

「……うん」

恵美は頷く。

「アシエスは……お父さんのこと、好き？」

「ウン」

アシエスは黙然なく答えた。

「あなたのお姉さん……アラス・ラムスね」

「う？」

「ウン？」

唐突に名を呼ばれて、アラス・ラムスが恵美を見上げる。

「……魔王も、私も、血は繋がってないけれども、この子のこととは、とても大事なの。この子にママって呼ばれることに、誇りを感じる。きっと魔王もね」

「ウン」

「お父さんも、きっとあなたに『オトーさん』って呼ばれることを誇りに思っている。私のお父さんなんだもの。経緯はどうあれ、あなたを私と同じくらい大切に思っているはずよ」

「シー？ それもどうなの？ エミ的にそれってどミヨージやない？」

これをなんら背負い込むことなく言えるのだ。アシエスの心はどこまでも真っ直ぐで、素直で、それでいて愛が見当たらない。

この娘に対して恵美が感じていた距離感の正体は、ただ一つ、心配だ。

「私に氣を使ってあなたが行き場を失うことの方が、ずっと『どミヨージ』だわ。アシエス、今は魔王城にいるみたいだけど、あそこはもう一人住人がいるの。そいつが帰ってきたらどうするの？ さすがにあそこに四人は住めないわ」

「ウルシハラ、ルシフェルのことだよネ。うーん、それは目下の悩みのタネ」

恵美は、真剣な顔で腕を組みアシエスを見てここ数日のことを思い返す。

エンテ・イスラ觀望から帰還したアシエスは、恵美がノルドを看病しているヴィラ・ローザ館一〇一号室にはあまり近づいていない。



それが今本人が言ったようにノルドの実の娘である東美への遠慮なのだとしたら、遂にアシエスに対して申し訳ない。

アラス・ラムスが東美と真奥を「ママ」「ばば」と慕うように、アシエスがノルドを父と呼ぶ気持ちもまた本物であり、その状況を生み出したのはきっと、自分の母なのだから。

「私と一緒に住む？」

東美は気づけば自然に、そう言っていた。

「へ？」

アシエスは驚いて東美を見る。

「……色々な事情はあるけど、あなたの『両親』のことを思えば、あなたは私にとって『妹』みたいなものだわ。どうせ同じ人をお父さんにしてるなら、いつそのこと一緒に住んじゃえばいいと思うんだけど」

「オオ……」

アシエスは何やら感動の面持ちで聴く。

「なんという広いフトコロ……」

「そ、そう？ どうも……」

「でも、今はそれはダンジツアキじゃないなア。私マオウも離れられないシ」

「あ、そっか」

恵美は思わず、カウンターにいる真奥の背を見た。

未だにあのスタップを挟んで押し問答をしているようだ。いい加減諦めればいいのに。

「エミとマオウは一緒に住んでるわけじゃないシ、スズノに聞いたけどエミはササヅカには引越したりはしないンデシヨ？」

「……そうね」

恵美とアラス・ラムスの住むマンションは笹塚から三軒離れた永福町にあり、真奥とアシエスが離れられる距離を完全に越えている。

「そうなるなら私はエミんとここには行けないシ、それニ……」

とアシエスもまた、真奥の背を見てから今度は恵美に抱えられたアラス・ラムス、そして恵美の顔を順繰りに見る。

「私を妹だっけ言ってくれるエミの気持ちはこちらがたいケド、カテイジジウがすごくフタヅツにならナイ？」

「……そ、それはそうかもね」

アシエスが言わんとすることを理解し恵美も苦笑する。

恵美の娘のアラス・ラムスを姉に持つアシエスは恵美の妹で、恵美とアシエスはノルドの娘だが、アシエスの姉は恵美と真奥の娘であり、それでいてアラス・ラムスとアシエスの本当の「母」はノルドの妻であるライラなのだ。

「考えただけで目が回りそう。場合が場合なら、家庭争議の泥沼が末代まで続きそうね」

「それね」

蒼天蓋の空で真実が言った「盛大な家族会議」が実際にどんなことになるのか、まるで想像がつかず、恵美とアシエスはおかしくなってしまう。

「でもまーアレだね、確かに複雑だけれども、私にとってもネーサマにとっても嬉しいこと二、皆が皆のことを大事に思つてルから、ケンカになつても大丈夫なんじゃないか。マオウも含めてネ」

「……そう、かしら」

いつの間にか真実は、食い下がる立場から店員に説教される格好になっている。

おそらくあの状態の携帯電話に通電して使い続けたことを怒られているのだらう。

その姿を見て、恵美は唇を引き結ぶ。

「ウン。マオウって嘘つきでスナオじゃないから分がりにくいけどネ」

アシエスはからりとした笑顔で言った。

「バイクで蒼天蓋走つてるときのマオウ、ちゃあんとエミの名前も呼んでたシ。元々敵同士だったかなんかシランけれど、マオウはみんなのことすごく大事に思つてル。きつとネ」

以前の恵美ならば、その言葉を即座に否定していただらう。

だが、今の恵美の心の中にはもう、『勇者エミリア』の影はどこにも無かった。

「あしえす、ばばはうそつかないよー」

「えー、ネーサマちょっとは人を疑うこと覚えなヨー。マオウ実はずうのワルだぜ？」

「ばばのわるくもめっなの！」

イエソドの姉妹のさきやかな噂を聞くともなしに聞きながら、エミリア・エステーナはアシエスの言う言葉を、

「……知ってるわ」

かすがなためらいと共に、胸の内に吞み込んだ。

「ン？ 何が？ マオウがワルだってこと？」

東美は複雑な顔で首を縦に振り、そして言った。

「それも、その前にあなたが言ったことも、……でも、私は、それを受け入れるわけにはいかないの」

「ふうん」

アシエスは東美の言葉の真意を確かめようとはしなかった。それが気遣いなのか、単に気にならないからなのかは分からなかったが、きっと両方なのだろうと東美は思うことにした。

丁度その時、真実が扉から立つのが見え、二人の会話はそこで止まった。

「買ってくんさそーだナー、あの様子だト」

「まうかもね」

恵美は苦笑する。明らかに真央はがつくり頭立てている。恐らく修理は受け付けてもらえなかったのだろう。

「……新しいの買うしかないって」

「そ、じゃあさっさと選んで」

「……はあ」

人の金で新しい携帯電話に機種変更できるというのに、真央の表情は暗かった。

「なんデ？ エミに新しいの買ってもらえるノニ？」

アシエスが恵美にそのことを尋ねると、恵美はこともなげに言った。

「前のあれに愛着があったんでしょ。手放したくないのよ」

「そーゆーもんナノ？」

「初めて買った携帯電話だし、色々苦楽を共にしてきたっていうのもあるんでしょ」

この推測に、間違いはあるまい。

真央の心中を容易に察することのできるほどに、同じ時間を通じてきている。

そして、自分で言い出したくせに新しい携帯電話に変えたがらない理由もまた、恵美には予想がついていた。

「ばば、げんきないね」

アラス・ラムスが心配そうに真央の背を見やり、恵美は小さくため息をつく。

「あれ、エミ？」

真美は立ち上がって、真美が先ほどまで座っていたカウンターに向かい、

「データ、バックアップすることできませんか？」

そう尋ねていた。

「危険かもしれませんが、通電ができるならデータを抽出することもできるはずです。今これ電源入ってる状態ですし」

店員は真美が真美とどういう関係なのか分からず目を白黒させている。

赤ん坊を連れて入ってきたくらいだからもしかしたら家族なのか、くらいには思っているかもしれないが、そうするとアシエスの存在は不思議に映るだろう。

だが今の真美にはそんなことは関係ない。

「彼のその携帯電話、外部メディアも入れられない古い機種ですけど、そういうのからメールや写真や電話帳をバックアップするサービスはまあさんでもやってらっしゃいますよね？ データ消失の免責書にはサインさせますから、やっていただけませんか」

「……少々お待ちください」

店員は困り果てた様子で、恐らく上長に伺いを立てるために席を立った。

破壊が著しい機体にデータ通信ケーブルの端子を繋ぐことは確かに危険で、どちらかといえど真美の要求の方が無茶ではある。

だがこういう場合、お客は聴聞無事を言えるということもまた、恵美はよく理解していた。昨今の携帯電話には、単なる通信機器以上の機能や思いが入っていることが普通である。

特にカメラ機能で撮影される画像や動画には、普通のカメラよりもずっと持ち主の思い図が詰まっているといったケースも少なくない。

「恵美……」

真美は恵美の行動に驚き目を見張っているが、恵美はその声に振り向いたりしない。

振り向けば、変なことを口走ってしまいそうだから。

幸いにして、真美が恵美の行動の理由を尋ねるよりも早く店員が戻ってきた。

「お待たせいたしました。データが完全に移行できるかどうかは保証致しかねますが、データ抽出作業だけは承れます。それでよろしければ……」

「分かりました。それで大丈夫です。ちよつと真美」

「え、あ……」

「このポロポロからデータ抽出だけはやってくれるって。うまく行けば古いデータ、引き継げるわよ。その代わり新しいのはスリムフォンじゃない方がいいけどね」

最近各社に跨り同型のスリムフォンを発売するメーカーも多いが、真美の元の携帯電話は恐ろしく古い駄立キヤリアのOSを使っているため、スリムフォンのOSと抽出したデータが適合せずに引き継ぎがうまく行かない可能性もある。

そのため、新しい携帯電話は独立キャリアのQ.Sと互換性のあるフィーチャーフォン機種に  
変えるのが望ましい。

「ほら、こっち来て。データ消失の免責書にサインしないとやってもらえないから」

「あ、ああ」

恵美に手招きされて、真奥はカウンターに戻る。

そして提示された書類に言われるがままにサインすると、店員は一札して真奥の携帯を持っ  
て店の奥に下がっていく。

真奥はそれを見送ってから、まるで狐につままれたような顔で恵美を見上げた。

「何よ、その顔は」

「あ、いや……なんで……」

なんで、こんなことを何も言わないうちからやってくれたのか。真奥の目はそう言っていた。

「あなたの今の自転車、変なところに反射板つけてるわよね」

「え」

真奥が愛用している自転車、デュラハン式号のことである。

その前かこには、鈴乃に破壊された先代のデュラハン号の反射板が接着剤で貼りつけられて  
いるのだが、そのことを恵美に話したことは無かったはずだ。

何故そのことを、と問おうとした真奥は、またも恵美に機先を制される。



「アラス・ラムスが乗るものを、私が真面目に検分していないとでも思ったの？」

「ああ、いや……」

これはとまでに真奥の胸の内がはつきり手にとるように分かる日分が、思いのほか嫌でないことに、恵美はまだ気づいていない。

だから真奥の感情をそのまま受け取って、言葉を続けた。

「電話帳やメールアドレスは、言うなれば携帯電話の塊みたいなものでしょ。それを引き継げるだけで気持ちも楽になるんじゃない？ 実際そういうお客さん、結構いたしそれに……」

恵美はふと、話しすぎたような気がして真奥から少しだけ距離をとると、ことさらぶつかりばうに言ってやった。

「……折角買ってあげたのに不満が残ったせいで後で請求額に上乗せされても嫌ですしね」  
もちろん真奥がそんなことは絶対にしないことを、恵美は分かっている。

ただ、そう言ってやるのが真奥のためであり、自分のためなのだ。

「で、どれにするの？ そろそろアラス・ラムスのお昼寝の時間なんだから、決めるなら早く決めて」

「あ、ああ」

恵美の強い言葉に引っ張られるようにして真奥は陳列棚の前に駆け寄ると、とりあえず一番手近な銀色の携帯電話のモックを手にとる。

そんな二人のやりとりをソファに座って眺めていたアシエスは、にやけた笑みを浮かべながら身を沈め、

「……なんか面倒くさソ」

と身も蓋もなく言うが、それでも、

「こりゃア、家族会議は大変なことになりそうだなア」

呟く声はどこか楽し気なものだった。



勇者、敵幹部の力に驚嘆する



最近ではごく見慣れた後ろ姿に、鈴乃が一抹の違和感を覚えたのは本当に偶然だった。

たまたま共用廊下に差し込む午前の太陽が丁度そこを照らしていたというか、玄關のドアに施錠しようとして、うっかり取り落とした鍵を拾うために視線が下がったというか……。

「ま、魔王……？」

「ん？ おお、こんな早くに出かけるのか？」

隣部屋の住む、かつては世界征服をあと一歩のところまで達成せんとした、悪魔の王の人間としての姿、真奥貞夫が普段通りの口調で返事をしてくる。

「なんだ、変な格好で固まって」

「あ、いや、その」

鈴乃は鍵を拾おうとした中腰の姿勢のまま、視線が一瞬でもそこに釘づけになってしまい思わず顔を赤らめてしまう。

「な、なんでも……」

なんでもなくはない。

なんでもなくはないのだが、ではそれを指摘したところで今の鈴乃に何ができる。

真奥との関係を考えれば、決して鈴乃は彼の真意を積極的に教う関係ではない。

ここ最近は何かと隣人としての近所付き合いが密になってきているところを持ってきて、つい最近はずきに彼の車の幹部に任命されてしまったりと、どうにも元々の関係を遠慮すること

が多くなっていることは否めない。

だが本来は、彼に何かしらの不都合が起これば、それを指さして嘆いてやるくらいの関係だったはずだ。

だが、しかし、それでも、今鈴乃が見たものは、そうしてしまつてはあまりにも、あまりにも小さくみつともない不都合だった。

いかな敵とはいえ、否、敵だからこそそんな異変による不都合で傷つくようなことがあつてはしくないとも思う。

だから鈴乃は、真奥の名誉と、自分の羞恥心を天秤にかけた結果、直接的にそのことを指摘するのではなく、

「ま、魔士、その、アルシエルはどうした？」

改善の策として家事万端、模範的専業主夫の名を欲しのままにする真奥の忠実なる僕、悪魔大元帥アルシエルこと吉屋四郎の在不在を問うたのだった。

「ああ、久しぶりに泊まりがけの仕事が入ってき、今日の夜まで帰ってこないんだ」  
「な、何？」

鈴乃は絶望すると同時に、何故自分の目の前にあるものがそのままの状態であつて外に出ているのか、ようやく分かった。

常に主の社会生活を意識している吉屋が、あんなものを見逃すはずがない。

「なんだ、何か書屋に用があったのか？」

「いや、その、あの、き、今日はこれからスーパーの朝市に行くつもりで、そのことを話そうかと思っただけなの、だが」

それは嘘ではなかった。

顔を合わせたら、程度の意識ではあったものの、嘘ではなかった。

だが結果として、『逃げ』のための嘘になってしまった。

「ま、魔王、今から、出勤か？」

「ああ、今日は半日だけなんだけどな。……っと、そうこうしてたら時間が。じゃあな」

「あっ……」

真奥は腕時計を見ると、鈴乃の返事も聞かずにさっと身を翻して外に出てしまった。鈴乃は相変わらず中腰の姿勢のまま、真奥の愛嬌、シテイサイクルデューラハンズ号の駆ける音が遠ざかり、すぐに消えるのをただ呆然と聞いていた。

## 夜

「ちーちゃん……やはりあれば、言っただけの方がいいんじゃないのか」

「無理です！ 私にはできません……」

品行方正と礼儀止しさと正義感が服を着て歩いているような女子高生、佐々木千穂が店員に抗命したのは、恐らく初めてではないだろうか。

カウンターの内で普般通り、さわやかな笑顔で仕事する真奥の姿に、なんら不審な点は無い。だがマダロナルド・糖谷駅前店店長木崎高司と、真奥の正体や私生活、その他諸々公にはできない事情を全て知り尽くしている佐々木千穂をして、今日の真奥については一言言わせるを得なかった。

だが、果たして本人に直接それを伝えることが、本当に嬉しいなのか、というところからそもそも二人の会話は始まっていた。

「いや、やはり君の口から言うのが一番ダメージが少ないのではないかと……」

「む、無理です、そんなこと言えません……だ、だってどうして目に入っただってことになっちゃうじゃないですかあんなの……」

「どうしてもこうしても、私の背丈からも気づいたんだぞ。別に不審なことは……」

「で、でも真奥さんも男の人ですし、そういうこと女の子から言われると傷つくんじゃないか……これは木崎さんが、店長命令にかこつけて言うのが一番痛みが少ないと思いますよ……」

「そうは言うがな、『今は』別になんともないんだ。店舗業務を離れた私生活にまで口を出す権限は私には無い……やはりこれはプライベートで交流のある者がそつと声をかけてやるべきじゃないか？」



「そ、それは、で、でも……」

責任のなすり合い、という、千穂と木崎の人格に最も似つかわしくない不毛な会話が延々と続く。

ブライベートで交流、とは言いが、あんなデリケートな問題をダイレクトに注連するのはどうしたってためらいが生じる。

だが、その「ブライベートな交流」の中で、ごく最近自分が真奥にとって重要なポジションに任命されたことを思い出し、速断的に、そのポジションの「先輩」のことを思い出す。

「大体、おかしいです。あんなことになってたら、真屋さん……あ、真奥さんとルームシェアしてる友達ですけど……」

「知ってる。何度か店に来たことがある。この前も一緒にいた青の高い男性だろう」  
千穂は真奥にとって最も身近、かつ一番の悪友、真屋四郎の名を出す。

家事全般に配達の行き届いた主夫の魔たる彼がついていながら、一体どうしてあんなことが起こるのか、千穂には想像もつかない。

「あ、はい、あの人が気づくはずなんです。洗濯とか家事一切は真屋さんがやってるから気づかないはずが無いんです」

「い、いや、分からんぞ、あんなところがあんな風になるなんて私も初めて見た。分かっているければ、特別見る場所でもあるまい」

「でもダンスにしようときいきちんと装めば嫌でも目につきませんか？」

「着ていなければ、ああはならないのかもしれないぞ？ 白く浮き上がっているだけなら、見落としてしまうかもしれん……」

どうやら二人共、真奥の着衣について問答しているらしい。

今の真奥は普段通りのマダロナルドの赤いシャツに、ノータッタの黒いスリムなシルエットのスラックス、赤いバイザーと、安物ながら風の革靴を着用していた。

一見して日本にも世界にも数多いマダロナルドの男性タルーとして、赤の打ちどころのない装いである。

「と、とにかくだ、私は店の外のことについては何も言えない。頼むちーちゃん。まーくんのこと大切なら、君が直接言うか、ご友人の直屋さんに伝えるかして、まーくんが極力傷つかない方向に持って行ってやってくれ」

「さ、木崎さん！ その言い方は……っ！」

「私にもできることとできないことがある！」

「うう、無理ですよ……なんて言えはいんですかあ……」

半べそになりかける千穂と、複雑そうな顔で逃げようとする木崎。

真奥はその様子を見て、

「珍しいな、ちーちゃん、何か怒られてるのかな」

と、呑気なことを思ふのであった。

## 四

夕陽が照らし出す笹塚の町で、恵美はその後ろ姿を発見して声をかけようと思い、喉の手前まで出かかった空気を思わず止めてしまった。

「ばまむぐっ」

そして同じ姿を認めて声を上げようとした『娘』の口を、反射的に塞いでしまう。

「……………」

腕の中のアラス・ラムスが恵美の不自然な行動に首を傾げるが、恵美は返答する余裕が無い。あれは、間違はなく自転車を押して歩いている真奥と、その隣を歩く千穂だ。

今日の二人のシフトは、朝から夕方までとあらかじめ千穂から聞いていたので、二人が街中を歩いていることも自体はなんの問題も無い。

千穂は私服で、手に保温バッグのようなものを抱えている。

千穂が今日、魔王城に持ち込むつもりで持参した料理だろう。

だが、あれは、いくらなんでもあれは、一体どういうことなのだろう。

真奥の生活が、余裕の無いものだと承知しているが、いくらなんでもあんな姿を晒して恥

ずかしくないのだろうか。

だが彼は、それでも魔王としての矜持きんぢを持って、最低限の身なりは整える性格だったはずだ。もしかしたら本人は気づいていないのかもしれない。

あんな場所、自分では気づきようもない。結核けつかくに侵襲しんしやくされていれば、それこそ意識もしないだろう。

だがそこまで来て、康美の願望がんぼうに疑問が湧く。

西屋さいやは、彼の悪臣あくしんたる悪魔あくま三元帥さんすいアルシエルは何をしている？

彼は主あるきにあんな嗜好しこうをさせて恥はにかずかしくないのか。

もちろん康美自身は、真実がどれだけ恥はにかをかこうと知ったことではない。

むしろ今ここで後ろ指をさした上で、一度は彼に征服されかけた世界を救った勇者として、ついでに聖剣せいけんの刃やをその背に突き立てねばならない立場にある。

もちろん日本での生活が長引いた今となつてはそんなことを往來でしようとは数塵かずじんも思わないし、真実もされとは思つてはいないだろう。

だが人間として、勇者として、魔王がこういった小さな瑕疵かしの積み重ねによつて社会的信用を失つていくのは良いことと思わねばならない。

そのはず、なのだが。

あまりにその瑕疵が小さすぎてみみちちくでみみともなくて、逆に憐憫れんみんの情すら湧くことを

惠美は止めることができなかった。

もはや、真奥に哀れみにも似た同情を抱くことも禁じ得ない。

「ち、千穂ちゃん！」

だが、まずは千穂だ。

あの状態の真奥と一緒に歩いている千穂が傷つくようなことがあってはならない。

千穂が真奥に想いを寄せていることは疑いもない同僚の書達なら皆知っていることだ。

勇者以前に一人の女として、千穂の友人として、彼女の純粋な気持ちや、魔王の愚かな有様で傷つけるようなことはあってはならないのだ。

そう思つて惠美は少し早足になりながら、二人に追いついた。

「あ、遊佐さん、アラス・ラムスちゃん」

「ばば、ちーねーちゃ、こにちや！」

惠美はアラス・ラムスのように真つ直ぐ二人を見ることができず、つい目を逸らしてしまう。

「おー、アラス・ラムス来たかー。……なんだよ惠美」

それでも惠美はどれだけ不自然なことになっても、こんな男と並んで歩いている千穂の矜持を守るために、決めた。

アパートまでは、真奥の背後をとり続けようし、

もちろん、宿敵たる勇者に背後をとりられた真奥は落ち着かない。

今更恵美が背後から刀物を突き立ててくるような事案は起こらないと分かっているが、それにしても恵美のボクシング取りは不自然なことこの上ない。

だが恵美として必死である。

本当なら恵美だってこんな事き方はしたくない。

だが万が一、千穂も『この状態』に気づいていなかったときのためにも、恵美は自分の体を張ることを決めたのだ。

一瞬、自分が自転車を預かり真奥にアラス・ラムスをおんぶさせようかとも思ったが、それでは隠し切れない位置にあるばかりか却って背後をとりにくくなると思いつめる。

「差佐……さん」

そのとき、千穂が悲しげな笑顔で恵美を振り返った。

「千穂ちゃん……あなた……」

その表情を見て、恵美は確信した。

千穂は、真実を知っている。

知っていて、並んで歩いている。

それはそうだが、二人で歩くのに、千穂が真奥の背後をとって歩くのはさすがに不自然すぎる。

このことから恵美は、真奥自身が今の自分の状況に気がついてないことも理解した。

恵美の腹の底から、怒りが湧き上がってきた。

真美が千穂を大切に扱っていることは理解しているが、こういう細かい配慮が行き届かなければなんの意味もない。

と同時に千穂のいじらしさに、東美の心は乱される。

こんな気の利かない、もっと言えばみつともない魔王に想いを寄せ、幸せになんかなれるはずなのに……。

「そろそろ、着きますね……」

「そ、そうね」

「ど、どうした二人共」

そんな女性二人の心中などまるで理解できていない様子。真美は、明らかに不自然な発言をする千穂と東美に違和感を覚えてしまう。

千穂と東美にしてみれば、もっと早く、もっと別のことに違和感を覚えてほしいところだった。だが、ヴィラ・ローザ学園の近所は住宅街で人通りも少ないし、赤の他人に見られてしまう可能性は低くなるだろう。

「あれ？ あそこにいるの、鈴乃さんじゃないですか？」

と、千穂がアパートの外階段の踊り場に佇む鈴乃の姿を認めて指さした。

鈴乃も千穂達に気づいたようだが、千穂と東美のボジション取りに気づいた瞬間、鈴乃は息を呑む。

そしてその表情を見て、千穂も恵美も確信した。

鈴乃も、知っているのだ。

「すずねーちゃ、ここにちゃー」

アラス・ラムス一人が、この世の全てのしがらみを撥ねのける純粋無垢な美少女で、鈴乃に向かって手を振ったのだった。

「どうして朝見た時点で言わなかったのよ…… あんなみっともないの……」

「い、いきなりあんなものを見て、咄嗟に気の利いたことが言えると思うか……」

「わ、私も結局言えませんでしたし…… やっぱ、どうしようもないですよあれは……」

「な、なんなんだ？」

今までそんなことは一度も無かったのに、今日に限って鈴乃は階段の下まで下りてきて三人を（というより千穂と恵美を）迎える。

そして真真から離れた場所で、三人顔を寄せて何かをぼそぼそ相談しはじめる。

「知らんけど、先入ってるぞ」

真真は首を傾げながらも階段を上がってゆく。

その後ろ姿を、千穂も恵美も鈴乃もつい追ってしまふ。



そして真実の姿が共用廊下のドアの中に消えてから、また頼を寄せ合った。

「大体アルシエルは何してるのよ！ あいつならあれくらい気づきそうなんじゃない！」

「そ、そうです。吉屋さんがあれを見逃すなんて……」

「魔王が言うには、アルシエルはまた泊りがけの派遣業務に出ているらしい……」

「……」

鈴乃からもたらされた情報に、千穂と真実は額に手を当ててしまう。

「いつぞやの訪問販売のときといい、なんなの？ あいつらはアルシエルがいないとまともに生活できないの？！」

「吉屋さんって、本当に壁の下の方持ちなんですわね……」

「と、ともあれだ、どうなのだ千穂殿。「アレ」は、やはり目立ったか？」

「ストップルームで一瞬すれ違っただけの私と本崎さんが気づいちゃいましたし……」

「私は衝動で後ろ姿を見た瞬間にはもうそこにはしか目が行かなかったわよ……あまりに驚けなくて涙が出そうになったわ」

「そ、そこまでか？ だが本人は気づいていないだろ？」

「本崎さんが言うには、穿くから、布が広がっちゃうんじゃないかって……」

「ああ、そういう……」

「ど、どちらにしてもだ、本人が気づいていないのなら、後からそれとなく指摘してやって、

傷つかないようにしてやるのが人情というものだらうな」

「そ、そうですね。こう、やんわりと、オブラートに包むみたいに……」

「……誰が指摘するのよ、私嫁よ」

「……だからこう、さあ今気づいたかのように遠和感がある程度の言い方をすれば」

鈴乃がそこまで言ったとき、

「うわあああああああああああああああ」

アパートの二階から、真奥の悲痛な悲鳴が響き渡って、三人はびっくりと身を凍ませた。

そして、何が起こったかを、三人は同時に確信した。

ついに、気づいてしまったのだ。

そして三人は忘れていた。

真奥の近辺に一人、基本的に気遣いという概念とは無縁の奥がいることを。

「おーい、悪いんだけどさ」

そのとき頭上の二〇一号室の窓が開いて、眠そうな目をした漆原半蔵が顔を出した。

三人は全てを悟った表情で顔を上げる。

「しばらく待っててもらえる？ 今真奥がダンスひっくり返してて、部屋敷らかつてるから」

漆原が顔を引っ込めてから、三人は遠い目で言い合った。

「言ったんだな」

「言つたのね」

「漆原さん……」

「う？」

ため息が、夜空の気配が濃くなった空に漂ける。

鈴乃が、木崎が、千穂が、恵美が、一瞬で気づいたのだ。

朝の時点ではきつと寝ていただろう漆原も、さすがに今の時間は目覚めていて、鈴乃や千穂や恵美と同じように、気づいたのだ。

そして、ごくナチュラルに告げたのだろう。

真奥のスボンの尻の下、足の付け根に、穴が二つも開いていることを。

髪

「こ、こ、こんな、ところに……」

畳の上に広げられたスボンを見て、真奥は戦慄していた。

「なんでこんなところに穴が開くんだったあめり」

真奥が私服として着用しているジーンズの両足の、足の付け根、股下<sup>もももと</sup>すぐ、足のすぐ下あたりの生地が白く変色しており、よく見ると縦糸がすり切れて消滅している。横糸だけが辛うじて生き残ってはいるものの、ここに足を通せば立派に穴が見えて、内側の肌色が見えてしまうだろう。

「しかも二本とも!!」

畳に広げられた三本のジーンズすべてに、同じような穴が開いていたのだ。

「あなた、私服のズボン三枚しか持ってたの……」

恵美にしてみれば、清貧を買っていたことを知っていて尚、そのワードローブの不十分なことに衝撃を受けている。

「仕事用のが三枚ある!!」

「そちらは大丈夫だったのか」

鈴乃の問いに答えたのは千穂だ。

「仕事中はこんなことにはなつてませんでした」

やはり気になって見てしまった真奥の仕事中のスラックスは、こんなことにはなっていないかった。

畳んでしまわれていたもう一枚のスラックスにも、異音は見つからなかった。

そして今の真奥は、とりあえず仕事用のスラックスを穿いて急場をしのいでいる。

「あ、あのさ、ちーちゃん」

「は、はい？」

悲痛な顔持ちでダメになってしまったジーンズを見下ろしていた真央は、この世の終わりのような声で千穂に尋ねた。

「その、ちーちゃんが気づいてたってことは、その……」

心根が正直な千穂は真央に嘘をつくことができず、血を吐くような思いで告白した。

「木崎さんも、心配していました……」

「うわああああああああああああああああああ」

真央は頭を抱えて突っ伏してしまふ。

「大変だなあ」

そんな真央を横目に漆原はマイペースに吸くが、心に深い傷を負った真央は思い切り噛みついた。

「バカ野郎ー 外に出ないお前と一緒にするな！ 衣類つてのは人間性がそのまま反映されるんだぞー！ お前尻に穴開けたズボンを平気で穿いてるってよそ様に思われてもいいのか!!」

「他人の評価なんて気にする生き方してこなかったし」

「ま、真央さん、大丈夫ですよ！ 私達はこれが不測の事態だって分かっていますから！」

千穂はフォローするが、

「でも、エンテ・イストラの人間からしてみれば、世界征服を目指した魔王はズボンのお尻に穴開けて外歩いてるって、全世界の歴史書に残したいくらい面白い事実よ」

「うわあああああああ」 惠美に見られたのが悔やんでも悔やみきれねえぞちくしょおおお おおお」

「聖典に新たな一ページが……」

「鈴乃おおおお」 お前冗談でもやめろ俺今本気で凹んでんだよおお」

「真奥さん……ごめんなさい。私が本崎さんが勇気を出して言ってくれてあげてれば……」

「千穂ちゃんは悪くないわよ。元はといえばこのことに気づけなかったアルシエルが、ある意味一番悪いんじゃないの？」

「そうだね、僕もそこに一番驚いてさ」

惠美の言葉を受けたのは綾原だった。

「最初見たときは虫にでも食われたかと思ったんだけど」

惠美達を外に待たせている間、真奥と綾原は他の衣類を三人分総点検したのだが、使い古しによる劣化を除けば、こんな面白い穴が開いているのは真奥のジーンズだけだったのだ。

「でも、真奥さん達の持ち物ってことは、そんなに古いズボンじゃないですよね？ なんでこれだけこんなになっちゃったんでしょ」

千穂の疑問に、真奥は乾いた顔で頷く。

真奥と青屋が日本にやっできてからまだ二年は経過しない。

ということとは、どんなに古くても真奥達が日本で購入した衣類は二年以上経過したものではないということだ。

中には古着も無いではないが、真奥のジーンズは本人曰く、二本が箕塚駅のユニシロ、一本は商店街の衣料品店で安売りしていたものを買ったものだという。

「理由なんかどうでもいい……おい、飯食うなら先に食っててくれ。今の時間ならユニシロもまだ開いてる。俺はズボンを買ってくるぞ」

真奥は幽鬼のような仕草でふらりと立ち上がると、財布を手に綿服を出ようとする。

「真奥、青屋に聞かなくて大丈夫？」

そんな真奥の背に漆原の声がかかる。

きつと漆原は真奥のズボンの穴も、こんな調子で指摘したに違いない。

そしてそれは、実は女性三人も思ったことではあるのだが、さすがに真奥が気の毒すぎて声に出すことは憚られたのだ。

真奥は据わった目で張り返ると低い声で言う。

「さすがにこれは緊急事態だ。ズボンの一本二本でガタガタ言うほど青屋も鬼じゃねえよ」

「でも青屋なら『襦袢は着てても心は錦』とか言いそうじゃない？」

「現代日本で真つ当な社会生活を営む大人がズボンの尻に穴開けて錦の心でいられるか！」

真奥はそう吐き捨てる、叩きつけるような勢いでドアを閉める。

「あ、真奥さん！」

千穂はいてもたってもいられず、傷心の真奥の後を追って出て行ってしまった。

鈴乃と恵美と漆原はそれを見送って、しばし沈黙。

「しかし……やはり何故こんな聞き方をしたのか気にはなるな」

やがて鈴乃が口を開いて、ダメになってしまった真奥のジーンズをつまみ上げる。

「あなたなんかずっと和服だからいいじゃない。私、一度自分の持ち物点検してみるわ。こんなところ意識して見たことなかったけど、もしそうならダメージは魔王の比じゃないし」

「僕は真奥があんなことで傷つくような繊細な心を持つてるとは思わなかった」

「魔王のズボンのお尻に穴開いてるとか、逆にこっちが傷つくわよ」

「ばばとちーねーちゃ、どこいったの？」

アラス・ラムスは真奥と千穂が出ていってしまったドアを不思議そうに見ながら恵美に尋ねる。

「ん……二人共、お洋服を買いに行っただのよ」

「ごはんは？」

「そうねえ」

恵美は鈴乃と顔を見合わせてから、あやすように言う。



真実を語ったところでアラス・ラムスには理解できまいし、理解されたらそれこそ真実がいたたまれないことになってしまう。

「みんなで一緒にいたいただきますから、もうちょっと我慢しましょうね？」

千穂が出ていってしまった以上、千穂が持ってきたものを勝手に食べてしまうのは気が引けるし、さすがに真実も気の毒なのでそう言うし、

「あい」

アラス・ラムスは素直に頷くのに、

「えええ？」

もう一人の子供が抗議の声を上げる。

「真実、先に食べてろって言ってたじゃん」

「あなたね……」

「ルシフェル……貴様という奴は……」

真実と鈴乃は心底厭厭しきった目で津原を睨む。

「世話になってる家主があんなことになって、少しは同情しようって気にならないわけ？」

「アラス・ラムスすらここまで聞き分けが良いのに、貴様等ずかしくないのか」

「な、なんでお前らそこまで真実狩りのこと言うわけ？ 逆にちよっと不思議なんだけど、お前らにしてみりゃ、真実がどれだけ恥かこうがどうでもいいことなんじゃないの？」

津原は思わぬ反撃に目を白黒させるが、東美と鈴乃は声を揃えて叫んだ。

「ものには限度がある……」

ズボンの尻に穴が開いて心に傷を負うような魔王に侵略された世界の住人として、もういい加減やってられないのだ。

## ※

「真奥さん、その、あんまり気を落とさないで……私達も悪かったんです、気づいてたのにどう言っただいのか分からなくて、その……」

「……いや、俺こそすまねえ、ちよつと荒れ方が悪かった」

笹塚駅のユニシロに向かう道すがら、意気消沈して肩を落とす真奥になんとか元気を出してもらおうと、千穂は必死だった。

「そりゃまあ、女にしてみりやどう言っただいのか分からねえよな。逆の立場だったら俺だってどうしていいか混乱するもんな。今日バイトに俺以外、男いなかったしな」

もちろん、それでも教えておいてくれれば、制服のズボンのまま帰宅するなど方策がとれたことは確かだ。

だがそれはあくまで結果論であり、既にズボンの尻に穴を開けたまま店に出動してきていた

真奥の心を慮おもんばかつてつい言いそびれた、という旨の言葉に嘘うそが無いことは真奥も分かる。

「まああれだ、穴が開いてたことは恥はづかずかしいけど、別に尻しつ丸出でしとか下着見えたとかさういうことじゃねえからな。ズボン買い換えりやそれでいいんだから、まあ見立て願ねがひよ」

若干くわん元氣を振り絞しぼった感が無いでもないが、とにかく真奥が元氣を取り戻もどかうとしている以上、千穂ちほとしてもこれ以上あの穴について言及することも無い。

そうこうするうちにあつという間に笹塚駅ささづかえきまで迫せまり着いた二人。

幸いまだ笹塚駅のモールはこの店もオープンしており、その並びにあるユニシロも溜ためりの通勤通学客でそこそこ客が入っていた。

「予算は……頑張つて五千円かな……」

真奥は店の前で財布を開いて数数える。

グリーンズが三本ダメになっているというのに予算五千円とは無茶むちゃが過ぎる気がする千穂だったが、

「もう夏終わるし、秋冬物出てるから多少安くなってるんだろ」

「成程、そうですよね」

笹塚駅のユニシロの店舗規模はどちらかといへば小規模なため、季節ごとに商品は頻繁きんぱんに入れ替わる。

夏も終わりに近い今頃なら、売れ残りの夏物がワゴンセールかまとめ買いセールの対象にな

っているのではないかと真奥は見ている。

「でもジーンズってそういう安売りしてます？」

「別にジーンズにこだわりのあるわけじゃないから、安く買えてあんまりおかしいデザインじゃないズボンだったらなんでもいいよ」

千穂は納得して、二人して店内へと入ってゆく。

「あ、真奥さんここに」

さほど広くもない店内。

千穂が指さした棚には夏の衣類が密集していた。Tシャツ一枚五百九十円だの、半袖シャツ一枚七百九十円だの、廉価だが出来年まで保管しておけばコストパフォーマンス的にはアリの衣類が沢山積まれている。

同じ一角には、吸汗速乾を売りにしているらしい薄手のズボン類も密集していた。

千穂はとりあえず手近なものを手にとり、値札を見る。

「本当だ、結構安いんですね」

シミタツタのチノパンが千五百円なら、安すぎと會って真い値段だろう。

「でも……やっぱ夏のズボンだから、生地薄くないですか？」

「裸よりはマシだろう？」

「や、そうですけどそういうことじゃなくて……」

真奥の極論に千鶴は苦笑するしかない。

「思えば真奥は、冬が明けきらない季節にも着る物が無ければ薄手のパーカーで外を歩く男だった。」

「見せてそれ……ああ、ダメだな、ウエスト周りが大きい」

「男の人のサイズってよく分からないんですけど、真奥さんどのサイズなんですか？」

千鶴が最初に手に取ったソータックには「87」のタグが縫い止められていた。

「今穿（は）いてるこれが、さっき見たら『76』ってなつてた。まあ、少し余量があるからベルト使えば多少の増減はありだと思（おも）う」

真奥は仕事用のズボンの腰（こし）を叩（たた）いて言う。

価格の安さが全てに優先する魔士軍にとっては、衣類や靴（くつ）は、体に合わせるものではない。許容範囲のサイズであれば、体を衣類や靴に合わせるのだ。

真奥はいくつかのズボンを手にとつては棚に戻し、とつては戻しを繰り返していたが……。

「……無いな」

「……ですね」

真奥の顔が段々と陰（くもり）なくなつてくる。

夏のズボン類は数だけでいえばかなりあるのだが、やはりお勧め品の運命が、ちようどいいよく出るサイズというのやはり残らないものなのだろうか。

一番小さいサイズが「73」でそこから一気に「81」に飛び、残りは全て八十台中盤のサイズのズボンしか残っていないようだ。

「あ、真奥さんこれななじやうも………これは、やめまじやうね」

「うん、ちよっと、なあ」

タダの数字だけ見て千穂が手にとったのは、世界の国旗がふんだんに散りばめられた、万国旗をそのまま縫い合わせたような、インターナショナルの意味を二重に履き違えているとしか思えないカーゴパンツであった。

「うーん、ベルトがあれば「81」もいけるかなあ。ちーちゃんちよっとさっきのと、あとこれ、見てくれ。試着してくるから」

「あ、は、はい」

千穂は真奥に先ほどのソータツタのズボンを手渡し、真奥も別のチノパンを一つ手に取って、店員に声をかけて試着室へと向かう。

「それでは、何かご利用ございましたらお声かけくださいね」

店員がそう言っ、真奥を試着室に案内し、ドアが閉じられる。

千穂はそのドアの前で少し壁に背を寄せかけながら、

「…………ふふ」

こんな場合だが、つい難笑いでしまう。

手持無沙汰な時間ではあるが、ちよつとしたデートのようではないか。

「いつか、立場が逆になることもあるかなあ」

千穂はぼんやりと夢想する。

自分が試着室に入つて、真央に可愛いかどうかを評価してもらふ。

それだけでも、夢のような出来事ではないか。

もちろん今回真央は酷く心に傷を負つてしまったのでただ楽しんでもしょうわけにはいかないし、アバートでは更紗達を待たせてしまっている。

それでもなんとなく、この時間がちよつとでも長く続けばいいと思つた矢先、

「ちーちゃん、どう思ふ？」

「は、はいっ？」

唐突に試着室が開き、真央が声をかけてきた。

千穂は少し顔を赤らめてからそつと覗き込むようにして試着室の真央を見、そして……。

「えっと……」

言葉に詰まつた。

一言で言うと、ダサかった。

このソータツタは無い。千穂の中で、そのことが確定する。

上半身がＴシャツで、真央のそれなりに引き締まつた体が窺えるのに、下半身がハイウエス

トの奴<sup>やつ</sup>風<sup>ふう</sup>になってしまい、腰回<sup>こし</sup>りには巻<sup>ま</sup>つたりという単語ではかばい切れないほど布<sup>ふ</sup>がだばついている。

さっきまで穿<sup>は</sup>いていたズボンが薄<sup>うす</sup>手だがスリムタイプだっただけに余計にもっさり感が際立<sup>は</sup>ってしまい、千穂は即座に首を横<sup>よこ</sup>に振<sup>ふ</sup>った。

「これはやめましょう。もう一つの、どうですか」

「やっぱ変か？」

「変です。体型に合<sup>あ</sup>ってないですし、それに真奥さんの持つてる服とも合わない気がします」

真奥のワードローブを全て知っているわけではないにしろ、今まで見てきた真奥の衣類と今日の前にあるズボンはどうしてもマッチしない。

「分かった。ちよっと待<sup>まち</sup>っててくれ」

真奥は素直に頷<sup>うなづ</sup>くと、また扉<sup>かど</sup>を開<sup>ひら</sup>める。

だが今度はすぐに、試着室<sup>ししやうしつ</sup>の中から、

「ダメだ」

という声<sup>こゑ</sup>が聞こえてきた。

そしてしばしこそ、そとまた動く音がして、真奥は元のズボンを穿<sup>は</sup>いて外に出<sup>で</sup>てきた。

「ウェストが余る。ベルト締<sup>し</sup>めても前のホツタが飛び出<sup>で</sup>てみっともねえ。やっぱ『旧』はちょっと大きい」



「そうですか……じやあそうすると……」

千鶴は先ほどとは違う顔に目をやり、真奥もその視線を追う。

「あれしかねえかなあ。でも、予算がなあ」

真奥の言いたいことは分かる。

二人が見ているのは、メンズのジーンズの棚。

多様な色、サイズが揃っているが、こちらは完全に秋冬仕様に移行しており、その分夏のものより幾分高めの値段設定になっているのだ。

「服装とか、数字が目には痛えなあ……」

真奥の絞り出すような声。

予算は五千円なのに、四千円近くのお金を出せば、ズボンは一本しか買えない。

真奥にとってこの五千円は、清水の舞台を横こぎ座敷させる覚悟で捻出した予算である。

もちろん青鬼も鬼ではないので、主のズボンが無いのをそのままにはしておかないだろう。

ここで一本買って、後から交津で二本買い足すということも決して不可能ではない。

だが、交津する前からそれを当て込んで込んで予算の大半を投じるというのは、話の運び方としては下策である。

「どうします……？」

「う、ううん……」

千穂も、真風のそういった葛藤は特別聞かずとも分かっているの、無責任に背中を押すことはできなかった。

※

「ただいま帰りました……なんだ貴様ら。何をしている」

夜八時。

帰宅した吉原は、部屋にいるべき主の姿が無く、代わりに東美とアラス・ラムスと鈴乃、そして漆原という珍しい顔ぶれが待っていて、思わず魔土城が勇者の一味に乗っ取られ、漆原が敵の軍門に降参してしまったということまで想像した。

それも致し方ない。

コタツの上には数々の料理が皿に盛られてラップをかけられ、あとはレンジで温めるだけ、という状況。

そのコタツの脇にそれぞれ食事のまようしく座っているのは東美と鈴乃であり、漆原はその背にアラス・ラムスを乗せて馬にされているのだ。

「漆原、これは一体どういう状況だ。魔王様はどちらにおられる」

大きなリニッタを畳の上に置くと、吉原はため息をつく。

「その前にアルシエル！　こっちから聞きたいことがあるわ！　あなた一体この非常事態にどこに行ってたのよ!!」

「な、なんだエミリア!?　非常事態!?」

煙るなりのこの物言いに、青屋は面喰らってしまふ。

「どこも何も、私は泊まりがけの仕事に行っていた。人伝に紹介された割のいい仕事だったから一日家を空けただけで、何故貴様に糾弾されねばならん」

「家空けるとは聞いてたけど、なんの仕事かくらい言えよ。どこ行ってたのさ」

馬が口を開き、青屋は頷く。

「そういえばルシフェルには言っていなかったか。治療だ」

「ち……!?　ちよっとアルシエル!?」

その回答に、今度は東美が面喰らう番だった。

「治療って、新薬研究とかそういうのの実験台になってデータ収集とかするんでしょ?　大丈夫なの?」

「なんだ」

「貴様が私の体の心配をするのか」

「するわけないでしょ。悪魔のあなた達が人間の薬使って腫瘍ったデータが出たらどう責任とるつもりよ!」

「別に今まで人間の薬を使って悪い結果が出たことは無いが」

「そういうこと言ってるんじゃないわよ！」

言い真（まこと）る惠美に、西屋は首を振りながら壁に置いたリュックを開け、タリアファイルを取り出し投（な）げてよこした。

「例（れい）よこれ」

「私が参加した治験対象の薬だ」

惠美は情報（じょうほう）を寄せながらもタリアファイルに挟（はさ）まれた一枚目の書類の表題に目を落とす。

「……塗布型の経皮鎮痛消炎剤？」

「外用薬の製品試験だ。製品コンセプトは家庭内作業の疲れをとる手軽な経皮消炎鎮痛剤。有（あ）体に言えば、塗る薬布だ」

「あれか、テレビで時々コマーシャルをやっている、辛い肩こりや腰の痛みに、といったタイプの」

鈴乃が書類を覗き込んで尋ねる。

「その、効き目が軽いタイプのものと思えばいい。強い痛みではなく、小さな疲労や痛みを和（な）らげるために継続して使用する薬剤だ」

西屋は、製品コンセプトの受け売りだということを前置きした上で言う。

鈴乃が言うような、テレビでCMを打っている製品は、概して効き目の即時性（しじせう）と強さを謳（うた）っているものが多く、軽い症状に対して使うと効果が強すぎる印象を与えてしまっていた。

そこで、軽い症状に軽い効果で対応する薬剤を販売する計画が持ち上がり、西屋はその最終試験の治験に応募したと言うのだ。

「へえ薬塗るだけなら僕にもできそ……」

「無理だな」

津原が話を聞いて漏らした独り言を、西屋は切って捨てた。

「この治験に参加するには厳しい試験があった。津原はもちろん、失礼ながら恐らく魔王様でも通過は難しいに違いない」

「は？　なんだよそれ」

「言っただろう。この薬は軽い症状に対して軽い効果を導くと。つまり、この薬の対象はハーブに肉体を融合するスポーツマンなどではない。主婦だ」

主婦だ、と引き締まった表情で言われても津原も悲も困ってしまいが、鈴乃は納得したよう（うなづいた）で小さく頷いた。

「ああ。成程そういうことか。男性向けのイメージが強い薬剤を、女性向けにも開発するとういう話なのだな」

「そういうことだ。試験期間の短さもあって、一通りの家事を高水準で行えない者はこの治験に参加できなかった。項目は多様にあったぞ。調理部門で言えば包丁の扱いだけでも項目があったな。私の場合、男性でありながら乳幼児期の育児の項目で高い得点を得たのが決め手だ

ったな」

「育児……」

恵美と鈴乃の目が、アラス・ラムスに向く。

アラス・ラムスが魔王城にいる間、一番彼女の世話をしたのは、言わずもがなの萬屋である。千穂の手はどきを受け、時には鈴乃の手も借りたりしたが、乳幼児の扱い方を心得ているという意味では、今でも恵美に次いでアラス・ラムスの世話に長けている。

こうして皆で集まるときに食事を作ることから、乳幼児を意識した献立作りもお手の物だ。

「調理、育児の他にも掃除、洗濯、その他家庭内において体を使う作業諸々を一日六時間行つてからの試験だ。正直、調理にしろ掃除にしろスペースが広くて道具も新しかったから、普段よりずっと楽な作業ではあったがな。試験に残った六十代の老婦人には、若い男性とは思えないほど立派だとお褒めの言葉も頂いたぞ」

少し得意げに話す萬屋を見て、恵美も鈴乃も、久しぶりに懐かしさを覚える。

「アルシエル……あなた、もうそろそろ、自分が悪魔だつてことの方に疑問を抱いた方がいいんじゃないの？」

「正直、そこまでやられると女の身として感傷すら感じるレベルだ」

「妻は身を助くだねえ」

凄厲すら、呆れとも感嘆ともつかぬ複雑なため息を漏らす。

「というわけで、私が不在だった理由はこれで良からう。言っておくが、その資料は部外秘だ。」  
 「口外すれば容赦せんぞ」

恵美と鈴乃にしてみれば、こんなことよりもっと世界に向けて口外したい事実がある。

「それで、一体貴様らはここで何をしている。魔王様はどちらだ。エミリア、まさか魔王様がいらっしやらないのをいいことに、魔王様を乗っ取ろうというのではあるまいな」

「誰が好き好んでこんな部屋乗っ取るのよ。それなら私はベルの部屋に住むわよ」

不毛な感嘆り合いを経て、恵美は畳の上に放置されていた、三本のズボンを描き出した。

「む？ それは魔王様の私服のズボンではないか。何故三本とも外に出されているのだ」

「見れば分かる。そのズボンのせいで今日の我々のみならず、千穂殿や本崎店長まで、非常に気まずい思いをしたのだ」

「何？」

「部屋は明を暗めると、やっと靴を脱いで部屋に上がる。」

「あるしえーる、おかえり！ おつつかきました！」

「……うむ。たたいま、アラス・ラムス」

アラス・ラムスの快活な連えと劣いの言葉に部屋は少しだけ顔を紅はせる。

恵美や鈴乃には基本的に常に敵対の意志を示す部屋も、邪氣の無いアラス・ラムスには弱い。

「しばらくその上で良い子にしているのだぞ」

「あい！」

「青屋……『その上』って、ちょっと」

日頃、妙に懐かれていた津原がこうしてアラス・ラムスと遊んでやること自体は実は珍しくないことなのだが、その旁は特別報いられることは無いのである。

青屋は正座し、ジョーンズの一枚を手取る。

「む、これは……」

青屋はすぐに例の穴に気がついた。

「二本ともか」

「そうよ。魔王は今日、そのズボン穿いて外を歩いていたのよ」

「何？」

東英の言葉に、青屋は表情を険しくする。

「こんなこと言いたくないし、言う義理も無いけど、それでも私はあまりに情けなかったわ。私の、人類の宿敵がズボンのお尻に穴開けて外歩いて、それをアラス・ラムスの馬に接触されて一丁前に恥ずかしさで悶えてたのよ。あなた、魔王配下の悪魔大元帥でしょ。家計が厳しいのは分かるけど、いくらなんでもここまですり切れたもの自分の主に着せてて恥ずかしくないの？」

「む、む……」



「真実（まこと）に全く言い返せない声（こゑ）屋（や）と、」

「僕はいつからアラス・ラムスの家畜（けちく）に成り下がったの」

抗議（こうぎ）の声を上げる雄（お）鷹（たか）。

「し、しかしこのジョーンズは確か二本はユニシロで購入したものだ。私も同じタイミングで自分のものを買ったが、こんなことにはなっていないはずだ」

「そうだね。そんななんつてゐる真奥（まおく）のだけだった」

アラス・ラムスの馬（うま）がそう言い、声（こゑ）屋（や）は首（くび）を捻（ひね）る。

「それで、その魔王様（まおうさま）はどちらに？」

「その有様（ようさま）見て泣（な）きながら駅のユニシロに新しいズボン買いに行ったわよ」

「むう……」

声（こゑ）屋（や）は苦悶（くもん）の表情（けっぺい）を浮かべている。

「今回（こんど）ばかりは許（ゆる）してやれアルシエル。魔王（まおう）があまりに不憫（ふびん）だ。千穂（ちほ）殿（だ）も魔王（まおう）と一緒に（いっしょに）行（い）って  
いる。そう無茶（むちゃ）な買い物（かひもの）はしまい」

「ああいや、こうなつてしまつては致（いた）し方（かた）ないとは思（おも）うが……ふむ。おい、その真（ま）」

「そろそろ僕（ぼく）、キレていいかな」

「魔王（まおう）様に電話（でんわ）しろ。このズボンを直すから、それを考慮（こうりょ）に入れて新しいズボンを購入（かひ）される  
ようにと」

「なんで僕がそんな……うん？」

「え？」

「は？」

津原は輝々パソコンに向かおうとして、今声屋が妙なことを言ったのに気づき、目を見開いた。

それは東条と鈴乃も同様だったようで、同じく疑問の声を上げている。

「直す……って言った？ それ……」

「うむ、この程度の大きさの穴なら、そう不自然ではない程度に塞げるだろう」  
なんてことの無いように言う声屋に、三人は目を丸くする。

声屋は押し入れを開けると、ボール紙の箱を取り出した。

「そ、それはまさか」

鈴乃が驚きの声を上げる。

その中には無数の針と糸が収まっていて、それが声屋の裁縫セットであることが分かる。

以前真央が、声屋は切れた電球を用いて穴の開いた靴下を繕っている、という話をしていたが、現実に裁縫セットを目の前に展開されると鈴乃は鼓動を起こしそうになる。

「当て布には……これを使うか」

さらに声屋は、グリーンズと似た色の青い布きれを何枚か取り出した。

「ちよ、ちよっとアルシエル、それ、生地が違わない？」

声屋の行動の衝撃から立ち直れない恵美が声をかける。

声屋が手にとった布は、色は青だが風合いが全く違うし、そもそもデニム地でもない。それを例の穴に当てたらそれこそ目立って目立って仕方が無いはずだ。

「何を言う。見えない場所に当てるのだから、これで問題ない」

「見えないって……いくらお尻の下とはいえ、生地が違えば目立つわよ」

「何？」

恵美の言葉に声屋は逆に驚いた声を出し、何座か恵美とジーンズに視線を往復させ、

「愚か者め。これをそのまま穴に当てるわけがないだろう」

「へ？」

そう言うとき声屋はズボンを裏返し、例の穴が開いている少し上。後ろポケットの内側の布を切り取り始めたではないか。

「ちよ、ちよっと？」

「長く着用した衣類を修繕する場合の当て布は、同じ衣類の見えない場所から切り取るのが基本だ。色落ちなどの経年劣化も似たような速度で進行するから見た目にもそれほど不自然にならない。切り取った箇所は着心地が極端に悪くならないよう、似たような厚みの布を当てがう。……青い糸がこれしかないか。あまり大きくは切り取れないな」

高屋は答えながら、大きな手で膝用に針に糸を通し、布の大きさを調整している。

糸通し、などという道具は、どうやらこの裁縫箱の中には入っていないようだ。

「似たような厚みって……それ」

「この布か？ 貴様は見覚え………といっても無理か。随分前のことだからな」

「え？」

「魔王様が日本で初めて悪魔型を取り戻されたときに、破れてしまったスポンだ。貴様もその場にいらたろう」

「えっ!? あ、あのときの!?」

悪美は大声を上げてしまう。

鈴乃が日本で暮らしはじめるずっと前。

まだ悪美と真奥が再会してから何日も経たず、千穂も、悪美や真奥達の真実を知らなかった

頃。

そのときは完全に真奥に敵対していた藤原の仕業によって、真奥と悪美と千穂と高屋がいた新宿の地下道が崩落したことがあった。

真奥はそのとき初めて悪魔型を取り戻したのだが、人間真奥真夫と悪魔である魔王サタンは体格が著しく異なる。

そのため折角高屋が購入した日頃より上等な衣類が二度と着られないほどボロボロになって

しまったことがあった。

「あ、あのとき魔王が着てた服!? いつもよりちょっと良い服だったあの……」

「ずっと、良い服だ。全く、魔王城に来る前から漆原は昔に我が家の家計の略だな」

「まああのときは本気で敵だったし?」

悪いれない漆原は、背からアラス・ラムスが降りてくれないので仕方なく四つん這いのままパソコンを立ち上げ、スカイフォンを起動する。

「素材が良い分、たが捨ててしまうのが惜しくてな。何かに使えないかと思っていたら図書館で読んだ本の中で、『刺し子』という手芸に関する記述を見つけ、題材として残すことにしたのだ」

元々刺し子は、衣類が現代のように安価でも豊満でもなかった時代に、保温、補綴などのため木綿布同士を木綿糸で縫い合わせたことが始まりとされる。

現代では手芸の一分野として確立し、日本各地には刺し子の文化が広く浸透している。

「布や衣類を大切に、長く使うための技術だという認識もあった。そのとき、私も自分のズボンを破損させてしまったからな。練習がてらやってみたら意外とうまく行つて、以降靴下やら何やらで、手芸の腕を磨いているところだ」

「ああ……」

漆原の悪魔型には、尾がある。

人間の衣類を纏（まと）っていていれば、当然スボンの尻（しり）を突き破（やぶ）って尾（お）が外に出ていくことになるので、声屋も恵美が見ている前で一度はスボンの尻に穴を開けたことがあるというのだ。

恵美も鈴乃も、目の前でちくちくと縫われ、修繕されてゆくシーンを、ただ果敢（どくだん）と見つめる。

「あ、もしもし真央？　今声屋が帰ってきてさ、真央のスボン直してるから、それ考えて買ってきてくれて……え？　うんそう、直してる。なんか綺麗になるっぽいよ。はい、んじやねあ、こらアラス・ラムス、イヤホンマイク返せて！」

漆原は背から降りないアラス・ラムスとイヤホンマイクの取り合いをしながら、

「さすがに黴（かび）いてたけど、了解したみたい。これから帰るって」

「そ、そうか、ならば夕食の支度を始めねばなるまいな」

それを聞いた鈴乃が、はっと我に返って襦（じゆ）を払い立ち上がると、ラップをかけた皿（はち）をレンジにかけるべく「〇二号室に戻る。」

「アルシエル……あなた自分が悪魔なことに、疑問は無いの？」

やれることの無い恵美はただ、そう問い、

「無いな」

声屋は即答する。

「元々魔界の悪魔は、機械や他人に頼るのではなく、魔力という媒介はあるにしろ、できるこ

とは自分で工夫してやる生き物だ。そうでなければ、魔界では生きていけないかった。私は日本に來たとき、生きていくのに必要だと思つたから、料理も洗濯も掃除も裁縫も自力で習得した。ただそれだけのことだ。私ができることなど、普通の人間が一週間も真面目に訓練すれば基礎が身に着くほどのものでしかない」

「それは極論すぎると思ふけど……」

言いつつ、惠美は完全に否定もできない。

自分でできないことを人にやってもらうことで代価を発生させ、人間の世の中は構築されていくが、やろうと思えばできることまで誰もが人にやらせ続けたため、結果吾侪から失われるものがあることは否めない事実だ。

「でも、結局どうしてそんな穴が開いたんだろうね」

「そ、そういえばそうね」

漆原が最初の疑問に立ち返ると、惠美もその疑問に結論が出ていないことを思い出すが、

「馬になつてゐるのに分からないのか」

針と糸を繰る手に視線を落としたまま、声壓はなんでもないことのように言った。

「この中で目撃、自転車に乗るのは魔王様だけだろう」

「あ」

惠美と漆原は、目からうろこが落ちたように異口同音に声を上げた。

「魔士様は遙遠もそうだが、どこに行くにも自転車をよく使われる。スピードもかなり出されているようだ。力を入れてペダルを漕ぐので、サドルと擦れるこの部分が削れるのだろう」

「ああ……」

「アラス・ラムスもあまり背の上ではしやぎすぎると、おむつがズレるぞ。気をつけろよ」

「うん？　ちょ、あ、アラス・ラムス、お前まだ何もしてないよな？　ちょ、ちよつと降りて

……」

「あん、やーの、まだなの！　もちよと！」

「いや、何も無けりやもう一回やってやるから頼むから一回降りて……」

顔をひきつらせながらアラス・ラムスを背中から降ろそうとする漆原。

「アラス・ラムス、そろそろご飯だから、ルシフェル馬から降りなさい。ね」

「エミリア！　お前今『ルシフェルバ』って言ったろ馬って!!」

「馬車馬のように轆けば少しは可愛げのあるものを」

「芦屋も顔上げずに何言い出すわけぞ」

「おいそこの駄馬、もうすぐ千樹殿と魔士が帰ってくる。少し手伝え」

「絶対手伝うもんか！」

そこに新たな風を持ってやってきた鈴乃にそんなことを言われて、漆原は口角泡を飛ばして手伝いを断固拒否する。



そして鈴乃の言う通り、すぐに外階段を上がる音が聞こえ、

「戻りましたー」

「吉屋、帰ったって？ズボン直せるってマジか？」

千穂と、吉屋がズボンを修繕すると聞いて嬉々として三千九百九十円の新しいジーンズを一枚購入した真央が帰宅する。

「吉屋さん……凄（こ）い……本当に直してる」

千穂は実際に針と糸で真央のズボンを修繕している吉屋を見て、衝撃を受けたらしい。

卓に着きながらも、目は吉屋の手元（てもと）に釘づけた。

「手習い程度の拙（う）い腕（うで）です。大したことではありませんよ」

千穂相手だと吉屋は謙遜（けんそん）してみせるが、作業を最初から見ている真央（まゐ）にしてみれば、ものの二十分程度で早くもズボンの穴（あな）が一つ塞（ふさ）がろうとしているのを見ると、とても拙い腕（うで）などという言葉は信用できない。

その後、吉屋は食事のために一旦作業を中断したが、千穂が帰る頃にはもう、一見して穴（あな）が閉（ふ）まっていたとは分からない程度に、三本のジーンズの修繕が完了したのだった。

夜遅くなる千穂の帰りを二人以上で送り届ける、といういつの間にかでき上がっていたルールの下、東美と鈴乃が千穂の帰宅に付き添っているこの日の帰り道。

「千穂ちゃん、元氣ないわね、どうしたの？」

千穂が、黙したままずっと顔を上げないでいるのを心配して東美は声をかけた。

「……すいません、ちよつと、自信失くしちゃって」

千穂は少し遠い目をしたまま答える。

「は？」

「超えなきゃいけない壁がちよつと高すぎて、私どうしたらいいか……」

「……あまり確認したくないが、アルシエルのことか？」

鈴乃が恐る恐る尋ねると、千穂はすぐに首を縦に振った。

「今日ほど誰かに『勝てない』って思った日は無いかもしれません」

「……」

東美も鈴乃も、かける言葉も無い。

想いを寄せる男性の傍らにいたい、と思うのは、恋する少女としては当然の想いだ。

「掃除、洗濯、料理はなんとかなると思ってたのに……裁縫は、盲点でした……」

「や、でも……うん、そうね」

東美は、今時あんなことをしようと思う方が珍しい、と言おうとして、寸前で言葉を吞み込

む。

最低限の生活に取って代わるだけの日常生活に於けるスキルを持たなければ、全てのしがらみを抜きにして、もし千穂の想いが真実に届いたとしても、実生活で真実に不便を強いることになりかねない。

「……だが千穂殿、それでもアルシエルは魔王の『配下』であって、対等な関係にいるわけではな……」

「私、まだ『魔王』と対等な人間になれる自信ないです……」

「……………うむ」

千穂の生活スキルは、決して本人の自己評価ほど低くはない。

比べる相手が悪すぎるだけだ。

だがそう言ったところで千穂は納得しない。

ならばこうなったときの千穂を元気づける方法は、一つしか無い。

「少しなら手解きはできるが、やってみるか？」

その餘力の提案に、千穂はまさしく飛びついた。

「教えてください！ 私針と糸なんて家庭科の授業でしか使ったこと無いし、お母さんもあまりお裁縫しないんで、他に誰も頼れる人がいないんです！」

「う、うむ、千穂殿、分かったから離してくれ。し、しかし手解きと言っても、あくまでエン

デ・イスタ流、もっと言えば大仏如教会の修道士流だ。こちらの言葉や技術とはまるで違うだろうから、後々自習は必須だぞ」

「もちろんです……」

「な、何か知らないけど、良かつたわね……そう考えると、ベルも結構多才よね」

「職業柄、嫌でも身に着けさせられたからな」

聖職者、しかも暗い仕事もこなす聖職者であった鈴乃の過去の経歴は、スパイや変装をこなさなければ務まらない場面が多々あった。

それらの技術はそのまま日常生活に転化すると非常に便利な技術になるのだが、西屋に対して妙な対抗心を燃やしている千穂を見て、恵美はふと思う。

「……日本なら、時代遅れって言われるのかもしれないけど……」

近年は、料理、洗濯、掃除は今や、女だけの仕事ではない、とする向きは多い。

だがやはり、できないよりはできた方がずっと評価も高く、人生も豊かになることだけは間違いない。

恵美自身、幼い頃に取った杓柄で、家事万端をこなすだけの自信はあるが、最近では日本での便利な生活に飽きられ、つい手を抜きがちになる場面が多いことは否めない。

「……ねえ、アラス・ラムス」

盛り上がりつつある鈴乃と千穂に聞かさないように、恵美はアラス・ラムスに聞いかける。

千穂の母親の前ではアラス・ラムスを顕現させておくわけにはいかないため、千穂を送る道中は常に融合状態なのだが、とうやらアラス・ラムスは治療と治療に邁んで少しおねむのようだ。

「ん……なあと、まま」

少しぼやけた遠事が帰ってきて、恵美は微笑む。

「眠いところこめんね。アラス・ラムス、明日は何か食べたいものがある？」

「……こーんすーぶ……ふあ」

「コーンスーブね、分かったわ」

恵美は細く、スリムフォンを取り出して、タブレットではないコーンスーブの作り方を検索する。

そして、必要な材料がこの時間から増え始めても道中のコンビニやスーパーで購入できることを確認した。

恵美は少し前を歩く鈴乃と千穂を見ながら思う。

千穂は、真実のためならどんな努力でも厭わない。

鈴屋もそれは同様だ。

鈴乃が信仰に準じて物事を身に着けたのは、広く世の中のために努力するためだ。そして真実とは、常に野望と、養うべき鈴屋と鈴屋のために頑張っている。

「アラス・ラムスがいて、良かった」

今の夏美が自分以外の誰かのために頑張ろうと思ったら、まず「書に考えるべきは『観』であるアラス・ラムスだ」。

今まで費<sup>つぎ</sup>ったもののためだけに突き進んできた夏美はこのとき初めて、今ある大切な人のために、ちよつとだけ努力を試してみよう。

そう、思ったのだった。



藤村・下田の：藤村は藤村





天気予報の数値上の最高気温は下降線を描いているはずだが、まだまだクーラーの冷気が恋しい頃。

勤務先であるマダロナルド轄々谷駅前店に出勤した真奥は、カウンターの中で眉根を寄せながら小さな鏡面を覗いている木崎を発見する。

「おはようございます木崎さん。どうかしたんですか？」

「ん？ ああ、おはようまーくん。いや、ちよつとな」

木崎は目だけで真奥を見てから、またすぐに鏡面に視線を戻す。

横から覗き込むと、どうやらそれは手書きの領収書の束のようだ。

「どうしたんですか、領収書なんか」

「いや、大したことではないのだが……まーくん、最近横江の顔を見たか？」

「は？」

思いがけない質問に、真奥は目を見開く。

マダロナルド轄々谷駅前店の商売敵であるセンタッキーフライドチキン轄々谷店の店長横江

三月の正体は、地球の人間ではない。

異世界エンテ・イスラの天界からやってきた大天使サリエルであり、かつては真奥や、真奥

を敵として狙う勇者エミリアこと道徳悪美と敵対し刃を交えたこともある。

敵国の末、諸般の事情によりマダロナルドの店長木崎真弓と相見えたサリエルは、木崎に一

目徳れ。すっかり脅威さになってしまい、以後は大天使の使命など安全に宇宙の彼方にすっ飛ばして、木崎のハートを射止めるべく斜め上のアブローチを繰り返しているのだ。

「猿江店長ですか……いえ、そういえば見てませんね」

普段は「サリエル」と呼び捨てにする相手だが、真奥達の事情を知らない木崎の前ではライバル店の店長として扱わなければならない。

真奥の記憶では、確かにサリエルこと猿江三月はここ最近来店していなかった。

「ふむ。もしかしたら私がいけない間に来ているのかと思ったが、そういうわけでもなさそうだな。奴は私の不在時は必ず手書きの領収書を切っていくだろう？」

なるほど、それで木崎は領収書の束と睨めっこをしていたのか。

猿江の本崎へのアブローチは、かつて彼が真奥や千穂に対して様々な狼藉を働こうとしたことを考えれば信じ難いことだが、狼藉の臭いを感じさせない。

もちろん狼藉を犯さなければ何をしてもいいというものでは決してないが、それでも度量が大きい相手ならギリギリ笑って済ませられる程度に収まっているのは確かである。

猿江のアブローチは、基本的にお互いの店が営業している時間内に限られ、木崎のプライベートを採ることもしない。

大体が大御な贈り物を抱え謎のボエムを大声で叫びながら来店し、尋常ならざる量の注文をして、長くても三十分程度で帰ってゆく。

問題はそれが最大で一日三回、即ち三食分あることだが、他の客の迷惑にならないうちにはちよつと個性が突出したお客様ではない。

かつて色々な勘違いを経て出入り禁止になったこともあるが、現在ではそれも解除されている。

以後もそれなりにけたたましく来店し、常識的な範囲で注文をして帰っていくことを繰り返していたが……

「でも意外です。木崎さんが、横江店長が来ないことを気にするなんて」

「気になるさ。君は気にならないのか」

「え、その……」

木崎の言葉に、遠に真真が面喰らう。

横江が木崎に全力で想いを寄せているのは、木崎本人を含めマダロナルドの従業員や常連客、果ては近隣店舗の従業員までが知る事実である。

まさかとは思いが、横江が来ないことについて、木崎の中になんらかの想いがあるのだとしたら……

「今まであれだけ熱心だったのが突然姿を現さなくなると、どこかで新しいターゲットでも見つけたのかと不安になる。仮に相当な女好きだろう？」

「え、ええ、多分……で、でも、不安って？」

「奴のあの暑苦しい斜め上のアプローチは、自惚れでなく私だから受け流せているというところか否定できん。もし不特定多数の女性にあんなことをやってみろ。状況次第では一発目からお縄を頂戴することになる」

真剣な顔で言う木崎に、真奥はただただ目を瞬かせる。

「奴としてこの商店街の仲間。そこから犯罪者が出てしまうことは、商店街にとっても我々にとっても大きな損失だ」

「ああ……そういう方面の心配……」

真奥はようやく得心した。

よもや木崎が龍江のアプローチに心を動かされているのではないかと一瞬不安になりはしたが、木崎は真奥よりもずっと現実的な心配をしていた。

「しかしそうか。やはり来ていないか」

木崎は小さくため息をついて、領収書の束をレジ下の棚に戻す。

「たまには敵情視察もかねて、私から出向いてみるか。それで向こうの従業員にそれとなくヒアリングをして、万が一奴の出動状況がおかしいようなら商店街の会長に相談を……」

「や、それはまださすがに気が早いと思えますよ!?」

木崎の中ではもはや龍江がどこかで犯罪を犯しているか、その前夜であると決まっているらしい。

「は、はら、向こうも何か色々売上強化月間とかで忙しいのかもしれないじゃないですか。最近の横江店長、なんとなく木崎さんのやり方分かってきてるみたいだし、真面目に働いてるんじゃないですか？」

「どうして熱心に敵の弁護をしなくてはいけないのかと自問自答する真奥だが、大事になってサリエルにヤクを起こされても困るのでなんとか木崎を有めると、

「ふむ、まあそれもそうか」

木崎は納得したのか、小さく頷くが、

「何かあったらそのときに考えよう。とりあえず近所の交番の番手を従業員に周知させるか」  
やはり横江がトラブルメーカーである前提は覆らないようだ。

「あ、そうだよーくん、一応言っておくが」

「はい？」

「私が親の薬店を心得ちにしてるなどと誤解してもらっては困るぞ。横江は売上の的には上客かもしれないが、店にとって本当に良い客かどうかは売上だけで測れるものではないからな」

「それは分かっています」

本崎に限って、横江のアプローチにかすかでも心を動かされるようなことなどあるはずがない。そもそも木崎は、他人へ好意の感情を抱くことが極端に少ないように思える。

もちろん木崎も人間だから全人類に分け隔てが無いわけではないだろうが、少なくとも木崎

が仕事以外のことで人間を評しているところを真奥は見ることが……。

「いや、あれはどうなんだろうな」

以前一度だけ、本崎が真奥の知らないある人物を評して『終生の宿敵』と述べ、恐ろしい対談意識を見せた瞬間があった。

その人物は他でもない、センタッキープライドチキンに在籍しているらしい。

センタッキー轄々谷店の出店が決まったときにやたら機嫌が悪かったのも、何かと売上などでセンタッキーに張り合おうとするのも、恐らくその人物が大きく関係しているのだろう。

本崎をして『終生の宿敵』と言わしめる相手は、どんな人間なのだろうか。

本当ならば狭江ではなくその人物が轄々谷店の店長としてやってくるはずだったそうだが、結果は今この状況が物語っている。

「あれ？」

だが、真奥はふと、おかしいことに気づいた。

何故本崎は、その『宿敵』が向かいの店の店長としてやってくるはずだったことを知っていたのだろうか？

同じ義店街のこととはいえ、センタッキー轄々谷店の営業開始前に誰かが挨拶に来たようなことは無いし、そもそもマダロナルドの社員である本崎が、センタッキーの人事情報を知っているのも妙な話ではないだろうか。

そのときだった。

「あの、木崎さん」

「ん、どうしたちーちゃん」

ホールでテーブルを拭いていた千穂が、少し困ったような顔でレジにやってきた。

「お客様なんですが、その、お向かいの鏡江店長と」

その瞬間、木崎は真奥に向かって苦笑する。

「噂をすればだな」

「はあ」

「それでどうした、レジにご案内すれば……」

「いえ、その、鏡江店長と一緒にいらつしやったお客様が、その」

千穂は少し困ったような顔で、店の入り口を振り返る。

「店長の木崎真司を呼べ」って……」

「んう」

木崎と真奥は同時に首を傾げた。

千穂の伝える言葉には、かすかに不穏な気配が漂っている。

第一、鏡江が来たのなら店内がこんなに静かなはずがない。

彼は噂々谷駅直店の常連客の間で、一人フラッシュモブと匿名されるくらい日替わりで木崎

への愛を語る言葉を用意してきているのだ。

「綾江と一緒に誰か来たのか？」

不審げな顔をする木崎だが、お客様から呼ばれたとなれば社（会社）がないわけにはいかない。

レジを出る木崎をなんとなく真奥も追ってしまい、千穂が木崎を先導する。

と、確かに入り口には大天使サリエルことセンタッキー轄々谷商店長綾江三月。

だが彼らしくもなく妙（めづ）にかしこまった様子で大人しくその場に立っている。

どうやら本命は、綾江が付き従っている小柄な女性のようにだ。

店の外から降り注ぐ日中の陽光が逆光となって、その人物の顔がはっきりと見えなかった真

奥だが、

「……ん？」

唐突に木崎が歩みを止めたので真奥は驚いた。

「き、木崎さん？」

それどころか木崎の背中から妙な怒気が漂いはじめるではないか。

人の負の感情を魔力に還元する悪魔だからこそ分かる、その空気の変化に真奥は慄（おそ）く。

これまでも木崎の怒りのパターンをいくつか見てきた真奥だが、そのいずれにも当てはまら

ないほど大きく鋭い感情の名は、敵愾心（てきざいしん）。

普段の木崎なら、全く以（も）って有り得ないことだが、来訪者に対して明確に敵意を放射してい



るのだ。

かつて、鹽江が全裸で来店しない限り警察沙汰にはしないと、冗談交じりに言っていた木崎とはとても思えない。

稀に現れる理不尽な客に対しても誠心誠意接客する木崎が、一体どうしてしまったのか。

千穂は先導している分、真奥よりもはっきりとその気配を感じ取ったことだろう。

不穏な空気を感じて木崎を振り返った千穂の顔が恐怖に歪むのを、真奥は見逃さなかった。

「……何をしに来た」

明日、地獄が減じるのではないかと真奥は思った。

あの木崎が、客に対してなんという言葉を吐くのか。

真奥も千穂も不測の事態に完全に凝固してしまい、ただただ事態の行く末を見守ることしかできない。この期に及んで鹽江が何も言わないのも妙だった。

普段なら顔を合わせた途端にその場で踊り出しかねない鹽江が、今日は借りてきた猫のように隣っこで小さくなっている。

息詰まるような時間は、ほんの一時だった。

「久しぶりに会ったっていうのに、随分冷たいのね？」

その声は、木崎でも、千穂でも、鹽江でも、もちろん真奥でもない。

「お客様」の声だ。

「何をしに来たものないわ。ご挨拶よ、ご挨拶」

トゲのある声色のその女性の姿を、真真はこのときはっきりと見るこゝろができた。

セミロングの髪を後ろで纏め、ビジネスバッグを肩からかけた、半分私服のようなパンツスーツ姿。

庭のころは、本崎と同じくらいだろうか。

勝負気と言えば聞こえはいいが、一見笑顔で愛想を醸し出す女性からも、相当の敵意が本崎に向かつて放射されている。

「挨拶だ」と？」

本崎の重い言葉の弾丸に、また真真と千穂は身を震ませる。

「ええ、私の担当エリアの近隣同業他社には、一度ご挨拶しておいた方がいいと思って」  
謎の女性のその言葉に、本崎の鬼面の形相が一段険深くなる。

「担当エリア？」

「そうなのー どういうわけか店長赴任の直前に辞令が出てねえ？ 私、今渋谷西エリアのマネージャーなのよ」

「貴様がエリアマネージャー？ 笑えない冗談だな」

「冗談じゃないもの。私あなたみたいにならないういことしない主義だから、昇進も早いのだよ」

「……………」

「ひっ」

建場は、真奥と、千穂と、そして鏡江から同時に起こった。

木崎はモデルと見まごうばかりのすらりとした長身と、鏡江以外の固定ファンも大勢いるほどの美貌を誇るが、その存在全てが怒りという感情に向けられた場合、言葉にはとても言い表せないほどの迫力を伴った恐怖を周囲に与える。

「なんだかねー、この鏡江が」

と、謎の女性はずぐ隣にいる鏡江を、ビジネスバッグでト突き、

「おふうっ」

結構いい当たりだったらしく、鏡江が妙な声を上げる。

「あんたが優秀だ優秀だ美しい美しいってアブラゼミみたいにうるさいもんだから、久しぶりに顔拝んでやろうと思ったのよ。あんたとやり合った昔が懐かしくなってるね。思えばあんたと本当の意味で勝負をつけたのって、大学のあのイベント以来だと思って」

「はお、貴様があんな下らんイベントを心に留めているとは意外だったなあ」

二人の共通の思い出にある謎のイベントのことなど知りたくもない。

真奥と千穂の想いはこのとき一つになった。

早くこの地獄が終わってくれ。

真奥はこのとき初めて、魔力に当てられて苦しむ人間の気持ちがあった。

怒気を隠さない木崎の傍にいと、それだけで冷や汗が流れて、呼吸が苦しくなるのだ。

「そりゃあね、あんたと違って人の褒め言葉を素直に受け取れないほど挫かれてないし、学生時代のいい思い出の一つよ」

「……っっっ」

「ま、真奥さんん」

遂に千穂が、泣きそうな顔で真奥の方に避難してきた。

千穂は、真奥や銀江と違い普通の人間である。

魔界の王と天界の天使ですら、この場にいるのが辛いのだ。

ただの女子高生ではない千穂にとっては、自我を保つことすら困難な恐ろしい空気である。このままここでこの二人に話を続けさせてはいけない。きっと良くないことが起こる。

真奥は、自らを書い立たせるためにも、声を上げた。

「あ、あのお……ここですと他のお客様にご迷惑になるので、よろしければ奥のスタッフルームに……」

決心に反比例して飛び出した声音は自分でも嫌になるほど弱々しかったが、真奥としては精一杯の勇気と知恵を振り絞って出した一言である。

だが、謎の女性は真奥のその一言を視線すら向けずに一蹴した。

「別にここでもいいわ。大して時間はとらせないし、それに、言うほどお客様もいらつしやらないようだし」

「げっ？」

「うわああん!!」

真奥と猿江は同時にうめき、遂に千穂は泣きながら逃げ出してしまった。

今、この正体不明の女性には、本崎に決して言つてはならない一言を口にした。

いや、正体はセンタツキーの社員で、猿江の上長に当たる人物だろうということが話の流れで分かるのだが、一体何故この人は本崎の連騎に魅れるようなことばかり言うのだ。

本崎の背が、まるで爆発寸前の風船のように怒気で膨らむ。

「そういえば小耳に挿んだんだけど、立て続けに新しい乗客入れるんですってね?　うちの店より平均客数少ないくせに」

「わああああああ!!」

「ま、マナージャー!　そ、それ以上は!　おうふっ!!」

本崎の気性をよく理解している真奥はパニクタに陥り、事ここに至って猿江も焦りを露わに女性を止めようとするが、女性猿江を下突き返して、その口を閉じようとはしない。

「その割にはいつまでたってもアルバイト募集の告知を続けてるわよね?　どうせまたつまらない恋愛主義を發揮して、アルバイトを巡り好みしてるんでしょ」

「あ、あ、あ、あ、あ」

「店舗規模を考えれば悪い売上ではないようだけど、あんたそれじゃ結局永遠の長寿じゃない。学生時代から語る夢だけはご大層だったけど、大企業にこのまま埋もれるつも……」

聖書に刻まれた古代都市、ソドムとゴモラに住む愚かなる者達は、きつと見たのだろう。  
この絶望の光と、爆風を。

「帰れっっ!!!」

店の全てのガラスを粉砕し、そうなる木崎の怒声が響き渡り、真実も、強迫も、這う這うの体でその場から逃げ出したのだった。

その夜のダイヤ・ローザ警報二〇一号室。

最近頻度が増している魔王城での人侵入り脱出した夕食会は悲愴な空気に包まれていた。

「えぐっ……えぐっ……」

「大丈夫？ 千穂ちゃん」

「は、はい……うううう」

腰の上に伏して泣きじやくる千穂を優しく慰めながら、東海は真実をきくと脱む。

「本当にあなたが何かしたんじゃないんでしょね」

「むしろ何もできなかったんだよ……」

聲に涙の雫を落としたながら、千穂が首を横に振る。

「真奥さんは悪くないです……でもあの瞬間のことを思い出すと、私、どうしても怖くて、怖くて……うええええ……」

高速道路が崩落するほどの戦闘に巻き込まれ、大天使と真っ向から事を構え、悪魔に誘拐されても瀕とした際度々崩さなかった千穂がこの性えようである。

真奥も、そんな千穂を見ていると痛ましい気持ちになる。

「千穂ちゃんがこんなに泣くんなんて……よっぽど怖い目に遭ったのね」

「ちーねーちゃ、いたいたいとんでくの」

アラス・ラムスも横から必死に千穂を慰めている。

「しかし、聞けば聞くほど信じられん。あの本崎店長かな」

千穂が泣きながらやってきた理由を最初から聞いた鈴乃は、胸を組んで唸る。

本崎真弓の人となりを知っている鈴乃や真美にとっても、あまりに意外な話と言わざるを得なかった。

本崎がお客様に隠れなき暴言を吐き、あまつさえ実力行使で店から叩き出した。それが外側から見た事件のあらまじだった。

そして本崎は、自分がしてしまったことを包み隠さず上長、つまりマダロナルド副々谷駅前

店のエリアを統括するマネージャーに報告したのだ。

本崎をよく知るマネージャーは最初信じなかったし、現場で本崎と共に働く真奥達も、未だに自分の見たものが信じられない。

だが、本崎は上長に己の不明を詫<sup>や</sup>び、社内処分を下さすようお願いしたのだ。

「俺も正直何がなんだか分からなかったよ」

「そんな報告を自分でして、本崎店長にお咎<sup>とが</sup>めは無かったですか？」

「それが……」

てきばきと夕食を用意しながら尋<sup>たず</sup>ねる声屋<sup>や</sup>の間に、真奥は暗い声で首を横に振った。

減給十パーセント一ヶ月。

謹慎三日間。

それが、本崎真弓の起こした不祥事に対し下された処分である。

はっきり言って、かなり重い処分だ。

だが口頭注意で済ませようとしたマネージャーに対し、本崎がそれでは納得できないと言いつ張ったのだと、真奥はそのマネージャー本人から電話で聞かされた。

「それで、結局何者だったのだい？ そのセンタッキーのマネージャーというのは」

真奥は、鈴乃の問いにやはり首を横に振る。

「サリエルのバカが来なければ、本来はその女が向かいの店長として来ることになってたらし



いんだが、それ以上は」

「ちょっと待って。どうしてあなたセンチッキーの店長の人事を知ってるのよ」

やはり恵美も、本崎がセンチッキーの人事を予め知っていることに疑問を抱いたらしい。

「いや、本崎さんが前に言ってたから」

「そうじゃなくて」

「本崎さんが知ってることだっておかしいって言いたいんだろ。俺こそ知りてえよそんなこと」

だが現時点ではあまりにも情報が少ない。

一体本崎はどうしてしまったのだろうか。

謹慎が明けた曉には、事情を聞いても良いものだろうか。

そんな思いが去来する中、一つだけ真奥の中に確信として残ったものがある。

あのセンチッキーのマネージャーこそ、本崎の『終生の宿敵』に間違いない。

「ねー、それ、この人じゃないの？」

と、そのとき。真奥の背に漆原が声をかけてきた。

「え？」

「これ、センチッキーの名牌。俺も話したことあったでしょ」

「ああ、あったなそんなこと」

横江の正体が不明だった頃、漆原がセンチッキーの人事データベースに不正アクセスし、横

江の素性の不可解さを指摘したことがあった。

そのとき藤原が言っていた「元々来るはずだった店長」の名は確か……。

「うわあああんん!!」

「さ、佐々木さん!? お気を確かに!」

藤原の操作でディスプレイに写真が表示された途端に、千穂がまた恐慌をきたし、そんな千穂を見慣れていない斉屋が慌てる。

「こ、こいつだ! この女だ!」

真奥は藤原の後ろからディスプレイを食い入るように見た。

「『田中真子』か……」

写真で見ても勝気そうな印象が伝わってくるこの女性こそ、水崎と真つ向からやり合ったあの女に間違いない。

「おい、これで思い出したけど『重江三月』って、確かもう一人いるんだろ? そいつ今どうなってるか見られるか?」

「ああ、そういえばそんな話もしたね。えーっと、ちょっと待って」

藤原はしばしパソコンを操作し、

「あー、ちゃんと在籍してるね。サリエルのせいでクビになってるとかは無さそう。店舗業務とは全然違う部署にいるっぽいよ」

「そうか……」

全く見知らぬ他人ながら、もしかしたらサリエルが元からいた濱江三月氏を書したり経歴を乗っ取ったりしたのではないかと不安にはなっていたのだ。

「でもそう考えるとき、サリエルは明らかに普通じゃないやり方でセンタッキーの社員になってるんだから、真実だって魔力取り戻したらなんともなるんじゃないの？」

「あんな、俺は金や地位だけを得たいんじゃない。仕事を学びたいんだよ。ただ単純に肩書きだけ正社員になりやいいってもんじゃないんだ」

「僕にそんなこと主張して、理解できると思う？」

「部下を信じる俺の心意気をなんだと思つてやがる」

「徒勞」

「濫取ああああっ——貴様魔王様の御心をなんと心得るかあああ——」

濫取のどこまでも自分に正直な発言に、横から貴様が食つてかかる。

「だから徒勞だなあつて言つてるだろ——」

「この殺戮しがい——貴様を魔王様の様で養っていることこそまさしく徒勞だ——」

どこまでも実の無い言い争いを続ける濫取と貴様をどかし、真実はパソコンの前に陣取った。

「田中聡子……経歴に特別気になる点はないな。なあちーちゃん」

「は、はい……」

「木崎さんって年齢いくつか知ってる？」

「え？ 前にちらっと話を……確か私と十歳差とか言ってたような……」

「じゃあ二十六、七と考えれば、年は木崎さんと同じ年くらいか。昔からの知り合いっぽいし、何かあったのかな。宿敵って話が冗談に聞こえないレベルで仲悪そうだったもんなあ」

「なんですか？ 宿敵って」

「ん、前にもよつとな。木崎さんがこの田中って人のことを「私の終生の宿敵」なんて大袈裟な呼び方してたのを聞いてさ」

「うう……その田中さんには申し訳ないですけど、もう顔も真見るだけで私あのかの光景がフラッシュバックして……」

千鶴がまるで日光を恐れる吸血鬼のようにパソコンの画面を見ないようにしている姿がなんだかおかしいが、真真としても笑う事では済まされない。

「この人がしばらく向かいのセントッキーにいたりとかいうことになったら、どうすつかなー」  
真真は結局、全くこの田中龍子と話をすることができなかった。

どうすることもできないうちに木崎が田中を叩き出してしまったせいで一緒に横浜も出ていってしまい、一体どんな意図があつて来店したのかも分からない。

エリアマネージャーという存在は、来ないときは全く来ないが来るときはやたらと顔を見る、ということがあるので、木崎がいない間に真真が田中と接触する可能性は十分にあり得るのだ。

「もしまた来たら、何事も無かったように普通に対応するしかねえのかなあ」

類杖をついてため息もつく真奥だが、

「随分と受け身なのね。千穂ちゃんがこんなに情がってるんだから、敵情観察して積極的に防衛策を考えなさいよ」

「敵情観察？ センタツキーにか？」

千穂を驚めながらの夏美の提案を、真奥はしばし熟考し……。

翌日の勤務中の昼休み。真奥はセンタツキーの前に立っていた。

店の外から店内を軽く覗くが、あのマネージャーの姿が見当たらない。

「サリエルはいるみてえだな」

真奥は意を決してセンタツキーのドアを開き、ふとあることに気づく。

「そういえば俺、こっちの店来るの初めてだな」

同業他社であり、天界の大天使が店長を務めるという、真奥にとっては二重の意味で應亮殿の店にこれまで入ったことが無かったのは自分でも意外だった。

店内は落ち着いた内装でシタタに纏められており、マダロナルドよりやや高級感を演出しているところは、成程、商品単価が高いだけはある。

空いている時間を狙ってきたので真奥の番はすぐに回ってきて、狙い通り、真奥は横江が担当しているレジの前に立つことができた。

「いらつしやいま……なんだ、魔王が」

横江は真奥の顔を認めるなり一瞬で営業スマイルを解除するが、少し疲れたように目を伏せた。

「なんの用だい。僕には今、君と会話するような元気は無いんだよ」

「お前の上司が木崎さんの機嫌を損ねたせいとか？」

「……」

横江は痛いところをつかれたようにうめき、そして不安げな声で真奥に尋ねてきた。

「……木崎店長は、あのあとどうした」

「ああ。お前らを乱暴に追い出したカドで、会社から色々処分食らっちゃった」

「じゃ、処分？ ああ、なんと言ふことだ……この僕がいながら……」

横江はその場に崩れ落ちそうなほどの勢いで、カクガタと震えはじめる。

「お前がいたってなんの役にも立たなかったじゃねえか」

「き、貴様に言われたくはない……貴様とて田中マネージャーと木崎店長との間に割って入ることなどできなかったではないかし」

大天使も魔王が顔首揃えて、ファーストフード店の社員同士の争いに割って入ることができる

ないなど情けないにも程があるが、

「何、お前、あのマネージャー苦手なのか」

「基本的に美人には弱い」

「そういうこと聞いてんじやねえよバカ」

真剣は思わずカウンターの壁をついてしまう。

駿江の好みなど知りはないが、本崎が月や水や夜のような美しさなのだとしたら、田中選手はその対局の、太陽や夏の野のような華やかな美しさだ。

異性としてお近づきになりたいかどうかはさておき、本崎への想いが真剣である駿江も許容するほどの美人であることは間違いない。

「あー、つまり……田中マネージャーは……どうやら本崎店長の学生時代の同級生らしい」

「やっぱそういうことなのか。古い知り合いだとは思ってたが」

もちろん名簿に不正アクセスしたなどということはおくびにも出さない。

「それで、僕が本崎店長と交流があるという話をしたら妙に食いついてくるから、僕としても本崎店長の話を聞けばと思い、色々な情報交換をしたのだ。そうしたら昨日突然やってきて本崎店長に挨拶に行くと言い出して……」

「ふむ……」

田中選手の方から本崎に会いたがっていた、ととれる話だ。

「でもお前それじゃ、お前があのマネージャー苦手って話と繋がらねえじゃねえか」

「だから美人には弱いと言っているだろう」

「お前どこまで本気なんだよ」

「魔王、君こそ一体なんなんだ。客でないのならお引き取り願うぞ。今の僕の心は、会社から処分を下された本崎店長の心を思い張り裂けそうなのだ」

そのまま爆発四散してしまえばいいと思う真奥だったが、そういうわけにもいかない。

「あー、持ち帰りで、オリジナルチキン三つ」

「……かしこまりました」

お金を払う以上、その人物は客。

普段とは場所と立場を違えて、猿江は真奥の注文を順々とこなす。

「で、情報交換ってどんな話したんだよ」

「まだその話を続けるのか」

猿江はあからさまに嫌そうな顔になったが、それでも素直に言葉を続ける。

「大したことじゃない。田中マネージャーと本崎店長の付き合いはかなり古いということか、僕が本崎店長に熱を上げていることなど色々だ」

「俺、お前のそういうところ尊敬するわ」

「あとは、この前のことだな」



「この前のこと？」

「佐々木千穂に概念受容の訓練をした帰りに会っただろう。木崎店長と」

「……ああ」

緊急事態に真奥達に助けを求めたい、との理由で、かつて千穂が法術の一つ、概念受容を会得するための訓練をしたことがあった。

その過程ですりエルに協力を求めたのだが、訓練の帰り、たまたま本崎と鉢合わせたのだ。そのときに交わされた会話を思い出し、真奥ははっとする。

「お前まさか話したのか？ 木崎さんの……」

「見損なうな。人の夢を簡単に明かすほど考えなしではない。ただ、もしかしたら木崎店長は今後独立を考えているのではないか、というような言い方はしたがな」

それでも十分すぎる気はするが、共通の知人に関する世間話の範疇を抜け出ていないことは確かだ。

「そら、できたぞ」

丁度そのとき、真奥のオーダーしたチキンが包まれてレジに届けられ、鶴江は丁寧に入れたそれを真奥に手渡す。

「いずれにせよ田中マネージャーはもうしばらくは顔を見せん。お前があれこれ心配するようなことは無い。それよりも僕は、今も自宅で仕事のことを思い憂いでいるであろう木崎店長を

思うと……ああああ！」

これ以上話を續けていると、猪江の暴走でセンタッキーの従業員達に迷惑がかかることを確信した真奥は、

「邪魔したな」

一応は色々な情報を聞けたので、早々に退散することにした。

「ど、どうでしたか？」

店に戻ると、千穂が近づいてきて尋ねてくるが、真奥は渋い顔で首を横に振る。

「収帳があったようで、無かったな」

真奥は千穂に、猪江から聞いた話をざっと説明する。

田中姫子が木崎のかなり古い知り合いであり、向こうが木崎に関心を寄せていること。

猪江が木崎の近況を田中姫子に伝えているらしいこと。

だが以上のどれもが、木崎があのような行動に出た理由を説明するには不十分な話だ。

「まあ、古い付き合いだからって仲がいいとは限らないしな、腐れ縁で大猿の仲ってやつなのかもな」

「腐れ縁で大猿の仲……ですか」

真奥のその分析は的を射ているようにも思えたが、千穂はそのフレーズに全く違う二人を想像してしまった。

「ん？　ちーちゃん、なんで笑ってんの？」

「いえ、身道にも、そんな人達がいたな——って思っ

て」

「なんでもないですよ。それで、その田中マネージャーは……」

「ああ、サリエルのバカが言うには、まあもう顔を見せることはないだろうって」

「そ、そうですか」

千穂はあからさまにホッとしたような顔で胸をなで下ろす。

「本崎さんが戻ってきてからまたあの人が来たら、私もう生きた心地がしませんもん」

「あのときの本崎さんと真っ向から流れ合えるってだけで、もう俺あの田中ってマネージャーに勝てる気しねえもんなあ」

魔界の王の、偽らざる心からの言葉である。

だがその日の夕方、事件は起こったのだ。

※

「サリエルの野郎……」

「ん？　何か言った？」

「い、いえ、何も」

真奥は心の中で、大天使サリエルへの戦復を心に誓う。

昼間にもう現れないだろうと言われていたはずの田中姫子が、早速マダロナルドに来店したのだ。

千穂を始め、あの日の出来事を知っているクルーは皆、固唾を呑んで真奥と田中のやりとりを見守っている。

「えーつとね、照り焼きバーガーのセットをポテトとオレンジジュースで。あとは単品でハンバーガーね。ドリンクは定額でいいから、水抜きにして」

田中姫子は、先日の騒動のときとあまり変わらぬ格好でやってくる、慌ててレジから飛び出そうとする真奥を制して、普通の客としてレジで注文しはじめたのだ。

「かしこまりました。六五〇円頂戴致します」

「はい、細かくてごめんね」

ばらばらと小銭がトレイに置かれ、真奥はそれを目できつと数え、

「恐れ入りますお客様。こちら……」

百円玉が四枚、五十円玉が四枚、そして一瞬見失いそうになったが、五枚置かれた赤銅色の硬貨の中に一枚、妙な硬貨が混ざっているのを見て取り、それを丁寧に差し出す。

「あら、ごめんなさい」

田中姫子は全く驚びれることなく、その硬貨の代わりにもう一枚十円玉を出す。

「この前イギリスから帰ってきたとき、出し忘れちゃったのね」

2ペンス硬貨。色こそ使い古された十円玉に似ているが、大きさが全く違う。

だが細かい硬貨を一気に出されると、見逃してしまう可能性はある。

「……ご旅行ですか？」

「まあね」

真奥がそう尋ねると、田中姫子はごく自然に頷く。

そうこうしているうちに彼女の注文した品が出揃い、真奥はそれらをトレーに乗せて差し出す。

「お待たせいたしました。ごゆっくりお召し上がりください」

「はい、どうも」

そして田中姫子は、レジから見え辛い位置の裏側の席へと歩いていく。

その様子を真奥は目の端で見ていたがふと、

「まーくん、凄いわ」

後ろから木崎や他のタルーに「カワっち」と呼ばれている同僚タルー、川田武文が声をかけてくる。

「僕もちーちゃんもどどっちゃってたのに……………ん？」

川田は、客席から見えない位置にある真奥の右手が、川田に向かって掌てのひらを向けていることに気づく。

制止のサインだ。

川田が黙ったことを確認した真奥は、玉座自然な動作で川田に近寄り、すれ違いざまに早口で言う。

「お帰りになるまで、待ってくれ」

それだけで川田は、まるで何事も無かったかのように自分の仕事に戻った。

真奥はその後、千穂にも同じように言い含め、自分もまた普段通りに仕事をこなした。

それからたつぷり一時間ほどして、田中亜子が席を立ち、トレーのごみを処理してから真奥に向かつて小さく手を振り、店を出ていった。

その姿が店内から見えなくなっても、真奥はしばらく緊張を解けなかった。

真奥がようやく息をついたのは、田中亜子がいなくなってからさらに三十分経った後である。

「真奥さん、さっきのなんだったんですか？」

真奥の緊張が解けたことを察した千穂と川田が、さっと寄ってきた。

「多分だけど、試された」

「え？」

「どういうこと？」

「オーダーが、プラテンのコンディションに出来上がりが左右されやすく、しかも組立てが面倒な照り焼きバーガーだった」

プラテンとは、バーガーのミートパティを焼くために使うタラムシェルドグルの呼称である。照り焼きバーガーはミートパティを焼く際に特別なソースをかける必要があり、他のバーガーと連続して作ることが難しい。

プラテンのコンディションが悪いとミートパティだけでなくソースの風味まで損ねてしまい、バーガー全体の完成度が落ちやすい。

その上照り焼きバーガーは組立ての際にミートパティのソースやマヨネーズなどの落とし所がずれると、包んだ際にパンズや紙を汚してしまいお客様が食べにくくなるため、バーガーの中でも特に作るのに気を遣う商品だった。

そこに田中彪子<sup>（たなか ひょうこ）</sup>は、一つのプラテンでは連続して作ることでできない看板商品の普通のハンバーガーを後から注文してきた。

マッドカフェ導入時の改装で、プラテンの数が増えたため今では照り焼きとそれ以外のバーガーの調理も並走・連続させられるが、そのことで設備の負担を推測されたかもしれない。

「それに、ドリンクがオレングジュースだったのも気になる。座った場所があの席なのもな」マドロナルドのドリンクは、コーヒート紅茶以外の飲料は専用のドリンクサーバーから出されている。

このサーバーは原液シロップと水、或いは炭酸水を混ぜて出す仕組みになっているのだが、炭酸飲料の原液と、オレンジジュースとウーロン茶の原液は扱い方が大きく異なる。

「機械のメンテナンス状況を見ようとしたってことですか？」

「ああ、ご丁寧に水抜きだったしな」

炭酸飲料の原液と炭酸水はサーバー外の専用タンクから流れてくるが、オレンジジュースとウーロン茶の原液はタンク内に別途専用の原液袋を設置する。しかもオレンジジュースの原液は果糖を多く含んでおり、炭酸飲料に比べてやや出数が少ないことも相まって、メンテナンスを怠ると他の飲料よりも管の中や出水口に凝固した成分が付着しやすくなってしまふのだ。

「わざわざ店の一番奥の席に行ったのは、店内のタリンスを見られてたんじゃねえかなと思ってる。まあ……確証は無いんだが」

真央は難しい顔で続ける。

「壁江店長に聞いたんだが、あの田中ってマネージャーと木崎さんは、古い付き合いらしいんだ。二人の間に何があったかは知らないけど、俺達は木崎さんの店のタバーだ。そうなれば、少しの隙も見えられねえと思ってるさ」

「バーガー作ったのカワっちさんだったから、問題は無いですよね」

「それだけは僕、誰にも負けないと思ってる」

「フロアの掃除はランチの後に私が隅々までやったので、問題ないはずですよ」



川田と千穂は自信たっぷりに胸を叩き、真奥もその辺りは信用していたので大きく頷く。

「そうだな。ドリントサーバーも昨日俺が点検した。俺達がやってる以上、この店に問題なんか起こるはずが無い」

真奥はそう言いつつ、田中亜子が一体何を考えているのか不安を拭えない。

とはいえ木崎にしる田中亜子にしる、社会人として年齢的にはまだまだ若い。

現場同士で角突き合わせる機会が多く、現在は向こうが一歩リードしているだけ、という話でしかない気もする。

「ま、なんにしろだ」

真奥は壁に掛けられているシフト表を眺めて言った。

「木崎さんが戻ってくるまで、頑張って店を守らなきゃな」

その夜、営業終了時間まで三十分を切った頃。

真奥はエリアマネージャー（もちろんマダロナルドの）に電話をして、閉店業務が滞りなく進んでいることを告げる。

普段はなかなか無いことだが、今日は真奥が店の鍵を閉め、翌朝はエリアマネージャーが閉店業務に入ることになっていた。

真奥は店内を見回り、閉店に必要な作業が概ね整っていることを確認する。

夜の十一時半。

土地柄夜の十二時近くになってもお客が来ることは珍しくないが、この日はそういうことも無く、店内から徐々にお客の数が減り、このまま問題なく閉店になるかと思われたそのときだった。

自動ドアが開く音がして、真奥は声を上げる。

「いらっしゃいませー……って」

閉店間際こそ明るくお客を出迎えるべし、と意気込む真奥の視線の先にいたのは、田中穂子とは全く違った意味で意外な訪問者だった。

「あれ？」

真奥は訪問者の顔を見て思わず声を上げる。

「久しぶり。頑張ってるみたいね」

背は真奥と同じくらい。清潔感のあるボブカットの、落ち着いた物腰の女性である。

柔らかない声とおっとりした顔立ちの印象からは想像できないほどきばきとした仕事ぶりを  
見せる彼女の私服姿を真奥は初めて目にした。

「もしかして……水島さんですか？」

「どうもー、遅くにごめんね」

穏やかな笑顔を浮かべて、その女性はレジの前にやってきました。

水島由郷は木崎の同期社員で、都内の遊園地内にあるマダロナルド富島園店の店長を務める女性である。

轄々谷駅前店のある渋谷西エリアとは店舗エリアが異なるのだが、木崎と水島の店はシフトに穴が空いた場合お互い人員を融通し合うことが多く、真実も何度が富島園店にヘルプに入ったことがある。

だが水島本人が轄々谷駅前店に現れるのは初めてのことだった。

「あの、すいません水島さん。実は木崎さんは今日……」

服装から察するに仕事帰り、という風情ではない。となれば水島が轄々谷駅前店にやってくる理由など、木崎を訪ねてきた以外に他に思い当たらない。

すると水島は、真実を洩して言った。

「知ってるよ。彼女、今自主謹慎中でしょ？」

「自主……まあその、一応社内的に正式な処分らしいですけど……」

「事情よね。そう思わない？ 上の人達も彼女を処分するつもりなんか無かったみたいなのに」「それは聞きました。でも木崎さんの気持ちも分かります。俺達の前でお客様を一方的に叩き出すようなことしちゃったんですから……」

木崎は、どんな客にも平等に接することを是とし、従業員達にもその精神を徹底させている。

なのに自分が原則を破ってしまったのだから、水崎にしてみれば穴を自分で掘ってその中に埋まってしまうくらい気持ちだろう。

真真がそう思っていると、なぜか水崎は、妙に含みのある笑みを浮かべて、カウンターにもたれかかってくる。

「ところでさあ」

「はい？」

「真真君、仕事上がったら、時間ある？」

「……はい？」

らしくもない顔で声で囁かれ、真真は目を白黒させる。

「お姉さんと晩ご飯、一緒にどお？」

「はあ？」

「あ、あの、一体どこに……」

「いいからいいから。とにかくついてきて」

店の裏手の駐輪スペースで真真は不安げな声で水崎に尋ねるが、水崎は取り合わずさっさと先に立って歩きはじめてしまう。

仕方なく真奥は自転車を押して後に続くが、水島（みづしま）の歩みはすぐに止まる。

「ここだよ」

「え？ あ、は、はい。え？」

真奥（まおく）が驚くのも無理はない。

水島（みづしま）が足を止めたのはチェーンの居酒屋が入居する雑居ビルの前だったが、轢（ひ）ケ谷（や）駅前店から五十メートルも歩かない場所にある、同じ商店街内の店だったのだ。

水島（みづしま）はさっさとビルの階段を上がってゆき、店のドアを開ける。

日曜の深夜とあって店内には空席が目立つが、水島（みづしま）は店員に何も告げず、店の中をさっさと奥に進んでしまう。

戸惑いながら後に続く真奥（まおく）だったが、

「お待たせー」

水島（みづしま）が足を止めた席にいた人物を見て、思わず飛び上がったしまった。

「さ、水嶋（みづしま）さん……!？」

四人掛けのテーブル席に仏（ぶつ）面（めん）で胸（むね）を隠（かく）んで座っていたのは、私服姿の水嶋（みづしま）だったのだ。

「やあ……まーくん、お疲れ様。仕事上がりには呼び出して悪かったな」

「私がさいちちゃんの代わりに最後まで閉店見てたけど、特に問題なさそうだったわよ」

「さ、さいちちゃん？」

水島が呼ぶのは、状況からして水崎の渾名であろう。

だが、魔土や大天使すら膝下にひれ伏させるあの水崎真弓を捉まえて「きいちゃん」とは、真奥は一体どう反応すれば良いのだろうか。

そんな真奥の動揺を敏感に感じ取ったらしい水崎は、よりむっすりとして水島に言う。

「人前でその呼び方はやめろ由姫。もう子供じゃないんだから」

「顔合わせるなりヒメとヒートアップしちゃった、昔となーんにも変わらないきいちゃんの言葉に説得力なんて無いわよねー、真奥君!」

「いけ えけ あ!? い、いや、その、あの!? む、言って、なんすか?」

虚実(うつろひ)に顔から水島が肩を組んできて、真奥は心臓が口から飛び出そうになるほど震いた。

水崎も水島も、一体どうしたというのだろうか。

仕事中とは、まるで様子が違う。

「おい由姫、まーくんが困っているだろう。離してやれ。……まあ、とにかく座ってくれまーくん」

「はい」

「はい、あの、し、失礼します」

最初から横側(よこがわ)に座っていた水崎の隣に水島が座り、真奥は通路側の椅子に水島と向かい合うように座る。

一体これから何が始まろうとしているのか、混乱する真奥の前に水島がメニュー表を差し出してくる。

「今日は私達のお祭りだから、心配しないでね。真奥君、お酒は飲めるの？」

法律的にも、実年齢的にも、日本での立場的にも、真奥が酒を飲むことはなんの問題も無い。だが長い間の節約生活から来る条件反射と水崎と水島の目の前であるという謎の状況が手伝って、

「いえ、その、明日も早いでウーロン茶で」

と答えていた。

「真面目？ 緊張？ 遠慮？」

真奥は、もう水島が店に来たときから酒が入っていたのではないかと疑いはじめていた。

「まーくんならどれも当てはまりそうだ」

「水崎さん」

さすがに抗議の声を上げるが、水崎はそれを受け流すと、唐突に真奥に向かって頭を下げるではないか。

「すまない。私の知慮で、迷惑をかけている」

「あ、い、いえ」

「きいちやん謹慎中だから、お酒は飲ませてないわ、そこは安心してね。どうする？ 仕事終

わった後だからお願（ねが）ひしてるでしょ。ご飯ものはもう結構頼んであるんだ」

「……水島さん、お酒入ってますか？」

「私は別に謹慎中じゃないからね」

「じゃあしやあと言つてのけた水島の前に出されたダラスの中身は、なんと芋焼酎（さつま酒）の水割りだ、それでね、真奥君を強引（きやうぎん）に呼び出したのは、もよっと耳話（みみわ）を聞いてもらいたかったからなの」

「音（おと）話（わ）う」

真奥（まおく）が首（くび）を傾（かたむ）けると、本崎（もとさき）がぼつりと言った。

「撒（さ）江（え）が連れてきたあの女は、田中（たなか）鯉（こ）子（こ）という」

「実は撒（さ）江（え）店長（てんぢやう）から少しだけ聞（き）きました。本崎（もとさき）さんと古い知り合いだって」

「そうよねー、古いわよねー」

焼酎（しやうじゆ）の水（みづ）をからりと喝（く）らして、水島（みづしま）が面白（おもしろ）そうに微笑（わいせう）んだ。

「だって、幼稚園（幼稚園）からの付き合いだものね」

「え」

水島（みづしま）の衝撃（しやうげき）の一言（いちごん）に、真奥（まおく）は息（いき）を吞（の）んだ。

「そこまで行けばもはや知り合いというより幼稚園（幼稚園）染（せん）みと言（い）うべきではなかろうか。」

「え、まさか、ひょっととして水島（みづしま）さんもう」

そしてそのことを知っているということは、水島（みづしま）もまた本崎（もとさき）や田中（たなか）鯉（こ）子（こ）と相当（さうたう）に古い付き合い



いだということになる。

「ううん、私は小学校からよ。幼稚園は」緒だっただけとクラスが違ったから」

「微々たる差じゃないですか」

真実の突っ込みに、水島は静かに笑う。

「もうね、二人の仲の悪さって言ったら小学校の頃から伝説でね」

「はあ……」

「周りの友達に聞くと、幼稚園から何かと張り合う間柄だったらしくて」

大壁の仲は筋金入りだったというわけだ。

「そんなんで、どうして今でも付き合いがあるんですか」

「付き合いなど無い。私と奴が切れないのは全部由良のおせっかいのせいだ」

「あら、言うじゃない」

ムキになる水島をからかうように、水島は水崎の二の腕をつきはじめる。

「とにかくね、きいちゃんとヒメは、なんでそんなになって思うくらい競争意識が強かったのよ。」

小学校六年間と中学三年間、ずっとクラスが離れなかったのも原因の一つでしょうね」

「そ、それは凄いですね」

日本の学校に通ったことの無い真実でも、クラス替えというシステムくらいは知っている。

小中学校通して九年間同じクラスになるのは、奇跡に近い確率だと思われる。

「私が覚えてる限りだと、きいちゃんは絵とか習字がうまくて、毎年校内で何か貰らってたのよ。その度にヒメが顔真っ赤にして悔しがらんだけれど、ヒメってほら、今で言う『西伯』だったのよ」

「がはく？」

「奴は致命的に美術的センスが無かったのだ。字は下手だったし、絵子に犬と鳥と魚の絵を描かせても、私はどれがどれだか区別することができなかった」

「そ、それは、凄いですね……」

「一方私は美術の授業で作った作品が、何度も区のコントールに出品されていた」

本崎は少しだけ過去を得意げに話すが、その栄光の記憶を、水島は楽しげに切り崩す。

「でもねー、きいちゃんはスポーツでは負けっぱなしだったわよね」

「え？」

「くっ……」

今の本崎と田中穂子の体格差を見ると儼然には信じ難いが、本崎の反応を見るとどうも本意のことらしい。

「きいちゃんも別に運動音痴とかじゃないんだけど、ヒメは運動が凄く得意でマラソン大会とかスポーツテストの成績とか、いつもトップだったのよ。それできいちゃんはマラソン大会で負ける度にぼろぼろ涙流して悔しがって、来年こそは来年こそはって」

「本気で悔しかったんだ！ 私の方が体も大きいし力も強かったのに！ でも、私も負けっぱなしというわけではなかったんだぞまーくん！ 中二の持久走大会で奴に勝ったんだ！」

「は、はあ……」

子供の頃のこととはいえ、木崎が泣いて悔しかる様はなかなか想像できないし、店の売上以外のことで誰かと感情剥き出しで張り合う木崎にどう反応しているのかまるで分からない真奥は、ぼんやりした返事しかできない。

「あのときのヒメ、風邪ひいて熱出してたじゃない。素直はイヤだ。きいちゃんとの勝負から逃げたくないと言って無理やり出席して、あのあと一週間寝込んでたの覚えてない？」

「コンディションを整えるのも勝負の内だ！」

「……」

真奥が言葉を失ってしまったのは、話の内容のせいではない。

仕事を離れた木崎と木崎の、意外すぎる素顔に対してだった。

真奥の困惑に気づいたのか、木崎が吸払いをして真奥に言う。

「私だって別に仕事に魂を売り渡したわけではない。友人と一緒にいれば、人並みにバカ話もするし、感情を表に出すこともある」

「で、ですよね」

それはそうなのだが、日頃の超然とした木崎とのギャップの激しさには、戸惑いを覚えずに

はいられない。

「で、でも、なんでそんなに仲が悪くなったんですか……」 幼稚園の頃からなんて」

「私自身に記憶は無いのだが、親が言うには」

「仲が悪いの親公説ですが」

真実は曖昧としてしまう。

「幼稚園時代に、女子に人気のあった男の先生がいたんだ。その先生をどちらがおままごとの誘うかで対立が始まったらしい」

「そんなことで？」

話だけ聞くといかにも幼児らしいほのぼのとした曖昧だが、そんな小さな火種を発端にここまで長きに渡る親指の争いに発展することなどあるのだろうか。

「で、その、水島さんはどういう……」

「私はきいちゃんとしメの緩衝剤よ。きいちゃんがしメに負けて泣いてるときはきいちゃんを慰めて、しメがきいちゃんに負けて悔しがつてるときはストレス解消に付き合ったりね」

なんでそんな大変そうで損が返りや、と喉の奥まで出かかった真実は憶えて言葉を吞み込む。だが表情は隠せなかったようだ。

「本人達とはとかく一緒にいると過剰じゃなかったし、故っておくと迷惑だけど、うまく誘導するとクラスの色々なことがうまく行ったのよ。私もよく学級委員とかやっててね」

「へ、へ……」

略に木島は、木崎と田中総子の裏で糸を引く役割を担っていたと言ったのだ。

確々気づいてはいたが、やはり木島も一筋縄ではないかない人物のようだ。

「テストの点数とかは、二人共なんだかんだで努力家だったし、ずっと学年上位だったわね。

定期テストの度に成績上位二十人の名前が貼り出されるんだけど、私その度に胃が痛かったわ。さいちちゃんとヒメ、どっちが勝ってもモメるんだもの」

「勉強のことを由緒に言われても興味にしか聞こえん。私も総子も、卒業まで一度も由緒には勝てなかったのに」

「二人と付き合つてくならそれくらいは頑張らないとね」

木崎の決意にも、木島は涼しい顔だ。

「でもなんだかんだで私達三人、いい友達だったと思うわよ？ 仲良しこよしって感じじゃなかったけど、女の子にありがちな、連れ立ってトイレに行くような付き合いでもなかったし」「悪い冗談だな。私とあいつが友人であったことなど一度も無い。ただ由緒が言うからなんとなく一緒にいただけだ」

ここまで言い張る木崎と田中亜子をたった一人で纏めていた木島は、やはり恐ろしい人物なのだと、真実はこの一言で再確認した。

三人は中学を卒業後、それぞれ別の高校に進学した。

遂に長年の争いに終止符が打たれるのかも思いきや、そこからさらに三年後、なんと二人は同じ大学内で再会することになる。

「腐れ縁ってレベルじゃないですよね、もう」

真実は段々場の空気に慣れて語に相槌を打てるようになってきていた。

「三人とも実家が近いしね。で、大学生になったら少しは大人になって歩み寄るかと思うでしょ？ でも、ダメだったよねえ」

明恵大学経営学部に入學した木崎と姫子は、子供の頃とは全く違った次元で争いを始めるようになる。

「私達の大学生の頃は、もう就職氷河期なんて言うのもバカバカしいほど就職率が落ちてた頃で、三人共それが分かってたからかなりきちんと勉強してたの。でも、そこでまたね」

「私は今でも、姫子の教育マネジメント論のレポートに優をつけた教授の正気を疑っている。

従業員の個性から来る不確定要素を考慮せずシステムチックに教育を論じてなんの意味がある」

「……こういう次元で争いはじめちゃったのよ」

「なるほど」

もう苦笑するしかない。

この頃になると木崎と姫子は物事の結果だけでなく経過や議論で戦うようになっており、混迷の度合いは益々深まっていった。

「致命的だったのはあれかしらねえ。ミスコン」

「ミスコンって……あの、たまにテレビとかでやってるやつですか？」

「うちの大学って文化祭の規模が小さくて、そのミスコンもねままごくレベルだったから、優勝したってタレントさんみたいに持てはやされたりはしなかったけどね。たまたまその年にミスコンが開催されてね。ゼミの友達に三人揃ってエントリーさせられたのよ」

「あ……」

このとき、真央は本崎と姫子の会話を思い出した。

「はお、貴様があんな下らんイベントを心に留めていたとは意外だったなあ」

「あんだと違って人の褒め言葉を素直に受け取れないほど控（こど）くれてないし、学生時代のいい思い出の一つよ」

「もしかしして、そのミスコンで田中マナージャーが……」

「あんな浮ついたイベントで勝ったからそれがなんだと言うんだ！」

本崎の至極分かりやすい反応で、真央は全てを察した。規模はさておき、女性に美しさを競う場で本崎は姫子の後塵を拝したのだ。

どうやら本崎は本人が口に出している以上にその敗北が心の傷として残っているようだが、それを近國に慰めたりすればその先に待っているのは無闇地獄である。

「大体あいつも卑（ひ）ミス知（し）りで天狗（てんぐ）になってみっともない！ トップにならなければ二位も三位

も変わらんたろうー」

本崎はウーロン茶をヤケ酒のようにあおりながら、空になったグラスをどかんとテーブルに叩きつける。

つまり、麗子が二位で、本崎は三位だったのだろう、きつと。

「ちなみにダランブリは私だったのよ」

「お願いですから今の俺に余計な情報与えないでください」

本崎が一位というそのオチもまた予想できていたが、上司達の複雑な人間関係の過去を聞かされているだけでもお腹一杯なのに、これ以上突っ込みどころを見せられても対応のしようが無い。

「まあとにかく、きいちちゃんとヒメがどんなだったかは、十分分かってもらえたと思うけど」

「ええ、もう十分すぎるくらいに」

大学の三年生頃から、能力の優秀や持論の正当性だけでなく、就職や将来のビジョンを逸つて本崎と麗子の対立がより際立つようになってきた。

その様子と同級生達は、「ヒメとキサキの嫁姑争い」と冗談半分にからかっていたらしい。

「就職一つ取ってもきいちちゃんは機頭後尾端口<sup>マシナヒノコ</sup>となると牛後<sup>ウシゴ</sup>となるなかれ。ヒメは牛の背中に隠れてゴールで先頭になればいいじゃない、って感じだね」

学生時代はそれでも本崎がとりなして二人の仲は保たれていたが、就職してから二人の道は



決定的に分かたれる。

マダロナルドとセンタッキーという二つの似て非なる大企業に就職した二人の行動方針は、全く対極にあった。

木崎は一人一人の従業員を大事にするあまり周囲と衝突することもなく、異例の実績と人望の割に出世は遅いのではないという評判が根強い。

一方の姫子は、従業員受けする性格ではないが、担当店舗での活動をソツなくこなし、ほどの実績を上げて出世の道を歩んでいる。

当然木崎と姫子がお互いそんなことを教え合うはずも無い。

全て、水島を介して情報が伝わるのである。

木崎と水島が会えば、その話を水島が姫子に同題ない範囲でやんわり伝える。

姫子と水島が会えば、その話を木崎に世間話程度に抑えてそれとなく話す。

それはずっと幼い頃から培われた、不思議な三角関係とも言えた。

「だから木崎さんが、センタッキーの人事の話を知ってたんですね」

恐らく姫子が水島に自分の配置転換のことを話し、そこから木崎に伝わったのだろう。

いずれにせよ真実は、木崎と姫子の確執と、木崎の行動の理由は十二分に理解できた。

「結局、今もその関係が変わらないというだけのことではあるのだが、積もり積もったものものだけに、久しぶりに姫子の顔を見た途端に顔に血が上ってしまってそれで……君達には、

本当に迷惑をかけた。申し訳ない」

本崎は改めて真奥に向かって深く頭を下げる。

「いえ、そんな……でも、なんで俺にそんな話を？ 俺達も本崎さんがなんの理由もなくあんなことするとは思ってませんし、言いくい顔の話をなんじや……」

「正直私だって、由縁がここまであけすけに話すとは思ってなかった。最初は本当に、一番迷惑をかけているまーくんに事情を話して謝りたかっただけなんだ。ちーちゃんや他の皆にも、後でちゃんと謝罪してはじめをつけるつもりだった」

「きいちゃんだって止めなかったじゃない」

水だけが残ったグラスをまた鳴らしながら、水島は額に手を当てる。

「でもそうね。確かにちーっと話しすぎたかな。でも真奥君に話してもいいかなって思った理由はちゃんとあるんだよ」

水島は複雑そうに微笑ひと、薄く開いた目で真奥を見る。

「きいちゃんにしては珍しく、真奥君を本当に信頼してるみたいだったからね」

「信頼、ですか？」

真奥に言わせれば本崎に信頼されてないクルーなどいないという認識だが、水島が言いたいのはそのうちのことではないらしい。

「きいちゃんの手を知ってるの、今まで私とヒメだけだったから。それを君に話したって聞い

て、私本當にびっくりしたんだよ」

本崎の夢。それは飲食サービスのエキスパート、パールマンになること。

自分一人の力がどれだけ日本の飲食業界に通じるか試してみたい。

かつて本崎は、真奥や千鶴の前でそう語った。

「……別にまーくん一人が特別というわけではない。偶然訪す機会があっただけだ」

そう弁明する本崎だが、やや歯切れが悪く聞こえるのは否めない。

本崎は真意を隠している。

水島もそう感じたようだ。

「そうかしら」

探るような目つきで本崎の顔を覗き込んだ水島は、おもむろに顔を上げる。

「今まできいちゃんか、私達以外の人にあの話したなんて聞いたことないもん。ねーヒ

メー」

「え、!?」

真奥と本崎の口から驚愕の聲が同時に漏れた。

「……そうね、確かに初耳だわ」

バーサーションで仕切られた真奥の後ろの席から、おもむろに一人の女性が立ち上がった。

確認するまでもない。昼間店にやってきた恰好そのままの田中麻子その人だった。

「由緒……誰ったな？」

水崎から敵意の炎が燃え上がる。

「まーくんに詫言ふなどと殊勝なことを言つて、姫子に今の話を聞かせたのか？」

「そうでもないよ、あなた達絶対に会おうとしないじゃない？」

「そりゃあね、真弓と遙に向かいでお酒飲んだって美味しくもなんともないし」

そう言いながら姫子は、当然のように真奥の隣の空いている椅子に腰かける。

「私は芋焼酎なんておっさんくさいの飲まないわよ。カルーアミルタね」

「ふん、相変わらず甘い酒か。お子様味覚め」

「ビール一杯で真つ赤になる真弓に言われちゃおしまいね」

「顔が赤くなるだけだ！ その程度で酔ったりはしない！」

「二人共そこまで。ほら真奥君がドン引きしてるわよ。ご飯も来だし、食べよ食べよ」

「あ……す、すまない」

「ふん」

水崎と姫子は、はつとなつて真奥の顔を見ると、乗り出しかけていた身をゆつくりと引く。

その間に出てきた、如何にも居酒屋然とした味が濃くカロリーの高そうな鉄板焼きやらチヤ

ーハンやらを、水崎は手際よく取り分けてゆく。

「夕方、お店に寄らせてもらったわ」

「なんだと？」

出てきたカルーアミルタをちびちびと飲みながら、ふと姫子がそんなことを言う。

「大したものね。私の担当エリアにあんなによくできた店舗、一つも無いわ。従業員はみんなきびきびしてて、無駄な私語は無いのにコミニュケーションはばっちり。出される商品のパフォーマンスも上等。店は決一つ落ちてない」

「姫子に褒められても嬉しくもなんともないが、私のタルー達だ。当然それくらいことはやってのける」

「私のタルー達、ね」

だが褒めたと思いきや、姫子は一転、木崎の言葉を鼻で笑う。

「真弓、あんたそうやっていつまでマダロナルドの現場で安い自己満足に浸ってる気？」  
皮肉げな笑みを浮かべて、姫子は続ける。

「あんたがマダロナルドなんて大きな会社に就職したときから褒められて思ってたのよ。あんな大企業からパール向けに盛める技術や思想なんて、逆に少ないと思うわ。どうしてきつさと独立しようとししないの」

「なんだと？」

「あなたが今やりたいことって、パールだけじゃないんじやない？ パールやりたいならきつさと退職して空き店舗借りて自分の店開きゃいいのよ。あんただったら多少頑張れば成功する

わよ。なんですぐさうしないわけ？ お金や保証人のアテだって無いわけじゃないんでしょ？ 大企業の本端店舗の狭い社会でお山の大将気取ってて、今のあんたになんの得があるの。それで例角裏繰上げでも、出世が私より遅いんじゃないやあってる意味ないじゃない」

「姫子、貴様マドロナルドの仕事を手放ししてるのか」

本崎の声に陰がこもるが、

「違うわよ。自分の器を出世に生かさず、小さな店に閉じ込めてぐずぐずしてるあんたを手放ししてるの」

姫子は苛立（いらだち）たしげにダラスを繕（つくろ）うす。

「出世してエリアの一つや二つ、大蛇（おび）ふるって改革してみせるならともかく、一つの店舗にいつまでもこたわって留（とど）まるほど、今のあんたの仕事って情熱傾ける価値があるの？ それとも路線変更するようなきっかけでもあったわけ？」

「……」

姫子の畳み掛けに、本崎は押し黙（もく）る。

それはとりもなおさず、姫子の言葉を少なからず本崎が認めているということだ。

「二兎を追う者は、よ。大きな会社にいる以上、どう足掻（あが）いたってその瞬間瞬間で捨てなきゃいけないものがあることが分からないほどあんたもガキじゃないでしょ」

「それは……」

「はら、何考えてるの。言ってこらんなさいよ」

一瞬流されようになつた木崎だが、すぐに姫子を見つめる。

「私が何をしようと、私の勝手だ。お前に言う必要はあるまい」

またぞろ暗闇になるかと恐れをなした真央だが、姫子は意外にも笑顔を見せた。

「結構。別にあなたの進路なんが聞きたいとも思わないわよ。あんたがだたらと今の店で仲良しごっこに興じてるんであればそれもいいんじゃない？ 私はさっさと出世して、業界の上からあんたのこと鼻で笑つてやるわ」

「相変わらず共に働く仲間を尊重しない奴め」

「尊重するに値しない連中の方がずっと多いからね。それなら最初からみんなフラットに扱うべきよ。それも日本企業が長い間培つてきた一つの正義だわ」

姫子は真央を見る。

「ま、このボヤつとしたのが尊重するに足る相手かどうかは私は分からないけど、いつか私の鼻を明かすつもりなら、今のままだやどうにもならないことだけははっきり宣言しとくわよ」

「ボヤつとしたって……」

突然深られて真央はムッとするが、会社が固に挟まっているので真央も強く出られない。

同業他社とはいえ、社会的立場も姫子の方がずっと上なのだ。

そんな様子を見て姫子はまた笑う。

「こういう場面て、食って掛かるか引つ込む以外の立ち回りができると、これから得よ」

「……はあ」

「覚えておきなさい。組織っていうのは、内も外も敵だらけなのよ。わずかな隙も逃さずあなたの足元を拘くおうとする同業他社。あなたの足を引つ張る意地悪で無義な上司、同僚、部下。そんなのは世の中に掃いて捨てるほどいるわ。そういう連中と渡り合う術は、内外の和をあつという間に作っちゃう真弓の下にいたんじや絶対に身に着かない」

真央は複界の端で、木崎の方を一瞬だけ見る。

だが、姫子と顔を合わせただけで臨界点に達した木崎が、今この言葉を聞いて真剣な顔で黙り込んでいる。

「ずっと一兵卒のままにいるなら真弓の下は居心地がいいだろうけど、上を目指そうと思ってるなら、今のあんたはとでも不幸だと言わざるを得ないわ。敵と戦う経験が積めないんだもの」  
「でも、きいちゃんの下で働いていれば、普通の所よりいい仲間と一緒に働けるから、それで高まる力もあると思うわよ？」

「見解の相違ね。私は敵だらけの職場で働つきながら見つけた仲間こそ、本当にお互いを高め合える仲間だと思ってるわ」

姫子の言うことは正しい。そして木崎の言うことも正しい。もちろん真央が今まで正しいと信じてきた木崎のやりかたも正しい。



だが、それらは並び立ちそうで並び立たない。

「なら……」

真央はあまり悩まずに、その一言を口にした。

「今あるものの中でできないことがあるなら、一から自分で大きなものを作り上げてできるようにしちやえばいいんじゃないですか？」

「……」

「おー」

「ふん」

本崎はハッとして顔を上げ、水島は感心したように手を合わせ、姫子は鼻で笑うがそれでもそれほどバカにした様子ではない。

「真弓の夢じゃあるまいし、起業でもする気？ 不安や不平や不満はっか並び立てて人並みのこともできない連中よりはそういう無鉄砲な奴の方が好きだけど、口では簡単に言えても、実際にやるのは簡単なことじゃないわよ」

「分かってますよ。金や学や人なんかも、あるに越したことはありませんけど、今の俺にあるのは口と体だけですから」

真央がそう言うとき、姫子はきょとんとして目を圓かせ、そしてなぜか大きく頷いた。

「……成程ね、真弓」

「……なんだ」

「あんたがこいつを買ってる理由、なんとなく分かったわ」

「ねー？ 結構イケてるでしょ」

姫子の言になぜか水島も乗ってきて、

「へ？ へ？」

真奥は困惑して二人の顔を交互に見る。

「……まーくん」

その真奥の困惑に、水島の声が割って入った。

「は、はい」

「時間は大丈夫か？ そろそろ帰らないと、ご友人が心配するだろう」

「え？ あー、もう、もう一時半だ」

真奥は時計を見て飛び上がる。そういえば帰りが遅くなる連絡も入れていなかった。

「なんだ、もう帰るの？ 折角面白くなってきたのに」

「あー真奥君、私達だけじゃこんなに食べられないから、少し頑張って食べてもらっていい？」

「あ、は、はい、じゃあ」

言われるがままに真奥は、盛られたフードメニューを手早く片付けてゆく。

「彼女と同様（どうどう）でもしてるの？ 若いのに生意気」

「姫子、まーくんはルームシェアをしてるんだ。同居しているのは男性の友人だ」

「何？　そういう趣味？」

「えー？　真奥君そういうのだったの？」

「そういうのってどういうのか聞かない方がいいと思うから聞きませんけど、違いますからね」  
 酒が入っている木崎や姫子に何を言ってもからかわれ恫される未来しか見えないので、真奥はその後ひたすら食に専念したのだった。

店の前で木崎と姫子は、木崎と真奥と別れた。

「あるに越したことはない、か」

「ヒメ？」

「金も学も人も、あるに越したことはない。でも、絶対不可欠でもない。そのことが分かっている奴は強いよ。ただ強いから色々やらかす分、失敗したり白熱したりしたときは周りも被害甚大だけだね」

「そうねー。でも」

木崎はもう見えなくなった真奥と木崎の姿を追って、微笑んだ。

「一人だと危なっかしいけど、二人だと強い気がするなあ」

「何、どういう意味？」

「んー」

姫子のいぶかしげな問いに、水島は小さく微笑んだ。

「あのきいちゃんだよ？ そのままの意味に決まってるでしょ」

## ※

「すまなかったな。由緒のせいで結局また君を棄り回してしまった」

居酒屋からの帰路、甲州街道を歩きながら水崎は真奥に再び詫言ひる。

「いえ、大丈夫ですよ。業界の先輩の懇親会に混せてもらったと思えば」

「業界の先輩の懇親会か。そうだな、思えば三人で会うのは大学卒業以来だった」

水崎は少し背を懐かしむようにため息をついた。

「水崎さん？」

「……まーくん。妙な誤解なしに聞いてくれ。酒席の末の戯言だ」

二人共アルコールを口にしてはいないが、真奥は真剣に頷いた。

「会社で仕事をしていくなら、姫子の方が圧倒的に正しい。だがそれでも今の私は、理想から逃れられない。君のような人間が現れたからだ」

「……え？」

「君が現れなければ、<sup>アリス</sup>アリスの言う通り、私はもっと早く自分の店を持つべく具体的に動き出していたかもしれない。だが一年前、君が現れて私の店で働き出して、私の考えに変化が起こった」

「あ、あの？」

「君は言ったな、正社員になりたいと。その気持ちも、今も変わらないか？」

「それは……そうですね」

真奥を取り巻く環境は、一年前とは大きく変わっている。

魔界に帰還できる目途も立ちかけ、トラブルも絶えない。

だがそれでも真奥の中に確固としてあるのは、もっと人間の社会を学びたいという想い。

「変わりません。俺の目的のためには、やはり正社員は避けては通れません」

「うん。君の仕事に対する真摯な取り組みと哲学も、疑ったことは無い。仕事とプライベートが、これほど綺麗に混ざり合った者はそういない。だから迷った。私は君を……」

「へ？」

ともすれば男女の告白にすら聞こえない文句に真奥は驚くが、本時の言葉は想像の上を行く。

「腹心の部下としてマダロナルドの頂点に連れてゆき業界を変えるか、己の片腕として新しい世界に連れてゆくか、真剣に悩んでいる」

「……………は？」

「世界を変えたり、作ったりするには力も、何より心から信頼できる仲間が必要だ」

それは木崎に言われるまでもなく、真奥自身が一番よく分かっている。

真奥自身、魔界を統一するべく最初に一歩を踏み出したとき、あの天使に授けられた知恵以外は何も無かったのだから。

「そして今の私の店のクルーの中で、これから最も長く仕事を共にできそうな未来の余白がある者は君しかない」

そこまで一気に言ってから木崎は言葉を切る。

「……………ま、さっきも言った通り酒の上での戯言だ。私の事に付き合う義務は君には無いし、君の未来を縛るつもりも無い。将来有望な若者に唾をつけておきたい、浅泳経営者予備軍の絡み酒だ。今は忘れてくれ」

真奥は呆然と、私服の、仕事を離れず、仕事に生きる女の背を見る。

「だが」

木崎はいつもと変わらぬさっぱりとした顔で真奥を振り向きにんまり笑った。

「私は、笑えない冗談は言わない主義だ。分かっているな。では、私はここで、もうしばらくの間、店を頼む」

二人の帰り道が分かれる交差点で、木崎は真奥に手を振り廻廊と夜の街を去っていった。



「居酒屋、と仰いましたか、魔王様」

「あ、酒屋？ お前また空想無視して変なワードに引かかってねえ？」

「一体いくら使ったのですか。お帰りが遅いと思つたら、またそんな無駄遣いを……」

真奥は低い声で圧倒してくる腹心の部下から逃げるように壁際に退避する。

「い、いや、おこりー！ おこりだったから俺は金出してないし、それに飲んだって言つても飲み会って意味で俺は酒飲んでな……」

「我が女神のおこり……しかも差し向かいで酒だとおおおや 殺す！ 今日こそ殺す!!」

すると今度は真奥を詰問するサリエルが胸倉に掴みかかってきて、真奥はそれをも暴に引きはがした。

「差し向かいじゃねえよ！ お前んとこのマネージャーと、喜島園の店長と四人で……」

「喜島園の店長って美人だつて評判のあの……と、真奥さんが、美女三人のおこりで、夜にお酒……ふうっ」

言い訳を続けていると今度は千穂はフタリと倒れそうになり、

「ち、千穂ちゃんしつかり！」

恵美が慌てて横から千穂を支える。

「田中マネージャーと我が女神と、さらに女性がいただと？ 魔王貴様!! 一体どんな邪惡な手を使ってそんな素晴らしいマネを！ 教えろ！ 何をすればそんな事態が起こり得るんだ！」





「食事時だを静かにせんか!!」

鈴乃が発した怒りの声に、

「すずねーちやこわいいいいい!!」

驚いたアラス・ラムスが泣きはじめてしまい、

「……………うるさい」

騒音地獄から離れた場所にいる練原だけが、一人静々と食事を進めるのだった。



数日前の出来事だ - a few days ago -



十五時を少し過ぎた頃、アラス・ラムスはベッドの上で穏やかな寝息を立てはじめた。書院は「まま」である遊佐恵美しかないアーバンハイツ五〇一号室に、今日は二人、客がいるのだ。

慣れない人と接したことで、疲れてしまったのだろう。

そんな恵美の様子を、ベッドから少し離れた所で羨ましそうに見ている人物がいた。

「いいな、私も寝かしつけたいですー」

「アラス・ラムスがエメに馴染むには、もう少しかかるでしょうね」

「ううー」

恵美の親友であり、客の一人であるエメラダ・エトクーグアは、悔しそうに歯噛みした。

「こう言っちゃあれだけど、母親ふりが堂に入ってるねえ」

こちらも恵美の親友である鈴木梨香はにやにや笑いながらそう言った。

「まあね、この子とももう長いですから」

恵美は敢えてそれを軽く受け流す。

「お、酔じゃないね」

梨香は少し酔いそうだ。

「にしても、まだ採用されるって決まったわけじゃないけど、恵美がああマダドでアルバイトかー。からかうつもりじゃないけど、アラス・ラムスちゃんを『ばば』と一緒に過ごさせてあ

げるの？」

「まさか。赤ん坊連れでアルバイトできないわよ。働いてる間は融合状態になるか、迷惑じゃなかったらベルに預かってもらいたいって思ってるんだけどね」

恵美は肩を練める。

「そこまでするならもう思い切って引っこ越しちゃえばいいような気がしますけどー」

「そこはこのマンションに思い出とやらがあるわけでしょ。なんとなくその気持ちは分かるし、この部屋のタオリティでその家賃だって考えとね。まあ私はそもそもどうやってこの物件を見つけて住むことになったのかも気になるけど」

アーバンハイツ水稲町五〇一号室は单身者向けの賃貸だが、八畳二回の洋室にオール電化キッチン付きで風呂トイレが別。

恵美とエメラダの初敵である魔王サタンこと真実真夫が、男三人で六畳一間に住んでいることを考えると、この環境は恵まれていと言わざるを得ない。

最上階にはベントハウスまであり、高級マンションと呼ぶにふさわしい佇まいだ。

それでいてこの部屋の家賃は五万円だと言うから一体どういうことなのか、製香ならずとも気になる事実だった。

「確かにこのマンションに住むことになった経緯はよく聞いたことありません」

製香とエメラダが興味を示すので、恵美はアラス・ラムスに肩まで毛布をかけてから二人に

向き直った。

「思いついて言っても、別に良い思ひ出があるわけじゃないのよ。ただ、この部屋が日本に來た私に初めて安らぎをくれた部屋なの。ついでに言うと、この部屋のおかげで、私は魔王を追ひ続けることができたの」

「それは住環境がいいから活力が湧く、つて語じやなく？」

「ううん、もっと直接的なきっかけがあつたの。私が日本にやっできてすぐ、見る物全てが未知で、右も左も分からなかつた頃のことよ」

恵美は、何年も前のことように思えるほんの少し昔を、静かに語りはじめた。

真奥真夫を、いや、魔王サタンを追つてゲートに飛び込み「異世界」の国である日本にやつてきた、ほんの少し昔のことを。

## ※

その高層建築物は、きながら巨大な墓碑のような佇まいをしていた。

光溢れる町の中、そこだけ黒が屹立している。

随所に灯るわずかな灯りが、余計に黒さを演出するが如く寂しげに轉れ、卑い金銀者が灯す燐燐のように頼りなく見えた。

「……あそこなら……誰にも見られずに……」

既に、精神と体力の限界だった。

こんなにも光溢れる世界で、彼女はただひたすら闇を、闇の目にもさらされぬ穴倉を求めていた。

「門は……やはり開かない」

黄色い灯りに照らされた正門は、当然のように錠前がかけられていて開くことはない。

だが、彼女はこの時点では確信を握っていた。

目の前にあるこの建物に、人間の気配は無い。

この数日、これまで見たことも無い巨大建築物を臨みるほど見てきた。

故国の帝城すら軽く凌駕する高さを誇り、全ての窓から眩い光を零し、それでいて無機質な外見の建物を決山見てきた。

そこには多くの人間の営みがあった。

彼女がかつて見たことも無い営みが。

だが目の前のこの建物は、見た目はこれまでの建築物と同じでも、明らかに人の気配が感じられなかった。

城塞が夜間、侵入者を警戒するために松明を灯すように、淡い光だけが規則正しく連なり、それでいて光の中を身回る人間の気配が感じられない。



たつぷり五分は、その場に立ち尽くしていただろうか。

「使わせてもらうわね」

彼女は誰に対してか分からない断りを入れると、ふわりと地面から体を浮かせた。

門を飛び越え、中庭らしき所に下り立つ。なんの気配も感じられない。

建物を囲むやや手入れの悪い生垣が丁度自分の目線よりも高くなっており、外を走る者に見とめられる心配も無さそうだ。

「魔場まばって感じてはないけど……」

近くに寄ってみると、やはりこの建物は彼女の知らない素材で建築されていた。

石や煉瓦れんがのようにも見えるが、触れた感触は彼女の知るそれらの感触とは決定的に異なる。

滑らかで、艶やかで、硬質で、それでいて軽そうだ。

「少し、上の方がいいかな」

彼女は夜空に溶ける上層階を見上げながら、再び体を浮かせ、建物の壁に沿ってゆっくりと上昇してゆく。

上昇する間、ふと振り返ると、視線の先にはどこまでもどこまでも、夜空の暗黒を返す光が広がっていた。

色とりどりの光が地面を覆い尽くし、まるで空の星が大地に落ちてきたかのような。

この光一つ一つの下に人間の営みがあるのだと理解したときの衝撃は、恐らく今後何があつ

でも忘れられないのではなからうかと思う。

「魔王サタン……どこに消えたの」

彼女は力の無い声で、小さく呟いた。

いるはずなのだ。自分が追ってきた存在が、この光の大地のどこかに。

こうしている間にも、目の前の光の大地に闇の穴が穿たれ、魔性の翼が天の夜空を大地に叩き落とす。ささとしてしまうかもしれない。

一刻も早くあの邪悪な存在を見つけ、今日の前に見える光の一片すら欠けさせないよう討滅しなければならぬのに。

「どこにも、いない。気配すら……」

そんなはずが無いのに。

どんなに傷ついていても、どんなに力を失っていても、あの邪悪な気配だけは間違えようが無いはずなのに、まるでこの光の霧に掻き消されてしまったかのように、彼女の追う存在は忽然と姿を消したのだ。

「……ここで、いいかしら」

彼女は、各階層に設えられ、窓毎に仕切られたテラスの一角に入っていった。

テラスに立って、極めて透明度が高いガラスで作られた窓から室内を覗いてみる。

中は床板が敷き詰められた部屋になっていて、やはり人の気配など微塵も感じられない。

テラスは上階の床面が天井になっており、雨もしのげようだ。

「はあ……」

自分の身が誰にも見られない空間に置かれた、という事実を認識した途端、どっと疲れが湧き起こり、彼女はそのままに座り込んでしまった。

真新しい魔城の、仕切られたテラス。

そんな平伏な空間にすらようやく安らぎを感じられるほどの疲労。

「あそこで、魔王を討てていたら……こんな」

彼女は悔しげにそう言つて、拳を強く握った。

すると彼女の意志に呼応するかのように、手の内に光が灯り、それまでそこに無かったものが姿を現した。

神々しい光を放つ、美しい意匠があしらわれた剣であった。

「……聖剣は……導きの光は、どうして魔王の居場所を教えてくれないの。戦いで、力を失ってしまったの？」

振り絞る声にも力が無い。

「それとも……魔王を討ち漏らした私を……勇者と認めてはくれないの？」

剣は何も答えない。

ただ、月も星も見えない夜の中、導きの大地に灯る光を、精元の紫色の宝石がかすかに映し

出すだけ。

「……エメ……」

彼女は、膝を抱えてうめいた。

「アル……オルバ……」

そして抱えた膝に顔を埋めて、抑える声を息に乗せて吐き出した。

「……助けて」

勇者エミリア・ユステイナがエンテ・イスラ全土の命運をかけた最終決戦に臨み、あと一歩のところまで魔王サタンを討ち漏らしてから、既に五日が過ぎていた。

エミリアは、ゲートで逃じする魔王と四天王アルシエルを追い、謎の超文明が発達したこの世界にやってきた。

あと一撃で倒せる手近よはあった。それでも尚、魔王の方は強大で決して油断はできなかった。

だからゲートを越えたこの世界で、本当の最終決戦が始まるものとエミリアは確信していたのだ。

ところがあれほど様々な気配が、この世界に来て微塵も感じられなくなってしまっていたのだ。

魔王とアルシエルが通ったゲートをそのまま通ってきたのだから、違う世界に飛ばされてし

まったわけではない。

間違ひなく魔王もアルシエルも、この世界のどこかにいる。

それなのに、エミリアの知る魔王サタンの気配は忽然と消えたのだ。

エミリアの焦りは深かった。

この異世界がどれほど広大なのかは想像もつかないが、魔王と自分の到着地点が大陸の端と端に分かれてしまった、ということもあり得なくはない。

その場合、再び魔王と接触するまでかなりの時間を要することになる。

そして中央大陸を一夜にして地獄に変えた魔王サタンならば、傷ついているとはいえ、それだけの時間でこの異世界の国家を一つ二つ消滅させることも容易いはずだ。

これ以上、魔王軍によって犠牲になる人を増やしてはならない。

エミリアは自分も戦いで傷つき力を失っていたが、それでも國志を燃やし、魔王の痕跡を探しはじめ、そして今日まで、なんの成果も出せずにいたのだった。

ろくに食えることも眠ることもできないままただただ時間だけが過ぎ、遂に探索を一度中断しようとしたのが昨日のこと。

だがこの光溢れる大地に、エミリアの安住の地など、どこにも無かったのである。

「もう……疲れた……」

この五日間で起こった出来事は、エミリアにとって青天の霹靂（いきなりおこるもの）としか言いようのない事象は

かりであつた。

はつきり言つて、二度と思ひ出したくもないことばかり起きた。

エミリアは、ガラス窓に顔（こゝろ）を撞（つ）き、背中をもたせかけ、

「はああ……あああらあらあら？」

そのガラス窓が横にスライドするのに合わせて、体が横倒しになつてしまつた。

「え？ あれ？ ええ？」

倒れた瞬間（しゆんくわん）消滅した剣を氣にした様子も無くエミリアは身を起こし、信じられないものを

見る目で自分がもたれた窓を見た。

聞いている。

まるでエミリアを運入（うんにゅう）れるかのように、窓が聞いたのだ。

中は空（くう）ならず無人、無音。

だが、誰もいないその空間に誘（さそ）ひ込まれるようにして、エミリアは氣づけば室内に転（ころ）がら

んでいた。

決して警戒（けいけい）は怠（おろそ）かでないつもりだが、どこまで冷静なのかは自分でも分からない。

たとえここが魔城（まじやう）だとしても自分が無断で侵入していいことにはならないし、床面（とこ）に埃（ほこ）

一つ落ちていないところを見ると定期的に人の出入りがあるのだろう。

それでも、孤独（こどく）と疲労（ひろう）でとうに精神力の限界を越えていたエミリアは、外気（がいき）と区切られた、

夢の目にもつかない空間の誘惑に抗えなかったのである。

自分が飛び込んだ夢を閉めると、そこは完全に無音の空間になった。

「ああ……」

エミリアは、硬い床板に身を投げ出し、大の字になった。

鐘を聞き捨てないだけの冷静さは保っていたが、それでもこの無機質で閉鎖された空間で、

エミリアは数日よりの解放感を味わっていた。

同時に、急激な眠気が襲ってくる。

当然だ。この数日、目を閉じて安眠できる場所に巡り会えなかったのである。

体も頭も、何もかもが限界だった。

目を閉じた瞬間、エミリアの意識は闇に落ちた。

夢を見ていた。

それは、故郷のスローン村の在りし日の夢だった。

「見たことが無い」はずなのに、それはエミリアが『勇者』として大団円教会に引き取られた

後の、村の様子だと分かった。

スローン村なら、まだ父がいるはずだ。夢の中のエミリアは、ふわふわする足を必死に動か

しながら村の中を駆け回った。

だが、村中のどこを探しても、父どころか人っ子一人いない。

夢の中で一日、二日と経しても、人がいる痕跡すら見つけることができなかった。

だがそんな村の様子は、ある一瞬で劇的に変化する。

背後で大爆発が起こって振り向くと、そこには見上げるほど巨大な悪魔が炎を背に立っていた。

手には、エミリアの知っている誰かの、命が失われた身体を持って。

エミリアはすぐさま聖剣を具現化させ斬りかかろうとするが、手の中に聖剣は現れず、それどころか目の前の悪魔はまるでエミリアなど見えていないかのように踵を返した。

待て、と叫びたいが、口がうまく回らない。

そうこうしているうちに、村のあちこちから火の手が上がり、誰もいなくなったはずの村中に爆鳴が響き渡る。

空を、翼を持つ悪魔達が飛び回っている。

家々を、異形の悪魔達が破壊して回っている。

止めなければならぬのに、止める力が自分にはあるはずなのに、聖剣が出ない、もがけどもがけど足が前に進まない、声すら出せない。

そのとき、エミリアの目の前に見覚えのある姿が舞い降りてきた。



悪魔にしては小さな体軀。だが魔力は凡白の悪魔とは比べ物にならない。

「ルシフェルっ!!」

魔王軍四天王、悪魔大元帥ルシフェルの醜態な笑みを見て、エミリアは反射的に護手や拳で殴りかかろうとする。

だが、エミリアの拳はルシフェルの顔面を捉えたはずなのに、幻に触れたかのようにすり抜けてしまったのだ。

いや、この場ではエミリアこそが幻なのかもしれない。

何故、どうして、戦うことができない。

悲劇を、止めなければならぬのに。

「きゃあああああっ!?」

その瞬間、耳をつんざく悲鳴が聞こえた。

村から、ルシフェルの背後から、空から、大地から、否……。

「んがっ!?」

妙に生々しい悲鳴に、エミリアは弾かれたように身を起こした。

目を開けたそこは悪魔に襲われているスローン村などではなく、なんだか見覚えの無い無機

質な四角い部屋だ。

炎や魔力ではなく、太陽の光が室内を照らし出し、身を起こして一秒でエミリアは、昨夜自分が謎の魔境に身を潜めたことを思い出し、そして、

「つむ」

すぐに自分が緊急事態に陥っていることに気がついた。

人がいる。女性だ。この国ではよく見る灰色の仕立ての良いい装束を纏っているのを見ても間違いない、この世界の人間だ。

エミリアが太陽の光を背にしているため、自分が侵入した空間とは反対側にある扉の所に立っている女性の顔が、はっきりと見えた。

その顔は、驚愕と恐怖に彩られている。

この場合、まず自分は間違いない侵入者であり、扉を開けて入ってきている彼女は、この建築物の関係者である可能性が高い。

これだけのことをエミリアは一瞬で分析し、すぐに昨夜の自分の失敗を悔やむ。

窓と、窓の錠を閉めてしまった。

エミリアの知る錠前と構造が似ていたため、閉めることができたのが仇になった。窓を突き破って逃げれば、痕跡が残ってしまう。

かくなる上は……………

「光鏡衣!!」

透明化の法術

滅多に使う機会はないが、悪魔に支配された窓に無駄な戦闘を避けたから潜入したい場合には重宝した術だった。

聖法氣の消費が起るため高等悪魔には見破られることが多い上に、エミリア自身法術はそれほど得意ではないのだが、仲間のエメラダ・エトワードが使えば人間の法術士すら欺くことのできる隠密術と化す。

通常は接触時に使っても存在を検知されてしまうため意味が無いのだが、虚を突いて脱出することはできる。

活路は窓にあらず、女性の背後にある扉だ。

だが、事態はエミリアの予想もしない方向へと向かっていった。

「(ひいっ!!)」

女性の表情と声色から驚愕が消え恐怖が増し、腰がぐくぐくと震えはじめている。

「(さ……き、消え……た……消え……ひええええええ!!)」

「えっ　ちよっ……!!」

「(本当にいたあああああああ!)」

女性が顔を青ざめさせ、訳の分からない言葉を叫びながら、扉に体当たりして飛び出してい

つてしまった。

当て身をしてひるませることができれば、と考えていたエミリアにとって、透明化の法術を見ただけで逃げ出されるのは予想外すぎた。

エミリアが使う透明化の法術は決して完成度が高くなく、よく目を凝らせば法術士でなくても見破られてしまう程度のものだ。

それともまさか不意打ちを警戒して、広い所で自分と事を構えようとしてもいうのだろうか。エミリアが思わず女性の後を追おうとして驛に駆け寄ると、

「(うぐぐぐ)」

外からは、何やら痛そうな音と声。

見ると、長い廊下の途中で、さっきの女性がうつぶせに倒れ伏していた。

廊下の端には、何やら木の棒のようなものが転がっていて、よく見ると女性の履いている靴のかかとの形が、左右で違っていてしまっている。

ハイヒール、という靴は知っていても履いたことは数えるほどしかないエミリアだが、目の前の女性がハイヒールの踵を折って転倒しまった、ということに気づいた。

そして、転倒したならすぐに起き上がればいいものを、何やら全身を痛かく痙攣させてなかなか起き上がってこない。

「(ひ、あ、いや)」

それでも必死になって、胸を前に繰り出してエミリアがいた部屋から離れようとしているところを見ると、どうやら彼女は自分から逃げ出そうとしたようだ。

このとき初めて、エミリアの胸中に「自分がものすごく悪いことをした」という気持ちが湧き上がってきた。

見たところ戦士や法術士にも見えないし、この五日間この世界のこの都市を彷徨って幾度となく似たような衣装の女性を見た。

きっとこの建物を管理しているか、どこかエミリアが見落とした部屋に居住している普通の人の人なのだ。

その場合、窓が開いていた、という理由で許しもなく侵入して、あまつさえ人を威嚇するような態度の自分こそ、この場面では悪人である。

エミリアは、ゆっくり扉を開ける。

金属や石に見える素材を使った重厚そうな見た目に反して、思いがけず軽かった。扉の裏のものらしき音がスイ、と鳴って、

「ふん……え、え、や、ヤダ、え」

その音を聞いて、倒れたまま張り巡る女性は、今や涙すら流していた。

怖がらせてしまったこと、勝手に部屋に入ったことは、詫言なければならぬ。

エミリアは鏡の具足を履いたまま女性にゆっくりと近づく。

するとどこまでも続く狭く長く長い一枚岩が敷かれた庭下に、銀のブーツの踵がカツンカツンと当たる音が響いた。

「(い、嘘、何? なんなの? 誰かいるの? …、来ないで、来ないで!)」

女性は涙でもちやぐちやになった顔で必死に首を横に振りながら、何かを捜しているようで、エミリアの方を見ようとしもない。

エミリアはエミリアで、まだこの国の言葉をはとんど理解できていないため女性は何を言っているのかよく分からないが、少なくとも歓迎の意でないことは分かった。

だから顔み込んで、この国で多く耳にした、挨拶と思しき言葉をたたくとしく発した。

「(オ……オオ……オオオオ……)」

「(びきっ!)」

「(オ、オ、オツカレサマ、ダンス)」

今度こそ、女性の歌の奥から、人国のものとも思えぬ悲鳴が漏れた。

「(いやああああああああ誰もいないところから声がああああああああ!)」

「えっ? あ、ちよ、ちよっと!)」

エミリアは呼びかけるがもう遅い。

女性は靴を脱ぎ捨て、四足歩行に近い醜鬼の勢いで今度こそ逃げ出してしまったのだ。

「ま、待って! そ、そんなんじや危な……!」

「（いやああああああ……!!）」

エミリアから見えないどこかに階段でもあったのだろうか。

腰を抜かしていたようにすら見えただのに、靴を脱ぎ捨てた途端もの凄（こ）い勢いで女性の悲鳴は遠ざかり、やがて聞こえなくなってしまうた。

「そ、そんなに怖がらなくても」

確かに不法侵入者ではあるが、ちゃんと対話の意志を示そうとしたのに。

エミリアは、少しだけ傷ついたように口を失（う）せせたが、ふと足元に、黒い大きなものが落ちていることに気づいた。

どうやら靴（くつ）のようだ。さっきの女性が、置いていったものだろうか。

材質はなかなか高級な革のようで、口金も新品のような金色を光らせている。

「……って、あれ？」

エミリアはその動き上げられた金属靴を見て、あることに気づいた。

そしてぱっとして自分の手を目の前にかさしてから、大きくため息をついて肩を落とした。

「そりゃ、怖いわよね。何も見えないのに、ドアが開いたり足音がしたり声があったりしたら」

透明化の技術（技術）を使っておきながら、女性に接近する際に術を解除することを失念してしまっ

たのだ。

よく見れば開（ひら）かれたように揺（ゆ）らめくエミリアの姿を捉えられたはずだが、恐懼（こわ）状態に陥（お）ってい

た彼女にはその余術が無かつたのだらう。

いずれにせよ、この建物もやはりエミリアの安住の地でも、魔域でもないことはこれではつきりした。

あの女性には悪いことをしたが、これ以上この場にとどまるのは得策ではない。

警吏や兵士を呼ばれてしまうかもしれないし、そうなったらエミリアは人間を相手に強硬手段に出なければならなくなる。

それはエミリアの望むところではない。

「これ、置いておけばあの人、取りに戻ってくるかしら……でも」

エミリアは肩を纏めて空を見やった。

日覚めたときは気がつかなかったが、どうやら花屋の窓から差し込んでいた日差しは夕陽のそれであるらしい。

廊下側から見える空はうつすら雲がかつており、再び夜が来ようとしている。

自分の疲勞の度合いを改めて実感し、そこにどれほどの判断ミスが重なったかも今、痛いほど理解した。

「あの人がどういう人が分からないし、この建物に誰かいたら、空に放置すれば盗まれちゃうかもしれないし……」

エミリアは独り言を言いながら靴を持ち上げ、なんとなく廊下の端に寄せようとして、



「……………」  
靴の口から覗く、沢山の紙を目にして動きを止める。

手に持った感じでは、靴の中には色々な物が詰まっているようだ。

「……………」  
エミリアは、しばしの遠慮の後、

「……………」  
周囲を見回すと、靴を持ったまま元の部屋に取って返した。

扉の錠を四苦八苦しながらかけ、何も無い部屋の真ん中に座り込み、靴と正面から向き合い、しばし靴の口金に映る自分と眺めっこしながら、大きく息を吸った。

「大法神と、進化聖剣・片翼」と、父の名に賭けて誓います。あなたの持ち物を、決して盗んだりしません。得た知識を、決して人に漏らしたり悪用したりしません。だから少しだけ……この世界のことを勉強させてください」

他人の持ち物をまさぐる。

勇者以前に、人として、恥すべき行為だ。

だが同時に今日の前には、エミリアがこの国で生きるために、魔王を倒すために必要な知識の一部が間違いないとある。

もしこの罪を誰かに問われたら、そのときはその縛弾を甘んじて受け入れ贖罪する覚悟を

固めたエミリアは、意を決して靴の口に手を突っ込んだ。

たつぷり半日は座りっぱなしだっただろうか。

とつくに夜は更け、部屋の中には闇が落ちていく。

だがエミリアは、法術の灯りを部屋の中に浮かべ、一心不乱にあの女性の靴を検分していた。今しか、この国の一般人の持ち物に直接触れる機会はないのだ。

あの女性だって靴を失くしたのをいつまでも放置してはいないだろう。あの女性がやってきたら、靴も中身も全て返して自分はこの部屋を去らねばならない。

タイムリミットは近いのだ。

「やっぱり、これはお金なのよね。穴の開いた硬貨なんて珍しいわね」

エミリアは滑らかな手触りの革の小物入れから出てきたコインや紙片を一枚一枚丁寧に床に並べて鑑<sup>かん</sup>めく。

コインには神殿らしき建物や、花や木や騎乗などがデザインされていて、金や銀や銅の含有量は少なそうではあるものの、これらのコインを貨幣だと考えるのはそう難しいことではなかった。

紙片には美しいパターン模様と人物や風景などの細密画に加えてコインと同じ系統の文字が



描かれていた。

その文字とは「1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 0」の十種類である。

もしこれが数字なのだとすれば、この紙片は「紙幣」ではないかと思えてきた。

紙幣の概念そのものは理解していたが、実際に流通している図を見るのはこれが二度目。

一度目は中央大陸の港都市でのことだったが、その時点では魔王軍の影響で中央大陸で流通する通貨の価値が暴落しており、無理に両替する必要は無いと仲間が言っていたのを思い出す。

とにかく、紙幣は通貨と通貨を発行する国家に対する絶対的な信用が不可欠であり、しかも軽量である性質上、非常に高い貨幣価値を持っている。

靴の持ち主の女性は一見してエミリアと変わらぬ年齢に見えたが、この国はあんな若者がこんなに沢山の紙幣を持ち歩けるほど豊かで強大な国なのだろうか。

「いずれにせよ、私が持つてる金貨や銀貨は、簡単にには使えないわね」

紙幣などエミリアは持っていないし、それにこの国のコインは銀色をしていても単純に銀で鋳造されているように見えない。

先ほどの文字が数字だと分かってても、どういう順番で大きくなるのかも分からないし、今はこれ以上お金のことを考えても仕方が無さそうだ。

次にエミリアが注目したのは、大きな地図である。

広げてみると、これまた上質な洋紙を用いた大きな地図だ。

白地図に見えたが、よく見ると細かい数字（と思しき文字）が無数に書き込まれている。

この国の印刷技術が発達しているのはこの建物に築る前からある程度理解していたが、変な文字が縦横無尽に書き込まれている技術には舌を巻くばかりだ。

「この文字の羅列が必ずしもお金を表すとは限らない。距離ってことも考えられるし、道に番号がついているのかも……でも、法則があるわね。道には矢印と四文字。区画には丸の中に二文字。ここは……四文字だけど、道が太いのか川が流れてるのか……他には無い丸で囲われている。うーん……赤い字は後から手で書き込まれたものよね」

道と区画と数字だけのそつけない地図の中に、赤い字で何かが書き込まれている。

「真ん中の赤い印が、この建物？」

疲労で朦朧としていたとはいえ、周辺の地理はある程度頭に入っている。

エミリアは、白地図がこの建物を中心に広がっている、かなり限定的な範囲を示した地図であることを気がついた。

「ということば、それぞれの矢印の間にある数字は距離ね。この矢印の端から端までが四ケタの数字で表される単位の距離なんだわ！ やっぱこの十個の文字が、数字だと思って間違いないさそうね！」

「1、2、3、4、5、6、7、8、9、0」の十文字が数字だとすれば、この国の数は十進

数でカウントできるということになる。これだけでも、大きな前進だ。

あとはこの字を昇順に並べることができれば、お金や距離などの値がなんとなくではあるが見えてくるはずだ。

「でも、こことここは同じくらい距離にしか見えないのに、どうして数字が違うの……?」印刷されている字が細かいため、法術の灯りを少し強くしながら地図に見入る。

「赤い字の書き込みが多い所の周りは、似たような組み合わせが多いわね。この建物の周りも他とは違う数字。これは実際に行ってみないことには……あれ? これって……」

そのときエミリアは、靴の中にもう一枚、地図が入っていることに気がついた。

「んん? これ、同じ場所の地図?」

今度出てきたのは、青色と朱色で印字された地図であり、書き込まれている文字の量は先ほどの白地図とはけた違いに多い。

白地図では大まかに囲まれていた区画が密に区切られ、その中に様々な種類の文字が詰まっている。

また、この地図は紙面の四方に絵と大きな文字が入った枠が設けられていて、そのデザインからエミリアは店の看板を連想した。

「これ……こっちの方が、私の馴染んでる地図に近いわ」

大都市では、商工ギルドが街中の案内図に商店などの重要施設の広告を表示することがある

ため、これもその類ではないかとエミリアは推測した。

それと同時に、エミリアはある問題に気づく。

「これは……ちよつと、大変そうね」

青字の地図を眺めていると、文字の種類が異常に多い上、どれも形が極めて複雑である。

この世界に来てすぐに気づいたことだが、この国は文字の種類が多い。

青地図をざっと眺めただけでも三十五種類の系統の文字に分けられそうだが、これが全て表音文字だとしたらちよつともないことだし、表意文字だとすると、全てを読みわけたいと思つてもとても一日二日では理解しきれないだろう。

「これは、概念送受をしつかり使つていけないと、厄介なことになりそうだわ……」

概念送受の法術は初めて赴く土地の言葉が分からないときには重宝するが、何もかも完全に翻訳されるわけではない。

双方に共通の概念が無いと、まったく違う意味にとられて言葉が通じないなどということもたまにある。

エンテ・イスラの旅であれば、仲間の誰かが行く先々の国の言葉に通じていたし、金で通辞を雇うこともできたが、この国ではそういうわけにはいかない。

「せめて、誰か一人の人とゆっくり喋ることができれば……」

この国に来てから、エミリアはほとんどの人間と言葉を交わすことができなかった。

道行く人はエミリアの風体を見てあからさまに関わりを持たないし、警吏に遠いかけられることを会話とは呼べないだろう。

今のところエミリアが理解しているこの國の言葉は、街中で耳にしたものばかりである。人と人が顔を合わせるときに用いる「オツカレサマデス」という挨拶。

店舗の従業員が道行く人を呼びとめるときに使う「イワッシャイイワッシャイ」。

街行く親が、落ち着かない子供を静かにさせるときに使う「コッチオイデ」「オトナシタシロ」。

警吏が不審者を追うときに叫ぶ「トマレ」「マチナサイ」「マテ」といった。

「……これって」

エミリアはふと、白地図と青地図の双方に、同じ筆跡による同じ形状の文字列の書き込みがあることに気づいた。

その文字列を、エミリアは地図以外の紙の中のものに見た気がする。

「あつた、これだわ」

それは貨幣が入っていた革の小物入れ、つまり財布の中だった。

色とりとり、材質も様々なカードが沢山入っているが、その全てに同じ形の文字が書かれたり刻まれたりしている。

「こつちにも」



さらに、小さな革のカードケースの中には、全く同じデザインで例の文字列が入っているカードの束を見つけた。

カード束には紙幣よりもさらに高精緻で鮮やかな色合いの緻密な人物画が描かれており、その絵の顔を見て、エミリアは確信した。

「あの女の人……この靴の持ち主だわ。ということとは……これが、彼女の名前なのね」

地図に自分の名前を書き込むことで、所有者を明確にしているのである。

バリエーション豊かなカード類がなんのためのものなのかは分からないが、その中の一枚にカイトシェールドと呼ばれる騎士団の形の中に赤い十字が描かれたものがあった。

もしかしたらどこかの騎士団に所属している証なのかもしれない。

「せめて、この人の名前をなんて発音するのか分ければ……何か、他に何かないかしら」  
 略くなった室内で、エミリアはさらに靴を機分し、あの女性やこの国に因するヒントを得ようとする。

「うーん、この紙束は多分何かの仕事の書類よね。これ、ハンカチかしら、綺麗な色……。このカードにも数字と名前。これは、本の入ったガラス瓶……。じやないわね。なんなのこの透明で軽くて柔らかい瓶は？ 山の絵と文字が描いてあるけど読めないんじや……。あとは似たようなものばかりで……。これは？」

エミリアは、外側についていたポケットに奇妙なものを発見した。

手のひらサイズの、四角くて硬い、寒やかな色が塗られた板だ。サイズの割には重量感があり、端から布製のストラップがくっついていていた。

板の周りには小さな突起が沢山出ていて、何かを差し込めそうな穴も開いている。

「なんだろう……これ、ボタンかしら……きやっ!?」

不用意に突起の一つに触れた途端、板の表面が光を放ち、エミリアは驚いて板を床に放り出してしまった。

爆発するのか、閃光を発して目を眩ませるのか、とにかく板に盗人が手をかけた場合の尻かど警戒したエミリアは、はっと飛びさる。

が、板は光を発しただけでそれ以上何も起きない。

恐る恐る光を放つ表面を覗き込んで見ると、

「あ、可愛い……」

そこには、壁紙までデフォルメされた顔らしき絵が浮かび上がっていた。

枕を抱えた熊が仰向けになって眠っている絵が映し出された表面には、同時に四ケタの数字も浮かび上がっている。

「す、数字が動いた?」

エミリアが覗き込んだその瞬間、四ケタの数字の一番右側が「1」から「2」に変わったのだ。

また新しい謎が噴き出して、エミリアがその光る板を手にとったそのときだった。

「(ひいひい!!)」

「えっ」

いつの間、廊下側の扉が開いていたのだらう。

鍵をかけたはずの扉が開いており、エミリアが顔を上げたそこには人間が立っていた。

法術の光で照らされ、恐怖に彩られたその顔は忘れようもない。先ほどの靴を放り出して

逃げていった、あの女性だ。

エミリアは今度は逃げることは考えなかった。

不法侵入と、持ち物を勝手に検分したことを詫言なければ。そう思つて手を伸ばした瞬間、

「(はふわあっ!!)」

女性はその声を上げて、またも廊下に飛び出していつてしまった。

「あ、ちよ待って、あ、違ふ、ええつと!!」

エミリアは、自分が書架に追われたときのことを必死に思い出して、叫んだ。

「(マテ……トマレ……)」

だが、今度は姿を現していたにも関わらず、女性はずっとくねなかった。

「(いやあああああああああ! 鬼火と錯視者があああああああ!!)」

「……オニビトロイムンヤ?」

エミリアは、訳の分からない言葉の連続に咽喉を塞<sup>ふさ</sup>げたが、靴は返さなければならぬし、何より今逃げられたら次にいつ会えるか分からない。

エミリアはなんとか女性を止めようとして後を追う。

「マチナサイー オトナシクシロー」

「いやあああああああー」

「イラッシヤイ、イラッシヤイ」

「(来ないでえええええええ)」

「(コッチニオイデヨ コッチニオイデヨ)」

「(死にたくないいいいい) やっぱこのマンション祝<sup>いわ</sup>われてるのよとおお)」

建物の中にエミリアの呼び止める声が反響して低く響き渡り、逃げる女性の声がそれに覆いかぶさるように甲高く響き渡る。

必死に追いかけたが、女性は廊下の先でどこへともなく消えてしまい、エミリアはまたも相手を見失った。

どこからか階段を駆け下りるような音が聞こえるのだが、その階段がどこにあるのかわからない。

また逃げられてしまった。そして、今度もやはり怖がられてしまっていた。

全身鎧がこの国の風体<sup>ふうたい</sup>として奇抜であることはもう理解していたエミリアだが、それにして

も彼女の怖がり方は異常な気もする。

それに「オニビトロロイムシヤ」という響きには、なんだかもの凄く極々しいものを感じた。もしや、とんでもない凶悪犯が何かと勘違いされているのではないか。

「うーん、やっぱり顔が良くないのかしら」

そう考えてみると、自分が不審者である要素はいくつも思い浮かぶ。

そして魔王との最終決戦から聞をおかずにやってきてしまったので、顔は全身が傷だらけで破損している箇所もある。

そもそもこの国に来てからこつち、確かに箱兎を纏った騎士姿など見たことも無い。

「やっぱり、顔かしらね……」

本来ならば勇者の証である破邪の衣さえあれば全身鎧など不要なのだが、自分の聖法気絶量の問題が、聖剣と破邪の衣を同時に最高の状態にすることができないのだ。

魔王の攻撃から身を守れても、相手を斬れないのなら意味が無い。

最終決戦直前のエミリアはそう考え、破邪の衣を使わない代わりに聖剣に最大のエネルギーを注ぐことを選択したのだ。

「……………変な臭いとか、してないわよね」

エミリアはふと気になって、自分の長い髪の匂いをかいでみる。

魔王との最終決戦から即、異世界に放り出され彷徨うこと数日。

激しい戦闘の後に何日も入浴していないという事実は女性として直視したくない現実だが、実はエミリアはちょっとした裏技を持っている。

「昨日一度だけ変身してるから……そういうことは、無いはず」

エミリアの内に眠る天使の血。

記憶にも無い、あの運命の日まで語られたことのない母の血を目覚めさせたとき、エミリアの全身は「完全に」リフレッシュするのだ。

例えば激しい戦闘で傷を負っても、天使の血による『変身』を行うことによって、傷は即座に回復する。

変身状態で傷を負っても時間の経過で徐々に回復し、回復しきらないまま変身が解除されたからと言って傷が一気に重くなるようなこともない。

そのためエミリア自身は、実は一度変身すると、それこそ多入りに入浴をしたのと同じ状態になることができるのだ。

国土の平均気温と湿度が非常に高く清流の少ない東大陸東部を旅していた間のこと、多くの戦闘を経たにも関わらず、仲間の中でエミリア一人だけが体を清潔な状態に保っていたのである。

仲間の三人と自分との違いと言えはそこしかない。

事実エミリアは、エンター・イスラの旅の間、戦闘中のやむを得ない事情からこの恩恵に浴し、

同じく女性であるエメラダ・エトゥーヴァから敬々讃ましがられたものである。

ただ変身に必要な魔法気量はそれなりに大きいため、コストパフォーマンスが良いとはとても言えないし、当然のように身に纏っているものには変身の影響は一切及ばない。

「そっち、かも」

エミリアは誰に見られているわけでもないのに顔を赤らめてしまう。

平和な国や豊かな国で身なりが整わないと、単純に恥ずかしいだけでなく、様々な不便に見舞われるのはこれまでも多く経験してきたことだ。

「どこかで洗濯できるところ……さすがに水を飲むときみたいに街中の広場の水飲み場ってわけにはいかないし、それにこの国って夜でも人通り多いから、光體衣使っても怪しまれちゃうかも知れないし、第一いくら見えないからってそんなことさすがにできない……」

急に色々気になり出したエミリアはそんなことを考えはじめるが、さりとてどこかに死てがあるわけでもない。

もしかしたらあの女性の地図にそういった情報も書かれているのかもしれないが、文字を読めなければ結局何もできない。

やはり、最後の手段に出るしかないのか。エミリアがそう考えたときだった。

「……なんの音？」

非常に小刻みな硬い音が、一定のリズムでどこからか響いてくる。

大きな虫の羽音のようにも聞こえるが、どうも音は部屋の中から聞こえてくるようだ。エミリアは開け放たれた扉から部屋の中を見ると、

「また、あの板……」

先ほど光を放った板が、今度は光を明滅させながら床の上で小刻みに震えているのだ。

「な、なんなの？」

エミリアは警戒しつつ恐る恐る近づく。

急にとひかかってくるのではないかなどと考えながら光る面を覗き込むと、壁の絵が揺られていたところに、先ほどは無かった赤と緑の四角の図形が浮き出ていた。

エミリアが誤も分からず光る板と眼み合っていると、やがて振動は止まり絵も元の壁に戻った。

「な、な、なんだった……きやあつて」

だがまたすぐに、再び同じように震えて光り出す。

しかも今度はいっかな止まらない。たつぷり一分は過ぎようかという頃、エミリアは急に意を決して板を拾い上げた。

手の中で板が鈍く震えているが、人体に有害な何かが起る様子はない。

表面では先ほどの赤と緑の四角が光っており、よく見るとその四角の中にはこれまた初めて見る形の模様がある。



「これ、なんの形……ひっ！」

エミリアは恐る恐る緑色の四角に触れてみると、その遠端に振動がやみ、また板の表面の給が切り替わった。

硬い音を立てて板は床に落ち、再びしほしの沈黙。

「な、な、な」

だが、次の変化はすぐに訪れた。

「(も、もしもし……もしもし)」

「ワ」

声だ。

板から、人間の声が聞こえる！

エミリアが感じたことの無いノイズが混じっているが、これはもしかしたら、あの女性の声ではないか？

エミリアは思わず周囲を探るが、今は近くに人間の気配を感じない。

もしかしたらこの板は、エンテ・イスラで言うところの遠隔通話用概念送受のための器具が何かなのではなからうか。

「(だ、誰か電話、とりましたよね？ もしもし……もしもし)」

「声が通じる……ってことは」

遠隔通話の概念を受は、エミリアも膝の間によく使った。

この板の向こう側に人間がいる、ということばもしかしたら！

「概念を受……使えるかも」

この国にやってきて初めての、落ち着いて人間と喋るチャンスである。

今度こそ、怖がらせてはならない。そして、そのためにはもうこれしかない。

「……」

エミリアは、目の前に転がっている板に向かって意識を集中させる。

そしてそれは、思ったよりも簡単に接続した。相手は、やはりあの女性だ。

エミリアは、光る板の前に腰を下ろすと、概念を受で相手の意識と言葉をゆっくり読み取り

ながら、声を出した。

「(もし……もし……)」

これは、どうやら遠隔通信時の挨拶のようだ。

「(もしもし!? つ、繋がつてる!? じゃ、じゃあケイタイは通とは違う所で落としたのか

も! ……もしもし!?)」

ケイタイ?

共通する概念が存在せず、意味を測りかねるエミリア。

「(ケイタイ……)」

「（は、はい。あの……私、そのタイタイの持ち主で、今水稲町ミヅイナギの駅前駅前の交番交番にいます」

水稲町とは種が、この辺りの地名のはずだ。  
交番とは、あの警吏警吏の詰所詰所のような建物のことだろう。ここでエミリアは慌てて青字の地図を広げ、共有できた概念の場所をチエックしていく。

駅、とは交通機関の停留所のことだから、相手の女性が今どこにいるのか、エミリアは概ね把握した。

それほど遠くではなさそうだ。

「（あの、それでその）」

「（オオ、オオ、オツカレ、サマデス）」

「（え？ あ、はい、あの）」

「（オマエノ、ナマエ、ハ）」

まだ、言葉や概念を拾いきれない。

そもそも共通の概念を持っていなければ概念送受は通じない。

ならば、今は相手の言葉を引き出すためにも可能な限り、この国の言葉で話すのが良いだろうとエミリアは踏んだ。

それがしんでもない間違いだとエミリアは気づかなかった。

「（え？ 名前、あの、ユサタイコと言います）」

「ユサ？」

「あ、はい、お湯の湯に、佐藤とかの佐って書いて、湯佐藤……」

「ユサ……タイコ……」

遂に名を手に入れた。

持ち物の中に書かれていた「湯」と「佐」とは間違いないがこの「ユサ」に違いない。

「恵」と「子」の二文字で「タイコ」と読むのかどうかは分からないが、とにかく遂に相手の名前の読み方が分かったのだ。

エミリアは興奮して答えた。

「オマエ、ノ、モサモノ……ココニ、アキ」

「え」

森を迷走の向こうの声か、こちらが応答した途端に強張った。

相手の名前を理解できて気が通り、下手を打ってしまったことを自覚したエミリアは、慌てて言葉を繋ぐ。

「ハヤニ……イラッシャイ……コッチニ、オイザ」

「……ひびく」

「え？ あれ？」

通話中、概念を感受のリンクが唐突に切れた。

この感覚には覚えがある。相手が眠ってしまったり、気絶した場合によくある断絶だ。

通話が途切れてしまったことを光る板も感知したかのように、表面の絵が顔の絵に戻ってしまふ。

また何か、自分は彼女を働がらせるようなことをしてしまったのだろうか。

だが、遠距離で概念感受をしながら相手の言葉も同時に拾うのは、極めて細かく神経を配る作業だ。

彼女に對面して持ち物を返せるなら、概念感受を圧倒的に簡単に授えられ、何より彼女に輪を返して謝ることができる。

それに、今の受け答えも、この国の言葉で決して間違ったことは言っていないはずだ。

「……これで、なんとかなるかしら……」

相手の居場所が正確に分からない以上、どうしても彼女にここに来てもらうしか方法は無い。この板の正確な機能も分からないため、こちらから概念感受を飛ばすことも難しい。

「待つしかないわね」

彼女は二度、ここに来た。

この建物に何も関係ない人間が、これだけ沢山部屋がある建物の同じ場所になんの用も無く来るとは考えにくい。

次に来た時はきちんと彼女を出迎えて、色々と謝罪して話をさせてもらわねば。

その結果また警吏を呼ばれてしまう可能性もあるが、そのときはそのときである。

ユサケイコと名乗る女性とわずかではあれ会話できた実りは大きい。この善悪で、次に警吏と相対したとき少しは話ができるだろう。

「そう考えると……やっぱ、この鐘はまずいわね」

今ならヨロイムシヤ、の意味も分かる。

鐘武者。確かに自分は鐘をまとった戦士である。

一目見ただけでそこまでのことを見抜く彼女は大したものだが、自分に敵意が無いということとを理解してもらうためにも、次に会うときには鐘は脱いでいた方がいい。

だがそうすると……。

「う」

エミリアは、鐘の肩当を外そうとして、その下から鐘えた臭いがすることに気がついた。

「せ、洗濯しなきゃ……これじゃ話を聞いてもらうどころじゃ……あ！ そういえば！」

ユサケイコとの概念送受で気づいたことだが、彼女の人生にあの白と青の地図はとても重要な位置を占めているらしい。

その中に、彼女の名前の文字である『湯』が、温泉や風呂を表す言葉でもあるという概念が潜んでいて、

「あったああ!!」

見慣れぬ文字ばかりが書かれている地図を眺めるように眺めていたエミリアは、この国に来て初めて、快哉を叫んだ。

「……生き返ったわー」

エミリアは、五日ぶりに身も心も健やかになって異世界の街に立っていた。

鎧の下で激闘の汗を吸っていた衣類や下着類も、今や石鹸の香りが漂う清潔さである。

あの建物からさほど遠くない場所に「銭湯」なる施設があったのだ。

「銭」が何を意味するかは現場に通り着くまで分からなかったが、通り着いて人々の会話を盗み聞いている間に、それが少額のお金を表す言葉であると理解できた。

公共入浴施設の作りは、世界が違ってもさほど変わらならしい。

ただ、この国特有の文化があってもいけないので、従業員らしい中年女性にエミリアは思い切って声をかけた。

面と向かって落ち着いて言葉を交わせば、やはり概念感受で把握できる事柄の濃度は格段に増す。

中年女性はこちらが言葉が不自由な外国人であると理解したが、言葉を遣いで懇切丁寧に話をしてくれた。

把握できないことも多かったが、ここでもまたエミリアはさらに言葉を多く蓄積できた。

問題はエミリアが持っているお金である。

ユサケイコのお金には手をつけない、と誓ったエミリアである。

魔王城での決戦前に『平和な世の中に帰る』という意味を込め、金貨、銀貨、銅貨を一枚ずつ封入し籠の下に隠した布のお守りを破り、その中の最も高価な金貨を盗し出したのだ。

これには従業員的女性も面喰らっていて困惑した様子であったが、そこに思いがけない助け舟が現れる。

「(はあ……珍しいコインだね)」

エミリアの背後から声をかけてきたのは、眼鏡をかけた老婆だった。

「(メズラシイ、デスカ)」

「(どれ、ちょっと見せてもらん)」

「(ハイ、ドウゾ)」

老婆は時計細工師のような片眼鏡を懐から取り出すと金貨の表面をひとしきり眺めた。

「(ふうむ……少なくとも今日日本や世界で流通してる硬貨じゃないし、表面の刻印も見たことが無い……でも、見たところ金は本物だね)」

「(でもキムラさん、本物の金貨出されてもうちも困るんですよ)」

従業員的女性はキムラという名らしい老婆に肩を練めて言うが、キムラはそれには答えず、



「（私で良ければ買い取るよ、なんならこの金は私が出そう。風呂を浴びたら一緒に私の店においで。きちんと買い取り査定して、お金も払うから）」

全てを理解したわけではないが、行き合った老婦が金貨をこの国の金と交換してくれる、と言っていることは理解できた。

その後、キムラのおばあさんのおかげでエミリアは無事、銭湯に入ることができた。勝手に分からないエミリアに、キムラは銭湯設備の使い方を色々教えてくれた。

鏡を着ていないだけで、こんなに簡単に人と話すことができるのか。

エミリアにはそのことがまず一番の衝撃だった。

どこで魔王サタンと出会うか分からない以上、武器防具はできるだけ肌身から離してはいけない、という気持ちがあればほど裏目に出ていたか、痛いほど思い知る。

エミリアは恐ろしく泡立つ液状の石鹼による洗髪、水と湯が自由自在に出てくる蛇口、温風が飛び出す筒、磨き上げられた巨大な一枚鏡など、見たことも聞いたことも無いものを虎山荘でしながら、何日ぶりかも分からない入浴を終えた。

キムラは銭湯に併設されている、洗濯装置のことも教えてくれた。

「（ガイジンさんがたった一人で着替えも持たずつてのは、度胸は買うけど感心はしないわ。ここで買ってやるぶんは、買い取り額から引かせてもらおうよ）」

替えの衣類も持たないエミリアに半分呆れつつも、キムラは脱衣所にある自動販売機で、こ

れまたエミリアが触れたことも無い素材で作られた下着一式を購入してくれた。

その下着を身に掛け、下着姿のまま洗濯装置の前で待つこと二十分程。

裸の長袖シャツとスポンは石鹸の香りを纏い、ぱりぱりに乾燥した状態で戻ってきた。

「洗濯機も無い国から来た……っていうんじゃないだろうね」

感動のあまり言葉を失っているエミリアに、キムラは苦笑する。

エミリアは不審がられてもいけないと慌てて清潔になった衣類に袖を通すと、その足でキムラの店に連れられてゆく。

店には「時計、アンティーク、貴金属」という形の文字が書かれた看板が掲げられていた。

キムラは店の中で奇妙な箱にコインを嵌め込むと、二本の筒で改めて金貨を見ているようだ。

「(うーん……見たところスペインの古い金貨に似てるけど、金の純度が桁違いに高いね、

……五……いや、七万円出そうか。どうだい?)」

ナナマン、という数字が大きいのかどうかは分からないが、キムラが五から七に「上げた」

ことは理解できた。

エミリアが頷くと、老婆は少し妙な笑顔を浮かべながら、見覚えのある紙幣を七枚、エミリ

アに手渡した。

「まいど。また何か困ったらうちに来な」

会話の間常に現金送受を繰り返していたエミリアは、この瞬間、キムラが結構な商人である

ことを理解してしまった。

「(マインド)」

という言葉に、いい取引である、という意味合いが含まれていたのだ。

恐らく、七万でも彼女にしてみれば安い買物なのだろう。きっとこのあと、もっと高い値段で転売するつもりに違いない。

それに、エミリアは知る由も無いが、本来買い取りはどんな些細な物品であろうと記録をつける決まりがあるのだが、エミリアはその書面も見ることには無かった。

だが、それならそれでも良かった。

どうせこの国に長くいるつもりは無いし、彼女との会話の中でまた言葉の蓄積も増えた。

何より七万円という数字は、この国で当座暮らしてゆくには十分な額であることも分かったからだ。

これだけの言葉の蓄積があれば、ユサタイコにお詫びをすることもできるだろう。

何よりこの国で通用する金が入ったのだ。

これからしばらくは、食事も入浴も洗濯も思いのままである。

このことだけでも、キムラには感謝しなくてはなるまい。

もちろん、これだけで何かが解決したわけではない。

ユサタイコには恥を返却し、不法侵入を詫びなければならぬし、そもそも一番の目的であ

る魔王サタン追討は、全く魔界が開けていない。

むしろ今日にいたるまで一度も魔力の片鱗すら感知できないのが逆に不安である。

一体魔王サタンと悪魔大元帥アルシエルは、身を潜めて何をしているのだろうか。

「人間に隠われているとか……そんなわけないか」

傷ついたとはいえ、魔王サタンの魔力を浴びて無事でいられる人間がそう大勢いるはずもない。もしかしたら、やはり流れ着いた世界は同じでも、どこか離れた場所にいるのではないだろうか。

「何か、広くこの世界の情報を得る方法を探した方がいいかも」

もしかしたら、思った以上の長逗留になるかもしれない。エミリアがそんな予感に暗澹たる気分を抱いたときである。

「な、何？ この匂い」

キムラの店先から、図々しく不法侵入しているあの部屋へと帰ろうと一歩踏み出したとき、どこからともなく、恐ろしく空腹を刺激する香りが流れてきたのである。

香辛料の香りのようなだが、鼻腔がそれを感じた途端、この数日間水しか入れていなかった腹が盛大に鳴った。

「何……この香りは……どこから……」

匂いにつられて歩き出したエミリアは、やがてある建物の前に立ち着く。

それは、どうやら食堂のようだ。

店の外には空気をこれでもかと刺激する香りを集めた風を噴き出す排気口があり、店のシン・ウィンドウには明らかに食べ物らしきものが展示されている。

よく見ると、シン・ウィンドウの中のものとは本物ではなく精巧にできた作り物のようだ。器から箸で面を浮かび上げながらせているものや、焼いたか炒めたかした穀物を盛で揃っているものなど、様々である。

エミリアは掲示されている数字を値段と読んで、千元のお金と見比べる。

「た、足りないってことは、ない、わよねー」

もう我慢ができなかった。

エミリアの体は「料理」を求めている。

腹に重しを詰め込むような、おぼろげな食糧ではない。料理人が丹精込めて作った、お腹が幸せになる料理を求めているのだ。

「（ちゅうかりょうり……中藥料理）……いざー」

エミリアは、勇んでガラスの戸を開けた。

「（いらっしやいませー……）」

店の中からはこの世界で一番聞き慣れた言葉が元氣良く飛び出してきて、それから二時間近く、エミリアは店から出てこなかった。

中華料理屋という場所です。今まで食べたことの無い料理の数々でお腹一杯になって出てきたエミリアは、当たり前のようにあのマンションの部屋へと帰っていった。

そう、この外出で、エミリアは「マンション」という言葉とその意味を獲得していた。

普通に考えれば、この国で通用する現金を得たのだからさちんと宿を探すべきなのだが、エミリアの足は自然とあのマンションへと向いていた。

『アーバンハイツ水稲町』の五〇一号室が、エミリアが不法侵入してしまった部屋である。

窓の錠は相変わらず開けっ放しであり、エサケイコの花や持ち物もそのままだ。

不法侵入者の分際ですら自宅に帰ってきたかのような安心感を抱いてしまったエミリアは、ほんの少しだけ罪悪感にかられつつも、今日もこの部屋で眠ることに決める。

「それにしても……」

と、エミリアはふと、部屋の中を見回す。

このマンションは、銭湯やキムラの賣金屋店や先ほどの中華料理屋と比べても、明らかに新しい建物だ。

これほど大規模で真新しい集合住宅に、人っ子一人住んでいないというのはどういうわけなのだろう。

部屋に戻る前にぐるりと周囲を一廻してみたが、未完成とか、破壊されているとか、そういうことも無さそうだ。

おかげでエミリアは二日の宿と、当座の活動資金を得ることができたのだから文句を言う筋合いではないのだが、それでも気になることは気になる。

エサケイコの正体も結局よく分からないままだ。

そういう意味では、あのキムラという老練相手にもう少し会話をしておくべきだったかとも思う。

だが、あの老婆は油断がならない。

鉄湯のことや金のことは純粋に感嘆しているが、彼女には、自分が身許不確かな怪しげな人間であると感じ取られている。

エミリアは魔王サタンを倒しに来たのであって、積極的にこの国の人間と関わるつもりも必要も無いし、この国が本当に平和な国なのであれば、そもそも深く関わりを持つべきではないのだ。

そういう意味ではエサケイコともそれほど密な付き合いはできないのだが、とにかく彼女に對しては、脅かしてしまったことを説き、困らずに借りてしまったものを返さねばならないという道義的な理由がある。

「また少し、この国のことが分かればいいんだけどな。んーっ」

十分な睡眠、清潔な浴場、美味しい料理。

久しぶりに心身が充実したエミリアは、床に寝転んで大きく伸びをすると、目を閉じた。

今朝は奇襲を受けてしまったが、今のエミリアならどんなに深く熟睡していても何者かの接近に気づかないことはない。

駿の裏の暗闇に、この国に集てからの色々な記憶が蘇る。

光溢れ、石の塔がひしめく大地に下り立ったときの衝撃。

街に下り立って一番最初に警吏に声をかけられ、連行されそうになって逃亡したこと。

冷たい雨が降りしきる中、どの建物に入ることもできずに雨宿りできる場所を探して何時間も石の塔（高層ビルと言おうさうだ）の屋上を飛び回ったこと。

街中の公園で水を飲んで過ごした二日間。

三日目にやはり警吏に見とがめられて同じ公園に行けなくなったこと。

空腹に耐えかねてなんとか金貨や銀貨で物を売ってもらえないかと店に入り、言葉の通じぬ押し問答の末に警吏を呼ばれたこと。

この数日で口にしたものと言えば、パン屋の店先で配っていたパンの耳（それでもエンヂ・イスタでは滅多に味わえないくらい美味しかった）と、白い柔らかなような塊を売っている店先で配っていたゆでた豆を煮こしたような味気のないペースト状の物（でもお腹には溜まった）だけ。



その結果、通り着いたのが、今不法滞在しているマンションなのである。

「なんだからくなく目に遭ってない……」

自分でも思った以上にみじめな悪い出ばかりだった。

エミリアは思わずうつぶせになって涙をこらえる。

ここだって本当はベランダで横になれば儲けもの、程度に思っていたのが、偶然この部屋だけ施設が壊れか何かで敷が開いたからこそ入ることができたのだ。

結果としてこの国のことを多少なりとも学べたが、それも本当に偶然が重なった結果だ。

エンテ・イスラでの旅では、新天地で仲間とはぐれたりしたことはあっても、初めての土地で出会う人間と全く意思の疎通がとれない、ということとはまず無かった。

そもそもどこに行っても大体は悪魔大元帥ルシフェルを倒した勇者の一行、ということでも飲まれたし、そうでなくても仲間達の誰かの経験や肩書きのおかげで、エミリアは旅の面倒事のかかなりの部分を知らずに来たのだと今更知った。

大正神教会のお膝元である西大陸で、教会の最高意思決定機関六人の大神官の一人であるオルバ・メイヤーの名を知らぬ者はいなかったし、教会との関係が良くない国では、セント・アイレ宮廷法術士エメラダ・エトラーヴァの名は絶大な力を発揮した。

西大陸から出た後は、世界中に不思議な知り合いが大勢いるアルバート・エンダの手腕に助けられなかったことはなかった。

「オルバ……エメ……アル……」

エミリアは、小さく仲間達の名を呼ぶ。

強くて、優しく、頼りがいがあり、命も心も預けることができる大切な仲間達。

今は、誰もいない。

「会いたいよ……」

エミリアは、小さなため息と一筋の涙を流し、そのまま、気づかぬうちに眠りに落ちていた。

「……ん？」

エミリアは、奇妙な気配の接近を感じし目を覚ました。

沢山の人間が近づいてくる。エミリアは素早く身を起こすと、玄関の扉を開けて廊下から階

下を見下ろす。

紺色やダレーの服を纏った男が十人近く、マンションの入り口で嘔吐しており、大きな金属の

箱を担いだ車がマンションの前の道に停まっている。

「あれは」

そしてその男達に混ざって、あの女性がいた。ユサケイコだ。

エミリアは不穏なものを感じ、部屋に戻った。どうも今までと様子が違う。

國々の現連は警吏には見えないが、もしかしたらユサケイコが自分を排除するために援軍を要請した可能性もある。

「……………いずれにしろ、もうここにはいられないかもね」

できれば直接会って詫言ひたかったが、そうも言っていられなくなったようだ。

エミリアは、昨夜のうちに纏めておいたユサケイコの靴を支那の前に置くと、改めて鎧を纏い、少しでも名残惜しそうに一度だけ悪屋の中を振り返ってから、車を回けてペランダから身を離した。



「本当なんですよ!! 幽霊がいたんですよ!! ちゃんと各部屋でお威いしたほうがいいですよ!!」

「バカ! インテリア業者の前で会計なこと言うんじゃないやねえって言っただろぅが!」

「だって、本当に……………」

「いい加減にしろ! お前だってこのアーバンハイツ永福町がどんな状況なのか分かってんだろぅが! 何かなんでも入居率上げないといけねえときに幽霊だのなんだのと訳分からん理由で警察の厄介になりやがって、また妙な噂が立ったらどうすんだ!」

「で、でも……私が来る前から色々変なものと見たって周辺から会社に問い合わせが……」

「ああもうー」とにかくお前、五階までのマルイチ号室を蹴開けてこい！」

「こ、五階まで？ 五〇一入ってるじゃないですかあ！ そこそそよ幽霊が出たのは！」

「いいから行けつての！ こんな朝っぱらから幽霊なんか出てたまるか！」

「そ、そんなあ……」

アーバンハイジ水曜町の玄関ロビーで、小声で應り合う二人組の男女がいた。

女性の方は、エミリアが遭遇したあの湯気女子であり、男は彼女の上司であった。

二人の前では、作業服を着たインテリア業者の社員達が、沢山の書類を見ながらこの後の予定の確認を始めている。

「すいませーん！ もう始めちゃっていいですかー」

「はらー！ 呼んでる！ きつさと鍵開けてこいー！ はーい！ 今開けさせますからー！ はらー！ 行けー！」

上司は業者側の責任者に満面の笑みを浮かべ、恵子には鬼のような形相で命令を下す。

「俺は午後三時までには事務所戻らなきゃいけないんだから、ぐずぐずしてたらお前一人で全部やらせるぞ」

「わ、分かりました、やります、やりますよお」

恵子は半分涙目になって、特殊な形の鍵を手で階段に向かって走り出した。

「うう、なんで私がこんな物件に……」

エレベーターは乗客さんに使ってもらわねばならないので、恵子は新調したヒールなしのパンツで階段を駆け上がりながら感傷を零す。

このアーバンハイツ永福町は、恵子が働く「株式会社大村アーバンコミュニティ不動産」史上最高の歴史を辿ったマンションであった。

首都圏の高級マンションの売れ行きは、この五年の間に不況の最中でも堅実な右肩上がりを示していた。

近年は東京湾岸に乱立するタワーマンションがまさしくその流れを示しているが、高級マンション界隈では今、さらに「副都心圏」での顧客獲得競争が激化していた。

池袋駅、新宿駅、渋谷駅、目黒駅、大崎駅、品川駅、東京駅、上野駅などへのアクセスが容易な東京二十三区内の路線は年を追う毎に上昇する傾向にある。

軒となるのは、各駅のすぐ傍ではなく、各駅からJ・R・私鉄・地下鉄などを使って数駅の範囲の土地だ。

昭和から平成一輪代は、地価の高い都心を避けて、埼玉や千葉や神奈川などの郊外型衛星都市の人口が増えるドーナツ化現象が顕著であったが、今や人口の都心回帰により各ターミナル駅周辺で一口ドーナツ化現象が起きている状態である。

そんな中、永福町というこれ以上ない立地に建てられたこのアーバンハイツ永福町は、まさ

しく社運を賭けた大プロジェクトであり、約束された成功への道となるはずであった。

京王井の頭線水稲町駅は急行停車駅であり、渋谷、吉祥寺、新宿という都内の三つの人口密集スポットへ簡単にアクセスできる。

京王バスの水稲町営業所停留所は始発・終点停留所であり、都内各所へのアクセスも良好。駅の近くには中規模商業施設と大きな商店街があつて、それでいて古い閑静な住宅地もまだ多く残っていることから、生活の上でも不便は無く高層階からの眺望も抜群。

しかし現実のアーバンハイツ水稲町は、築三年目にして未だ入居率脅威のゼロパーセントという生ける屍と化している。

はつきり言つて、失敗する要素はどこにも無い物件であつた。

だがアーバンハイツ水稲町は、成功の道を辿るところか、スタートを切ることすらできずに失敗した。

「大体それだって、私達のせいじゃないのに。はあ……」

四階の四〇一号室の鍵を開けてから、響子は憂鬱な気分で大井を仰ぐ。

『水稲町の未来型生活環境、始まる』が、アーバンハイツ水稲町の宣伝コピーであつた。

建設開始当初からアーバンコミュニティ不動産の親会社である総合商社大村グループのプッシュを受け、広告開始からわずか半月で、上層階の分譲部分は最上階のペントハウスも含め八割が成約にこぎつけた。

中層下層の賃貸部分も同じ合わせが引きも切らなかつた。

誰もがプロジェクトの成功を確信した矢先、アーバンハイツ永福町は成功への赤城を突然踏み外した。

きっかけはごく微細な書類上のミスであつた。

買収した土地の一部が埋蔵文化財包蔵地であつたため、そこに高層建築物を建てるためには事前に発掘調査をする必要があつた。

それ自体はごく通常の手続きなのだが、本来工事着工の六十日前までに届け出しなければならぬところを、書類上五十九日前の届け出になつていたら、区から注意を受けたのだ。

届け出てから何ヶ月も経って工事も終わりがけている頃にそんなことを言われても困るのだが、違反は違反。

落成に先だつて後顧の憂いを断つべく、アーバンコミュニティ社内で大々的なコンプライアンスチェックを行おうという動きが出た。

地盤は、そこから始まつた。

コンプライアンスチェックの結果、単なる手続きミスでは済まされない事実が次々と発覚したのである。

完成間近だつたアーバンハイツ永福町は、一言で言えば手抜き工事の塊だつたのだ。

構造材の材質が本来のものと違つたり、構造計算書の数値が水増しされていて本来必要な数

の構造材が組み込まれていなかったりということだけでも会社がひっくり返る大問題なのに、断熱等級や耐震等級の偽装に加え、一部の幹部社員が数値偽装に絡むカラ発注で浮いた予算を着服していたことまで発覚し、事はとても社内で済ませられる問題ではなくなりました。

特に分譲部分の八割が成約済みであったために、当然のように各方面から非難と損害賠償請求訴訟の雨あられ。アーバンコミュニティ不動産どころか親会社の大村グループの株価までが、史上稀に見る暴落を起こした。

アーバンコミュニティ不動産の役員は全員更迭。大村グループトップの大村商会の取締役の一人も辞任に追い込まれ、その下では一体どれほどの人間の首が飛んだか、当時新卒社会人であった湯佐恵子には想像もつかない。

嵐のような社会人一年目を過ごした恵子は、そんな悪夢の落成から二年後の現在、社内で完結した「アーバンハイツ水堀町再生プロジェクト」に所属していた。

地獄に落ちたアーバンハイツ水堀町を、改めて一から売り出すのだ。

土地や建物を売らず、自分達の手で再生して本来あるべき姿を取り戻すことで、信用を回復するというのがグループ全体の方針であった。

当時問題になった様々な偽装を全て一から洗い出し、マンション一棟を三年かけて丸々リフォームした。

プロジェクトや会社が潰れても、この立地そのものの価値が失われたわけではない。



当初想定していた事業規模には到底追いつかないだろうが、失われた信用を少しでも取り戻すことができるなら、それに越したことはないのである。

「だから幽霊の噂がマズいってのは分かるけど……でも、本当にいたし……」

午前四の陽光がさんさんと降り注ぐ廊下で、恵子は五〇一号室の扉の前で固唾を呑んだ。

恵子は見たのだ。

目の前で消える人間。かいだことのない異臭。誰もいないのに開くドア。誰もいないのに聞こえる、たどたどしくおどろおどろしい声。自分を呼び、追いかけてくる声。虚空に浮かぶ鬼火と、その後ろに佇む謎の客の姿を。

「うう、嫌だよお、入りたくないよお」

恵子は何も起こらない内から涙目になっているが、きりきりと上司に怒られたくない。

前門の幽霊、後門の上司。こんな理不尽なことがあるだろうか。

とはいえ、上司も会社も必死なのだ。

以前とは違う意味でこのアーバンハイツ水瀬町には社運がかかっているし、恵子も、今日から再開する顧客向けの広報プロジェクト始動のためにハードスケジュールをこなしてきた。

ここで立ち止まるわけにはいかないのである。

「幽霊なんていない幽霊なんていない幽霊なんていない幽霊なんてきえええい！」

恵子は今日までの苦勞を思い出し、今が朝であることも手促して意を決して開錠し五〇一号

室の扉を開いた。

「……………」

何もいない。

妙な臭いもしない。

当然鬼火も幽霊者もない。

「はああああ」

恵子は詰めていた息を思わず吐き出した。

やはり鼠を詰めてきて、幻覚を見たのだろう。自分にそう言い聞かせた恵子はそれでもおっかなびっくり中に入ると、

「あっ!! 私の靴!!」

部屋の中央に、自分の靴が置いてあることに気がついた。

昨夜、幽霊の声を聞いて涼を食って逃げ出し交番に駆け込むまで、靴を落としたことを気づかなかった。

もちろん大切な仕事道具が踏まれた靴をここで落としたことは分かっていたが、昨夜はとてもではないが取りに戻る気にはなれなかったのだ。

「あー良かった! やっぱここにあったんだー。うん、中身も大丈夫そう」

恵子は部屋の中に駆け込むと、靴の中身をぎゅっと改める。

「……………あれ？」

そして、すぐにおかしなことに気がついた。

「……………あれ？」

今しがた自分が鍵を開けて入ってきたばかりの玄関を振り向く。自分は昨夜、玄関を入ってすぐに鬼火と鑑武者から逃げ出した。なのに何故、靴が脱ぎ捨てられた部屋の中にあるのだ。

「あ、あ、あれ？ え、これ、どういう？」

自分が見たのは幽霊などではなく、実は部屋に忍び込んでいた不審者だった？

だが、人間だったとしたら余計に訳が分らない。不法侵入者なら一体どうやってこの部屋に入り、どうやって玄関の鍵をかけて逃げ出したのだろうか。

ここは五階である。

侵入盗防止のために非常階段や配管の類は外壁に一切露出していないし、緊急避難用のはしこは下階からは操作できないようになっていいる。

「……………」

要すはベランダに飛び出さずとして、窓に脱走されていないことに気づく。

だが五〇一号室の非常用避難はしこは解放されていない。

「だ、誰が……誰が靴を、部屋の中に入れたの？」

人間がいたのなら、その人物はどうやってこの中に入り、どうやってこの部屋から出ていった？

「まだ、どこかにいる？」

下階に上司や業者がいるという事実も手伝って、恵子は気丈に室内を見て回る。

トイレにも、バスルームにも、タローゼットにも、人が入った形跡すら無い。

となればあとは隣のベランダだが……。

「誰も、いない」

アーバンハイツ水稲町の構造上、普通の人間がルーフを無視したとしても、行き来できるの

は隣室のベランダだけ。そのさらに向こう側の部屋のベランダまでなんのつかかりもない壁が数メートル続いており、ジャンプして飛び移れる距離ではない。

「ど、どういう……」

恵子はとりあえず下にいる和村に全室解放したことを連絡しようとして、無意識に腕のボタ

ントに手を突っ込み、

「……あれ？」

普段そこにあるはずのものが無いことに気づき、息を吞んだ。

「……」

エミリアは、マンションから少し離れた道端で頭を抱えていた。

その手には、表面が光るあの不思議な板があった。

「間違えて持ってきてしまった……」



夕陽がアーバンハイツ水稲町の長い影を町に落とす。

恵子は手に一眼レフのカメラを持ち、青白い顔をしながらその夕陽を眺めていた。

今や、このマンションの中には自分一人。

上司も、家具を搬入したインテリア業者の人達も、とっくに撤収しているが、恵子の仕事はこれからが本番。

陽が落ちるのを待って、一階から五階までのマウイチ号室内の夜の写真を撮影しなければならぬのである。

撮影された写真の中から広告素材として使えるようなものを選ぶのだ。

本来広告に使う写真の撮影は、広告代理店なりプロのカメラマンなりを雇うのが普通なのだが、アーバンハイツ水稲町再生プロジェクトはアウトソーシングしなければ手に入らないもの

の発注を除き、営業販売にまつわるはば全ての仕事を社内の人間で回すという制限がかけられていた。

信用回復とコンプライアンス管理と経費削減を同時に行うために必要だと上は言うのだが、現場を取り回す人間にしてみれば、一人のところに何重にも仕事がかぶってしまい非効率この上ないやり方であると言わざるを得ない。

ようやく仕事に慣れた程度でまだまだ部署内では新人扱いの恵子など、この手の用を任せるにはうってつけなのだ。

それでも世故は状況が状況だから仕方ないと割り切れる恵子なのだが、今回は別である。

このマンションには得体の知れない何かがいる。

幽霊なのか、不法侵入者なのかは不明だが、いずれにせよ恵子は沢山の怪異を体験してしまっていた。

今日も既に、あるはずの無い場所に自分の靴が置いてある、という怪異が起こっているのである。

あの正体不明の声は聞こえてこないものの、靴の中から買ったばかりのスリムフォンが消えていることが、恵子をとにかく不安にさせていた。

靴と同時に紛失して二日経つが、この忙しさの中で未だに携帯電話販売店に行って利用停止の手続きすらできていなかった。

仕事上の電話は社給の携帯電話を使っているので問題ないのだが、自前の電話もなんだかんだで仕事に使うことが多いので、不便この上ない。

そしてそのスリムフォンに電話を入れた昨夜、得体の知れない何者かが電話口に出たのだ。マンションの中で自分を呼ぶ声にも似ていた気がするが、声が恐ろしく遠かったので断定はできないし、そもそも恐怖で失神してしまったので記憶自体があやふやだった。

「夜になったら、さっさと帰ってさっさと帰ろ！」

恵子は恐怖の記憶を振り払うように大声で叫ぶと、今の内から各部屋で予め絞っておいた撮影ポイントを確認し、カメラを夜間室内撮影用に切り替えるために調整する。

「うーん。やっぱりこの照明、邪魔だなあ。動かさなきゃおうかな」

各部屋には、恵子と上司で手配したインテリア業者によって、様々な家具が見栄え良くコーディネートされている。

一夜限りのことではなく、ファミリー向けの二〇一号室と単身者向けの五〇一号室はモデルルームとして実際にしばらく公開する予定だ。

「やっぱり水回りには気になるよね。蛇口も折角今年の最新モデルにしてあるんだし、写さない手はないわ」

部署内ではベーパー扱いでも、三年目には三年目なりの矜持と善情がある。

一度頭が切り替われば、仕事に集中して他のことを忘れられた。

そうこうするうちに窓の外は顔の色が濃くなりはじめた。

恵子は室内の照明をつけて回りながら、改めて撮影の準備に取りかかった。その時だった。

五〇一号室のドアが、外からノックされたのだ。

「っ？」

恵子は、思わず手にしていたカメラを取り落としそうになった。

誰だろう。

上司か、会社の誰かが来たのだろうか。それとも業者が忘れ物をしたのだろうか。

だが誰が来るにしろ、何故マスターキーを使って入ってこないのか。

恵子が固まっていると、またノックの音。

そこで初めて恵子は、玄関の鍵をかけていない事実気づく。

マスターキー以前の問題だ。会社の人間なら、すぐにドアを開けて入ってくるはずだ。

「だ、誰なの……」

恵子は足音を立てないように、リビングのモニター付きインターフォンを起動させる。

「……ん。」

高解像、広角度のカメラが写す画面の端には、見たことの無い髪の長い女性が立っていた。シンプルでラフな白いシャツとパンツ装で、足元には巨大なガタ勢が置かれている。



少し戸惑うような顔で周囲を見回している姿は、少なくとも幽霊には見えない。

恵子ははっと胸をなで下ろした。

服装は気になったものの、レンタル家具業者が何か足りないものを持ってきたという感じだ。インターフォンを使わなかったことも、ここがこれから売り出すマンションだということを分かっていれば領けることである。

「すいませーん、今出ますねー」

恵子はそれでもまだ少しドキドキしている胸を押さえながら、インターフォンに向かって声を発した。

するとなぜか画面の中の女性は強引（こわ）えたように激しく周囲を見回しはじめた。

返事が遅くて驚いたのだろう。そんなことを考えながら恵子は玄関の扉を開け、

「え」

そのまま固まり、言葉を失った。

女性が、いない。

あるのはあのガラ袋だけだ。

「……………ええ？」

恵子は左右を見回すが、長い廊下には人っ子一人いない。

インターフォンで答えてからドアを開けるまで十秒と経っていない。

そのたった十秒で、足音すら無く人が忽然と消えるものだろうか。

「これは、何？」

状況に理解が追いつかずそう眩いた恵子は、部屋から一歩踏み出して足元に残っていたガラ袋を蹴つてしまう。

「がらん？」

袋の中からは妙に固い音がした。

恵子がガラ袋の口を開けてみるとそこにあったのは、

「よ、銀!? え、あっ!?」

恵子は思わず飛びずさって尻もちをついてしまう。

これは、どう見ても西洋銀だ。

鑑査者というフリーズとは少しズレるデザインだが、それでも恵子にあの夜の幽霊を思い出させるには十分なものだった。

「なんなの……なんなのよこれ!?」

目をこすつても、どれだけ時間が経つても、ガラ袋中の幽霊が消えたりせずそこにある。

恵子は恐懼で、尻もちをついたまま動けなくなってしまうた。

一方のエミリアは、あの光る板をユサタイコに返すため、ずっとマンションを見張っていた。男達が帰ってもユサタイコが出てくる気配がなかったため、待っていればいずれ所在が掴めると思つたのだ。

奇しくもあの部屋に照明が灯つたため、エミリアは迅速に飛び立って彼女に光る板を返却すべくドアをノックした。

ところが部屋の中からではなく、明後日の方向から声が聞こえたため、ユサタイコが自分を捕えるための伏兵を忍ばせていたのかと勘違いし、つい隠れてしまったのである。

ちなみにエミリアが隠れているのは廊下の外。

つまりマンションの外壁に張りついているのだ。

しかし隠れたものの、援軍が現れるどころか人の気配は相変わらずユサタイコ一人。

これは一体どういうことなのだろうか。

息詰まる沈黙が続く。

「(……………うんえええ)」

「え？」

だがそのとき突然、ユサタイコの泣き声が聞こえてエミリアは目を細めた。

「(もう、もうイヤだあ……………なんなのよお……………私が、私が何したって……………うんえええ)」

「えっ？ えっ？」

「(私が悪いんじゃないのに……最初に手を抜いた人達が全部悪いのよ！　なんで私がこんな目に遭わなきゃいけないのよぉぉ！)」

壁に張りついたまま、エミリアは困惑する。

「(どうして何年も前のことで、なんの責任もない私が怒られて、時間削って、こんな悔い舉いしなきゃいけないの……もうイヤだあ)」

エミリアは、これまでにない罪悪感にかられた。

謝罪に來たのに、没かせてしまっただろうするのか。

半分以上は何を言っているのか分からないが、それでも彼女が自分の行動のせいで悔がっていることだけは確信できた。

だからエミリアは、今度はこそ正面切って謝るために、顔を出した。

「(ア、アノ、オドロカセテスイマセ……)」

「(ひさやあああああああああああああああああああああああああああああああ)」

当然のように、ユサケイコは絶叫を上げて手に持った会社の備品のカメラも放り出し、部屋の中に逃走した。







「(悪魔退散悪魔退散)」

「ア、アタリコウツナソナ……ワタシハタダ……」

「(いやああああ誰か助けてええええええええええ)」

「……………ああもうっ！ お願いだから話を聞いて」

エミリアはユサケイコに参み寄ると、頭を抱えて膝を突きつけ、

「シンタっ！」

「(ひぶろうっ！)」

現金送受の金鼓を叩きつけた。

その瞬間、エミリアと恵子の概念がリンクする。

「……………私の言葉、分かる？」

「ふ、ふあい」

ほんやりした様子で、湯佐恵子が答えた。

悲劇で描られていた目の焦点が少しずつ合いはじめ、エミリアと目が合った瞬間、

「あなたは……誰？」

「……暗ずとも長くなるんだけど、私は……」

「このマンションがコケたときに責任とらされてクビになった社員の怒意？」

「この世界とは違う所から来た……はい？」

エミリアは、今更ながら自分が幽霊と間違えられていたことを確信させられ、微妙な顔になる。

エンテ・イストラでの『幽霊』の概念は日本のそれとは異なるのだが、いずれにしろ死者がこの世を彷徨っている、という点では共通している。

「違う世界……あの世？」

アノコとは、大正神教会で言うところの天界のことのようだ。

死者の魂が死後導かれる所、という感じだろうか。

「えっと、そうじゃないんだけど……とにかく、あなたに一度会って直接謝りたかったの」

「謝る……って」

「勝手に入って、怪がらせてしまつて本当にごめんなさい。悪気は無かったの。この世界のルールを、まだよく分かっていなくて」

「あなたは……人間なの？」

「そ、そうよ、幽霊なんかじゃ……」

「姿を消したり、廊下の手摺りの向こうに浮いてたりしたの？」

「ええっと、法術を使えば普通のことなんだけど……この国にはこういう技術は無いの?」

エミリアは少し考えてから、見た目の刺激が少なそうな法術を一つ披露してみせる。

「こういう、空中に浮いたりするような……」

「夢よ夢よこれは夢よそうだそうに遠くないわそうよ足のある幽霊の話だってこの世には沢山あるもの夢よ夢夢……」

「ごめんなさい。もう変なこと聞いたりしないから」

ただ体を床から少し浮かせてみせただけでこの反応である。

これでは灯りを出したり炎を出したりした日にはショック死されても文句は言えない。

「それでね、今日は、これを返してきたの」

「夢夢夢夢夢……」

「ちよっと」

「あ、はい、え? あああー私のケータイ!!」

恵子は目の前に差し出されたスリムフォンを見て目を細めた。

「ケータイ……っていうの、これは」

エミリアはケータイと呼ばれた光る板を恵子へと返す。

「これは、という道具なの?」

エミリアは、おっかなびっくりケータイを締めつけ、小声で「何か変なことになって



ないかな」などと言う恵子に尋ねると、恵子はきよんととして言った。

「ケータイが無い時代の人？」

「うん？」

エミリアは一瞬首を傾げるが、すぐに恵子が言わんとすることを理解した。

「だから私が古い時代の幽霊だって考えから離れてほしいんだけど」

「幽霊は自分が死んでることに気づかないって言うし」

「だから幽霊じゃないの！ この国に初めて来た外国人だと思ってる！」

「そんなに流暢に日本語話してるのに？」

「これも流暢……ああもうー、もどかしいわねー」

エミリアは頭を抱えるが、この時点で恵子に法術の知識も概念も無いことだけははっきりした。だが、法術が存在しないとすると、これまでエミリアが培ってきた文化的背景は、この国ではほとんど通用しないことになってしまう。

「とにかく！ 私はあなたにずっと謝りたかったの！ 色々悔がらせてしまったこととか、それ以前にこの部屋に勝手に入ったこととかを！」

「そ、そこ！ この部屋に勝手に入ったって言うけど、ゆ、幽霊じゃないって言うなら、どうやってこの部屋に入ったのよ！」

「だから見たでしょ！ あっきみにたいに飛翔の法術で上がってきてここをペランダで休ませて

「まあおうとしたら、この部屋だけ窓の鍵が開いてたのよ！」

こうしている間にも少しずつ相手が喋るこの国の言葉がエミリアの中に蓄積されてゆくが、それでも本当に知りたいこの国の様々な事柄はさっぱり入ってこない。

キムラのおばあさんよりは概念の取得が容易ではあるものの、欲しい情報を引き出すためにはまだしばらく粘る必要があるようだ。

だが、あまり長く彼女と接しすぎれば、自分の存在が彼女に余計な影響を与えないとも限らない。

エミリアはあまり明るくならずそうな先行きに暗澹たる思いがしてきた。



「だから間違じゃないのー この国に初めて来た外国人だと思ってー」

恵子は、ずっと奇妙な違和感に包まれていた。

「そんなに違和感に日本語話してるのに？」

突然現れた謎の女と対峙して既に数分が経っているが、目の前の女の声が、どこか違い所からラジオを通じて頭蓋骨に響いているような、そんな違和感が拭えない。

喋っている声は間違はなく耳に届いている。だが、その音が自分が理解している内容と食い

違っている気がする。だがどうしてそうなのかも分からず夢子は混乱を深くした。

「これも××……ああもう！ もどかしいわね！」

それに、言葉の端々にこうして聞き取れない単語が混じっている。

単語が聞き取れないときは、まるでニューニンダを間違えたラジオから雑音が漏れてくるように、頭の中の違和感が濃くなる。

「とにかく！ 私はあなたにずっと謝りたかったの！ 色々情がらせてしまったこととか、それ以前にこの部屋に勝手に入ったこととかを！」

「そ、そこ！ この部屋に勝手に入ったって言うけど、や、幽霊じゃないって言うなら、どうやってこの部屋に入ったのよ！」

「だから見たでしょ！ さっきみたいに××××××で上がってきてこのベランダで休ませてもらおうとしたら、この部屋だけ窓の鍵が開いてたのよ！」

「だから窓の鍵が開いてたって、外から五階まで上がる方法が……！」

女の放つ情報は根拠が薄い。

よく知る言葉を発せられているのに、まるで初めての言葉を聞いたかのような錯覚に陥る瞬間もある。

眠りから目覚める寸前の、夢と現実が交錯している時間が延々と続いている錯覚に囚われる夢子だったが、そのとき女が言った。

「とにかく、私はもうこの部屋には現れないし、二度とあなたに迷惑をかけないと誓うわ！」

「はあ……」

「それで……最後にもう一度聞く……ううん、教えてほしいんだけど」

「はい？」

こっちこそ聞きたいことは浜山（ハマヤマ）があるのだが、違和感が急激にきつくなり、思考がうまく働かない。

「そのケータイって、どういう道具なの？ 昨日、そのケータイからあなたの声が聞こえてきたんだけど、それは××××の××のような、遠くの人と話せる道具なの？」

携帯電話がどういうものかだと？ 本気でそんなことを聞いているのだろうか。

「携帯……というよりそれはスリムフォンだけど……でも」

スリムフォンは携帯電話の一形態であり、通話以外にも大容量データ通信を前提とした携帯型情報端末として機能していて、日本では大手通信会社三社に加え一部インターネットプロバイダーが販売している。

入手するには携帯電話販売店か通信店に赴き増床と料金プランを決めてから一括購入か分割購入を選ぶ。

「へ、何、これ」

恵子の持つスリムフォンは最近買ったばかりの、トコデモから出ている最新モデルで、前に使

っていたフイーチャーフォンが壊れたので思い切って買い替えたのだが、もともと電子機器に強くない恵子には扱いが難しく、最近ようやくよく慣れてきたところだ。

「ちょよ、ちょっと待って、私そんなことまで聞いてな……」

買い替えに当たって、それまでの携帯電話が青森の実家の父名義で契約していたため、名義を自分のものにするために父との関係を示す書類を実家から送ってもらったことがあるのだが、高校時代に買い替えたときには身分証明書一つで済んだので、当惑したものだ。

「お、おかしいわ！　こんなこと……」

就職して二年間も、実家の親に携帯電話料金を払ってもらっていたことにそのとき初めて気づき、その後送られてきた戸籍謄本を見て、家族から遠く離れた所に来てしまったものだと返した。

天下の大村グループに就職したときには両親も喜んでくれたものだが、すぐにこのアーバンハイブ東福町にまつわる大騒ぎに巻き込まれてしまい、社会人一年生ときには精神をすり減らしたものだ。

混乱する社内で新人は研修も不十分なまま現場に放り込まれ、随分難关をさせられた。一年目で消えた同期も決山いた。だが、そんな中でもやってこられたのは、都内で一人暮らしをしていた学生時代、ドコデモのテレビアポセンターでアルバイトをし、どんな悪言や理不尽な問い合わせにも耐えてきた年月の賜物であると思っていた。

アーバンハイツ水曜町の再生プロジェクトを終えたら、就職して三日目、一度も帰っていない実家に顔を見せようと思っている。

「ダメ……これ以上は……ッ!!」

その瞬間、恵子の意識は、一瞬ではあるが闇に包まれた。



恵子の思考が怒涛の勢いで押し寄せてくる。

「え、何、これ」

エミリアは当惑した。

この携帯電話という道具について尋ねただけなのに、恵子が口を開く前からまるで直接頭の中が覗がってしまったかのように『携帯電話』に関連する記憶や思考がとめどなく流れてくるのだ。

「ちよ、ちよつと待って、私そんなことまで聞いてな……」

恵子がこのマシオンに関わるまでのいきさつまでが、まるでその現場を目にしているかのような鮮明さで展開される。

それと同時にエミリアの脳裏に、この日本という国で学ぶために、働くために、生きるため

に妻子が必要としてきたあらゆる情報が展開される。

「お、おかしいわ！　こんなこと……」

見たことも無い中年男性の顔は、妻子の父の顔か。故郷のアオモリは雪深い土地で、彫りが深く厳しい顔つきはエンテ・イスラ北大陸の山男達を彷彿とさせる。

多くを語らない父親のようだが、妻子を深く愛しているし、妻子もそのことをきちんと理解していて、父に敬ずかしくないよう都合での一人暮らしでも易きに流されず頑張って勉強に励んだ。

ドコダモのアルバイトは過酷を極めたようだが、その分時給も良く、時給に必要なお金はほとんど実家に頼らずに済んだ。

このマンションに関わる仕事を終えたら、両親に会いに行きたい。

「ダメ……これ以上は……ッ!!」

エミリアは、頭を抱えて叫んだ。

「リンク解除！　っは!!」

エミリアは強引に概念込受を中断し、妻子との接続を遮断した。

妻子は小さく息を吸って、目を閉じてしまう。

エミリアはいえ、目を見開いて冷や汗を流しながら息を荒くしていた。

「何……今のは……概念遮断で、あんなことが……」

エミリアは美える掌を見て、信じられない事態に慄く。

概念感受の暴走としか思えなかった。頭が痛を得たときのように熱を持っていて、頭がぼんやりし、動作も激しい。

何より、たった数分のやりとりで、恐ろしく体力を消耗している自分に気がつく。

「聖法気が……暴走した？」

それしか考えられなかった。

法術にはそれぞれ相応しい聖法気量というものがあり、概念感受はそれほど強い聖法気を必要としない。

そもそも人と自分の頭を繋ぐのだ。うかつに聖法気を漂流させれば相手にダメージを与えない上、自分の頭も危険に晒してしまう。

だが今までエミリアは一度として、概念感受のコントロールに失敗したことなど無かったのだ。

それがまるで、犯罪者を取り調べるとききの記憶の強制解放の法術のように、相手の頭の中を無闇やたらに読み取ってしまった。

記憶によつて法術は高等技術であり、エミリアも存在は知っているもののきちんと学んだことは無く、使えるのは記憶の一時的な封印がせいぜいである。

それも魔王軍の懐術にトラウマを植えつけられた小さな子供相手に、ごく短い記憶の封印し



が成功せず、自我が強い大人相手の場合はエメラダやオルバに頼りきりだった。

「どういうこと？ 術の制御が……」

エミリアは懸って来た弦線をこらえきれず、座り込んでしまう。

「どうして……いくら暴走したからって、概念連受でこんなに疲れるなんて……」

エミリアはそう言ってから、はっとして目を閉じて項垂れている恵子を見た。

この国に、法術の概念は無い。

この国に、法術は無い。

法術が無い、ということは、

「聖法気が、無い？」

言葉に出してしまってから、その事実がもたらす恐怖はエミリアの心臓をわし掴みにした。

聖法気はエンテ・イスラの大気に遍く満ちる法術の重要なエネルギー源である。

エンテ・イスラの人間は大なり小なりその聖法気を摂取して生きている。

それが、この日本という国には無い。いや、ひょっとしたらこの世界、地球全てに。

聖法気の受容量には個人差があり、全く法術を使えない人間というのは珍しくない。

だが、それでも聖法気そのものは摂取しているはずであり、それが完全に失われたとき人間

はどうなってしまうのか、エミリアは知らなかった。

「本当に……無い、の？」

エミリアは恵子の手に触れて、彼女の体内に微かなゾナーを透ってみる。

「……………んあっ！」

その瞬間、気づけ薬を打たれたかのように恵子が目を開けた。

「は、本当に、無い……………」

恵子の体からは、一切の聖法気反応が返ってこなかった。

今の恵子の反応は、聖法気が心臓に蓄積されるという性質から来るものに過ぎない。

「(あ、あれ、私さんで……………あ、幽霊さん…………)」

幽霊、という単語は聞き取れたが、それでもまだまだ要領が足りず、概念を捉えなしては恵子が言うことの半分も分らない。

だが、このまま恵子にリンクを続ければ、彼女自身の身の安全が保障できないし、自分もとうなってしまうか分からない。

この国ではもしかしたら、聖法気を補充できないのかもしれない。

この推測が正しいかどうか分からないうちは、この場で粘るのは得策ではない。

漸時、エミリアは判断した。

「恵子さん」

「え？ あれ？ あ、はい」

恵子は一瞬だけ自分の耳に触れてから退席した。

「ごめんなさい。結局あなたに迷惑をかけてしまった。でも、もう一度誓うわ。私は決してあなたの物を盗まない。あなたから得た知識を、要用したり、流布させたりしない。もう決して……あなたを怖がらせたりしない」

「は、はあ……」

「あなたは私を忘れてしまうけど、お礼と、お詫びの気持ちを含めて、名乗るわ。私はエミリア・ユステイーナ。この世界に災厄を持ち込んだしまった……異世界の勇者」

「ゆう……しや？」

「お仕事頑張つて。あなたのこと応援してるわ。……さよなら、本当に、ごめんなさい」



「ケイコサン」

「え？ あれ？ あ、はい」

気絶していた自覚を失っている恵子は、先ほどとは違い、はっきりと耳朶を打つ女性の声に驚きながら、つい返事をしていた。

「ゴメンなさい。ケツキヨタあなたにメイワタカケナシマタ。でも、そウ、一度誓ウワ。私は決してアナタノモノを盗まナーイ。あなたからそラツタ知識をアタヨウしたり、リユースユツ

させたりしナ—イ。もうクシテアナタヲ、悔がらせたりしナ—イ」

「は、はあ……」

「あなたは私を忘れてシマウケド、おレイとおワビの気持ちもコメテナノルワ。私はエミリア・ユステイ—ナ。この世界にサイヤタ持ち込んでシマタ……真世界の勇者」

「ゆう……じや？」

恵子は目を醒めかざると、エミリアという名らしい女性は、恵子の顔の前に手をかざした。

「オシゴト頑張ッテ。あなたのことも応援してマース。……サヨナラホントニゴメンナサ—イ」

エミリアの掌から一瞬風のようなものが吹きつけてきて、

気がついたとき、恵子は病院のベッドの上にいたのだった。



それから一ヶ月後、改めて売りに出されたアーバンハイツ水稲町の成約率は分譲、賃貸共に全体の二割にとどまっていた。二割でも、良いと思わねばならなかった。

そもそも世間が元の悪評を忘れていなかったことを社内の誰もが痛感していた。

そしてそれ以上に、このマンションで湯佐恵子の身に起こった出来事が外部に漏れ、それが丁度世間を騒がせていた事件と関連づけられてしまい、アーバンハイツ水稲町の過去を含めて一部のニュースで報道されてしまったことが悔しかった。

あの日の翌朝、恵子が帰らないことを心配した同僚がアーバンハイツ水稲町を訪ねてきたときに彼女は意識を失った状態で発見された。

命に別状は無いものの、マンションを管理する会社の社員が原因不明の意識喪失を起こし救急車で運ばれたという事実を、世間は重く受け止めた。

同時期に原宿、代々木、初台近辺で、同じように街行く人々が突然原因不明の意識喪失を起こす事件が多発していた。

原因不明と言いつつ、世の中ではやれガス漏れだのやれテロだのと無責任な憶測が飛び交い、恵子の事例はその憶測に尾ひれをつけてしまったのである。

さらには元々周辺住民から、不審者や怪現象の通報が、アーバンハイツ水稲町を管理する営業所に再三再四入っていた事実。その調査を行った湯佐恵子が、繰り返し現場の異常を訴えていたにも関わらず会社側がなんの対策も打たなかった事実なども明るみに出て、アーバンコミュニティ不動産はまたも社内コンプライアンスの改善を迫られることとなった。

恵子自身も、自分でも何が起こったのかまるで分からず退院した後もややもやは晴れなかった。

幽霊がいて怖い思いをした記憶はあるのだが、なぜだか心の中にはもう幽霊は現れないだろうという確信があるのが不思議であつた。

自分のことなのに、自分が分からない。

病院で気がついたときには例の意識喪失事件と関連して警察や消防に色々聞かれたが、記憶も身に覚えも無い恵子には実のある回答はできなかった。

手がかりらしいものは存在するのだが、今となってはそれも恵子の手元には無い。

それは、恵子が仕事のために持ち込んでいた一冊レファメラだった。

恵子が発見された前日、最後に記録されていたのはさかさまに写った五〇一号室の玄関だった。

開け放たれた扉の前には袋のようなものが置いてあり、廊下の手摺りの外側から人の顔のようないくつかが覗いている画像が写っているのだが、不鮮明で判然としない。

恵子自身、それが何かを尋ねられても首を捻るしかできなかった。

結局恵子の事例を最後に都内各所の意識喪失事件は途絶え、アーバンハイツ水稲町に起こる異常も無くなったことから事態はうやむやになったまゝ、恵子は今では店舗窓口業務担当に異動していた。

「結局なんだったんだろう、あれは」

自分が世間を騒がせている事件事故の当事者の一人になっているというのは妙な感覚だが、

どうにも報道されている一連の事件と自分が体験したことに齟齬を感じるのだ。

このところ報道されている「意識喪失事件」の全てが、衝を歩いていたら突然悪気を感じた直後に気を失い、その後のことを覚えていない、というもののばかり。

だが恵子は体調不良を覚えた記憶は無いし、衝を歩いていたわけでもない。

「被害者」と言われる人間の中で、恵子だけが唯一室内で発見されたのである。

恵子が発見された五階の各部屋は全てが事故物件として他の階の半分以下の家賃が設定されているが、それでもこの五階に寄りつく客は一人としていなかった。

マンションそのものの評判は元から地に落ちていたが、そもそも恵子がアーバンハイツ水溜町に出入りするようになったのも、近隣住民から「妙な光を見た」だの「一人が入り込んでい」る「だの」といった通報があったからだ。

その上管理する会社の社員が謎の事故に巻き込まれたとあっては、もはや客が来る方がおかしいと思わなければならない。

そもそも築三年という半端な築浅ぶりからして音景を勘ぐるには十分すぎるし、それでも興味を抱いてインターネットで検索をかければ、過去の随分前から今回の事件にいたるまでの経緯を、おせっかいにも大変に分かりやすく纏めてくれたサイトまで出てくる始末だ。

特に恵子が発見された五階の各部屋は、明らかに他の部屋に比べて資料が抑えられているにも関わらず、入居どころか問い合わせすら無かった。

つい、昨日までは。

「つと、そろそろ約束の時間だね」

担当者として車子を名指しし、アーバンハイツ永福町に入居したい、と店舗に問い合わせがあったのは昨日のことだ。

大村グループや不動産サイトなどの仲介ではなく、直接店舗に連絡があった。

若い女性のようなだったが、なんと問題の五〇一号室を指定してきたのだ。

電話を受けた専務は戸惑った。

誰かがそこで亡くなったわけではないが、五階の部屋に関する全ての広告や書類には「告知事項あり」と明記されている。

電話の女性がそれらを見ているのか定かではないが、告知事項ありと明記した以上、意図の拒当はその内容を知らせるのが通例である。

自分が高層者なのでなかなか言い出し辛いことだが、それでも仕事は仕事だ。

勇気を出して五〇一号室にまつわる事実を話そうとすると、電話の女性はこちらを逃り、「全部知ってます。了解した上で、お借りしたいんです」と言った。

そうまで言われては断る理由もない。

一室でも租まれは、他の部屋が雪崩を打って埋まるということとはよくあることだ。



恵子は早速契約の段取りを整え、約束の時間に女性が来店するのを待つ。

果たしてやってきたのは、スーツ姿にシヨルダーバッグを提げた髪の長い若い女性だった。年齢は恵子と同じか、少し下だろうか。身なりは新卒社会人のようだが、顔つきには世慣れた迫力のようなものかみまぎっている。

恵子は客が来たというのに、一瞬対応の言葉を忘れた。女性の顔を見たとき、頭の中で何かが反応したのだ。

私はこの人と、どこかで会ったことがある……

「こんにちは。お約束いただいた、道佐です」

「……あ、大変失礼いたしました。お待ちしておりました。どうぞこちらにおかけください」相手の声を聞いて、恵子ははっと我に返った。

そうだが、お客の名は「道佐」だった。

漢字は違うが読み方が自分の名字と同じなので、案に混同しているだけかもしれない。

「本日はお越しいただきましてありがとうございます。……あの、私がお電話いただきました、その、私もこう書いて「ゆき」と申します」

「はい。よろしくお願いします」

道佐と名乗った客は小さく一礼。考えてみれば相手が自分を名指して連絡してきたのだから、同じ読みの苗字であることをいちいち断る必要は無かったか、と恵子は思い返す。

「それで、アーバンハイツ水稲町の五〇一号室をご希望とのことなのですが、現地を一度に見たことはございますか？」

「ええ、何處か。モデルルームとして公開されてたこともありますよね」

何處も現地を見た上で、入居しようというのか。恵子はまた驚く。

「こちらの部屋には、お客様に対して予めお断りしなければならぬことがございまして、その上でもし不都合がございましたら別の物件を紹介できますので、ご検討ください」

「はい。でもその前にお伺いしたいんですけど、それを了解すれば、借りられるんですね」

「は？ え、ええ、仰る通りですが、はい」

どうやら、渡佐氏の決心は相当固いようだ。

世の中には確かに事故物件なものの、その、という考えを持つ人も存在するが、五〇一号室は單身者用。当然渡佐氏も一人暮らしで申し込んできている。

女性一人で惣に入居者のいない所の事故物件に住む、とは相当に豪胆であると言わざるを得ない。

「床が抜けてるとか玄関のドアが無いとか、水道も電気も通ってないとかそんなことでもない限り、お借りしたいと思ってます」

恵子が全ての説明を終えても、渡佐氏の決心は変わらなかった。

ここまでは話して事故物件の本丸たる部屋に入居してもらえたら願ったり叶ったり。

恵子<sup>けいこ</sup>としても、事故物件と知って敢て借りたいという相手に必要以上に流ることもできず、契約に移る。

「それでは太極の中に、日中連絡のつく電話番さんと、勤務先をこちらに……あら」  
恵子は、女性が持っている携帯電話、そして勤務先に見覚えがあった。

何より契約者の下の名前の字を見て、これは本当に偶然なのかと、心が動揺する。

「どうしました？」

「あ、いえ。その、お客様のお持ちの携帯電話が私のと同じものでしたので……それに、実は私、昔ここでアルバイトしてたことがあるんです」

「そうだったんですか」

お客様の女性は驚いた風に微笑む。

「それに……」

「はい」

「お客様のお名前が私にそっくりなので、なんだか他人のような気がしないんです……すいません、余計なことを」

「いいえ。そういえば、似てますね。もしかして貴、どこかで会ってるのかも」

恵子はその笑顔にまた、記憶の奥底を掻き乱されるが、やはり初対面<sup>はつたいめん</sup>だという認識は変わらなかった。

「……では、早速明日からご入居されたいということでしたので、設備面で色々ご説明申し上げます。何分管理入を置いておりませんもので、これから現地にご案内いたします」

恵子が五〇一号室の鍵を手に立ち上がると、恵子の運転する社用車で、店から数分のアーバンハイタ永福町へと赴いた。

オートロックのロビーを抜け、エレベーターに乗り、五階で降りると、静かな廊下が二人を迎えた。

「……」

恵子はここでも、自分はこの女性を知っているのではないか、という不思議な既視感に囚われた。

あのとき、自分はこの廊下で何かを見たのではないだろうか。だが、思い出そうとすればするほど、夢から目覚めて夢の内容を思い出せないときのように、違和感の断片は記憶の断片から離れていった。

部屋の鍵を開けて中に入ると、室内はがらんどう。

ここでもまた恵子は思い出した。

モデルルームとして使っていたのは実質一週間ほどだった。事故物件にいつまでもインテリアを置いておけないということで業者が早々に家具類を引き上げてしまっていた。

「お客様……」

「はい。」

「こちらに初めていらつしやったのは、いつ頃のことでしたか？」

「さあ、いつだったかしら」

「問いには答えず、彼女は小さく微笑んだ。」

「でも、いいお部屋だと思います。気に入りました。幽霊が出るなんて噂も聞きましたけど、この様子だとその幽霊も、案外申し訳なく思つててもう出てこないんじゃないかしら」

「はあ……」

恵子は要領を得ない感じで首を傾げるしかなかったが、不思議な寒気を持つ客は、部屋の中上がる、リビングの中央で大きく息を吸って目を閉じた。

「（この部屋のこととは……きつと一生忘れられないわ。この国で、初めて私に安らぎを与えてくれた部屋……）」

「へー」

女性の口から、聞いたことの無い言葉が飛び出してきて、恵子は目を丸くする。

「とにかく……本当に色々迷惑をおかけして、お世話になりました。湯佐さん。あなたのおかげで、私はここで生きる指針を見つけることができました。本当にありがとう」

湯佐恵美という名のどこかで見たことがあるような女性は、恵子の当惑を置き去りにしたまま、恵子に向かって深々と頭を下げたのだった。

※

「本当に、今思い返しても恵子さんにはお礼を言っても言い切れないわ」

遊佐恵美は、友人と二人で紅茶とシュークリームを囲みながら言った。

「ほー、じゃあ恵美の『遊佐』って苗字は、その人から取ったの？」

梨香の問いに、恵美は曖昧に頷く。

「半々だったと思うわ。ユステイナって響きから考えたのもあるし、でもやっぱり影響はあったと思う」

「でも今のお話だったら『キムラ』だった可能性もあるんですけどすよねー？」

エメラダが、梨香のお土産のシュークリームを食べ尽くし、恍惚とした表情で尋ねた。

「ああ、木村時計店のお婆ちゃんのことね。あのときはこんなに長くいるつもり無かったから警戒してあんまり深く関わらなかつたけど、実はここに住んでから何度か買い物させてもらってるのよ。そこで少したけ話したけど、販売っ気が強いだけでごく普通のお婆ちゃんだったわ。エレニエム金貨がいくらか売れたのかは特に聞かなかったけどね」

恵美の部屋の日暮まし時計と恵美が出勤するときに使う腕時計は、木村時計店で買い求めたものだが、そのときの木村さんは大変に上機嫌で応対してくれたので、きつと七万円など問題

にならないレベルの金額がついたのだらうと思っている。

「とにかく恵子さんはこの部屋との縁を斷いでくれただけじゃなく……私が魔王を見つけるとき  
つかけも作ってくれてたの」

「ええ、どういうことですか？」

「結局今の話じゃ、恵美がお化けに扮して無理矢理この部屋の家賃を下げさせたようにしか聞  
こえないけど、どこに真央さんが入ってくる余地があったの？」

梨香の歯に衣着せぬ唇に恵美は苦笑しつつ立ち上がると、タローゼットの中からスタラップ  
ブックを取り出し戻ってきた。

「これ、当時の新聞の切り抜きね。こっちが都内の地図」

恵美が開いたページを、梨香とエメラダは覗き込んだ。

「あー……そういやなんかこんなことあった気がするな。私も丁度こっちに隠してきて間が  
無い頃だったから、怖いなーって思ったの思い出したよ」

新聞記事を見て、梨香は背に想いを馳せて頷いている。

「恵子さんが……まあ、私のせいで例れちゃって意識喪失事件の被害者の一人になったとき、  
結構大きく報道されたの。これが、その前の被害者が意識を失った順番と場所ね。こう、原  
宿から始まって、少しずつ少しずつ、笹塚方面に事件の現場が移動してるの、分かる？」

「ああー！　そういうことですかー!!」

エメラダが、一足先に恵美の言わんとしていることに気がついた。

「タイコさんとの概念（概念）逆受（逆受）で、エミリアはこの世界に「聖法（聖法）」が無いことに気づいたわけですよ。ね？ 制御しなければ流出（流出）してしまうことも」

「そういうこと」

「ん？ んん？」

聖香の方はまだ理解（理解）しきれていないようで、恵美が捕捉（捕捉）する。

「つまり、魔王運（魔王運）もそうなんじゃないかってこのとき初めて気がついたので。この世界には魔力が無い。傷ついたあいつらは、この世界に来て大きく魔力を失って遠くからじゃ感知（感知）できないくらい弱（弱）ってるんじゃないかって……まあさすがに、人間の姿（姿）になってマドロナードで働（働）いているとは思（思）いもしなかったけど」

恵美は苦笑（苦笑）して、最初の事件（事件）発生（発生）ポイント（ポイント）を指（指）さす。

「魔王もアルシエルも日本に来て魔力を失った。でも、失われた魔力は雲散霧消（雲散霧消）しちゃったわけじゃない。固（固）ったことに、ちゃんと日本に残（残）ってたのよ」

恵美との戦（戦）いで傷（傷）つぎ腐（腐）っていたサタンもアルシエルも、自分の体（体）から逃（逃）げる魔力（魔力）を吸引（吸引）するだけの力（力）を残（残）していなかった。

二人はゲートから出（出）てすぐ魔力（魔力）を失（失）ったと推測（推測）できるが、恵美自身がそうだったように、ゲートの出口（出口）は空（空）だったのだ。



デートから出た直後に魔力を失ったとすれば、サタンとアルシエルの魔力は一体どこに消えたのか。答えは一つ。デートが開いた空である。

魔力は、耐性の無い人間が直に浴びると肉体に定着をきたす。

連続意識喪失事件の原因は、真真と真屋が日本で失った魔力だったのだ。

「え？　じゃ何？　これは真真さん達の魔力ってやつが、PM2.5とかスギ花粉とかみたい時間に時間差で空から落ちてきたから起こったことだって言うの？」

「もちろんそれだけじゃないわ。移動しているから、きつとあいつら、あのアパートに落ち着くまでずっと流れ流してたんだと思うわ」

「なんだか表現がばっちいいですけど」

エメラダは苦笑する。

「それに、本当にあいつらが弱っていたからこそ、この程度の被害で済んだんだと思う。とにかくこの事件が起これなくなったらあたりにあいつらがいるんじゃないかって思っ、時間があるときにはずっと新宿や渋谷から出てる私鉄近郊を探し回ってたの。まあ……一人だったし仕事も忙しかったから、もの凄く時間がかっちゃったけどね」

「一番大変なときに助けになれなくて申し訳ないです」

「そんなことないわよ。理由があったんだし、それに私はエメが絶対理えに来てくれるって信じてたから」

「ううう、エミリアー！」

感極まった様子で、エメラダは恵美に抱きつく。

「ほらエメラダちゃん、そんな大声出したらアラス・ラムスちゃんが起きちゃうよ」

梨香が人差し指を立てて、エメラダは慌てて口を弁える。

「それに恵子さんの持ち物を勝手に見たときに、じつくり読んだ地図もヒントになったわ」

「白い地図と青い地図の話？ 青は住人の名字とか近所のお店とかの広告が載ってるやつだね。色んな数字が書かれてた白い地図って、結局なんだったの？」

「うん。今はもう見ることは無いんだけど、路線価図だったの」

「ロセンカズ？」

梨香もエメラダも、聞き慣れない単語に首を傾げた。

路線価図とは、市街地を形成する地域の路線、つまり道路に面する宅地一平方メートル当たりの土地評価額を示した地図である。

相続税や固定資産税の計算の基準に使われる値だが、その土地に対する公的な評価が最も直接的に現れる数値なので、地域の不動産価格の指標にもなる。

「恵子さんのを除いた意識喪失事件の場所三つのうち、一つは病院。一つは甲州街道沿い。」

一つは小田急線近くの住宅街だったの。この三つの点を結んだ中には、土地評価額が安くて大きな道路に面してないつまり、家賃が安い集合住宅が沢山あった。魔力を失った魔土が私の

ように換金性の高い物を持ってたとも考え辛かったから、もしかしたら、その中のどこかに身を隠しているんじゃないかって思ったの」

実際には真奥はわずかだが魔力を残していて彼らなりの方法で現金を手に入れていた。

そして結果的に真奥達が住んでいたヴィラ・ローザ管轄はその三角形から外れた場所にあったのだが、真奥が動め、恵美が今回アルバイトに応募したマドロナルド轄の谷駅商店はその中に入っていた。

「ただ闇雲に管轄をうろついてたわけじゃなかったってことか。でも、結局それから実際に真奥さんに会うまで、結構かかってるよね」

「それは仕方ないわ。地図を絞り込んだように見えるけど客観的な証拠があるわけじゃないし、地図で見ると狭いけど実際に歩くとなるもの凄く広いのよ。探査だって毎日できるわけじゃない。不安になって電車で乗って遠くに行ってみたりとか、もっと日本の別の地域で似たような事件が起こってないか探したりとか、色々回り道もしたわ……まあ」

恵美は遠い目をしてしながらその頃のことを思い出す。

「あのときは、こんなことになるなんて思いもしなかったけどね」

こんなこと、の一言には、真奥と再会してからこれまでの、遠方もない出来事全てが詰まっている。

魔王を、真奥を、殺せなかった。それどころか、毎日のように顔を合わせ、食卓を囲み、

「娘」が現れ、彼を信じ、彼に助けられた。

「こんなことになるなんて思わなかった……日本に来てから、その嫌う處しばかりだわ」

「そのことをく後悔していますか……」

エメラダの固い、惠美はすぐに答えた。

「あんまり」

こんなことを言うことになるなんて、それこそ思ひもしなかった。

※

エミリアが日本に来て一年近くが経ち、地國で絞<sup>しぼ</sup>り込んだ範圍もそろそろ踏破<sup>たふは</sup>してしまうのではないかという頃だった。

あれ以降意識喪失<sup>イシツ</sup>事件は囂<sup>さわ</sup>りを齎<sup>もたら</sup>す世間から忘れられていった。

日本に来たばかりの頃とは違い生活環境は整っているし、日本の生活にも慣れて、良い職場や友人にも恵まれていたが、それでも惠美は再び孤独を深めていた。

相変わらず魔王サタンと惡魔大元帥アルシエルの姿は影も形も見えず、エンテ・イスラからの救援も無いまま時間ばかりが過ぎていった。

日本人として振る舞い、日本の生活に慣れてしまったことで、エミリアは湯佐野<sup>タサノ</sup>のときの

ように、誰かに自分の出自を明かすような事態には陥らなかつた。

むしろなまじ明かしてしまつては、恵子けいこがそうであつたように恐れられてしまう公算こうさんが高かつた。

そんなエミリアを、心配そうに見つめる人物がいた。

「……ね、恵美けいみ。最近、体調悪いんじゃない？ 二飯、食へてる？」

「うん、ちよつと疲れてて、食欲なくて……」

「何か大事なことがあるんだろうけど、倒れたら何もできなくなるよ。二飯は、食べなきゃ」

「……そう、そうね……ありがとう……梨香りか」

「ね、まずは力つけなきゃ。頭使つて悩むためには、二飯が必要なんだよー」

梨香は知らずに、エミリアの孤独を埋めてくれた。

梨香は決してブライベートに深入りしてこず、それでいてエミリアの心を軽くする術うすを最初から心得ているかのようにだつた。

やがてエミリアにも職場の後輩ができ、先輩として日本で得たこの仕事の指導をするときなど、ふと恵子けいこのことを思い出す。

恵子はエミリアがアーバンハイツ永福町えいふくまちに入居した後、一度だけ連絡をくれた。

結婚して郷里に帰るので担当が変わる、というハガキであつた。

恵子の記憶を封印したのは自分だが、それでも一度は自分の正体を知った相手が遠く離れた

場所に行ってしまうことに、勝手なことだと自覚しながらも、エミリアはショックを受けた。

それ以来何度も、聖香に自分の正体を告げようかとも悩んだ。

しかし、日本の友としてエミリアの日常の孤独を癒す彼女を失いたくないばかりに、エミリアは嘘をつき続けてしまった。

一体いつ、嘘をつかなくて済む日が来るのだろうか。

自分の出自や正体を隠すことなく接することのできる人が現れるのだろうか。

自分を隠す必要の無い誰かに、過去の自分を知り、自分の孤独を埋めてくれる誰かに、無性に会いたかった。

そんなことを思いつながら、もはや通い慣れた世界の街を歩いていると、天気予報に無かったにわか雨に遭ってしまう。

「もう！ いきなり何よー」

空を睨んで悪態をつきながら、手近なレストランの軒先で雨宿りをしていた、そのとき。

「良かったら、これ」

「え？」

目の前に、ボロボロのビニーを傘が差して出された。ふ。

# 作者、あとがく — AND YOU —

今回のあとがきには若干のネタバレ要素があります。

あとがきから先行される方はご注意ください。

前巻「はたらく魔王さま!」13」のあとがきにて「文庫未収録の短編も早めにお届け!」と宣言いたしました。

宣言通り、最速のお届けです! 本書「はたらく魔王さま!」14」は「はたらく魔王さま!」7」以来の短編集となります。

別に七巻に一度は短編集などというルールはありませんし、別に「0」が挟まってるので実質八巻目なのですが、とにかく本書をお読みいただくと、「はたらく魔王さま!」の世界をより深く読み解ける……はずありませんね。

そういうお話じゃないです。見えるのは彼らの台所事情ばかりです。

それぞれの日常を生きる彼らが織りなす物語の一幕、再び注目ください。

「勇者、女子高生と友達になる」



本編一卷ラストの何日か後から始まる物語。

この子は「どこにでもいる普通の」だった頃から強かったんだというお話。皆根々しいのう。エメラダが体格に比して超大食い、という設定はこのお話が初出です。

でも最近回転寿司屋に行くと、寿司はあんまり回転してなくて、大体みんな注文バブルで頼んでることの方が多いうような気がしますね？

『魔王、節約生活を振り返る』

作中一、二を争うストレスフルな生活をしている彼にご褒美をあげたかった、そんな一本。なお作中でも述べていますが、腸の免疫機能が未発達な一歳未満の乳幼児に蜂蜜を摂取させると、乳児ボツリヌス症を発症する恐れがあります。

原因となるボツリヌス菌は加熱しても死なない菌なので、蜂蜜が原材料に含まれる加工食品などでも、一歳未満の赤ちゃんには与えないよう注意してくださいね。

『魔王、勇者の金で新しい携帯電話を手にする』

以前『はたらく魔王さま！』のあとがきで述べた通り、作中世界は現実の我々の世界では二〇一〇年相当の時代となっています。

これはそもそも『はたらく魔王さま！』の原型となる物語を私が書いたのがその頃だからな

のですが、そのためモデルにした現実の店舗、企業、サービス、システムなどが、二〇一五年現在では存在しなくなってしまうケースが散見されるようになってきました。

『スマートフォン』『スマホ』全盛の現在、もしかしたら『携帯電話』『携帯』という言葉が使われなくなるのも、さう遠いことではないのかもしれないですね。

「勇者、敵陣の力に驚嘆する」

本当にできるんですよこういう穴って。不思議ですねー。そりやもうみつともないったらありやしません。同じダメーシジーンズなんですけどねー、膝や裾じやないところが破れると単なるダメジーンズなんですわー。

和ヶ原は、前ボクットの底に穴が開いたら換え時かなと思ってます、はい。

「魔王、上司の過去を知る」

二巻以来の謎が遂に解き明かされる！ それは古くから続く因縁の物語！ 嘘じやない！

富島園店店長の水島由絵は、川田武文や大木明子や中山孝太郎らと同じく、アニメからの逆輸入キャラクターです。

個人的にお気に入りキャラなのですが、登場時がオリジナルエピソード、女性陣水着披露、本格ホラーとインパクトの強い属性盛り沢山の回で、彼女自身にあまりスポットが当たらないか

だったので、タローズアップするならここしかないと考え、登場していただきました。普段バリっとした制服着てる人が、たまに私服姿で砕けてるとグッと来ますよね。

『はたらく前の勇者さま！——お手を合はるゑる——』

森佐恵美ことエミリア・ユステイーナが日本にやってきてすぐの様子を描く『はたらく魔王さま！』一巻の時間に続く前日譚。

本書書き下ろしの物語です。

皆さん、大変お待たせいたしました。恵美のマンシヨンの宴賓がやたら安いのは、こういうことがあったからなんです。

勇者だったからこそ、一人だったからこそ、彼女には真実や苦悩の経験しなかった様々な困難が立ちました。かかっていました。

ただ生きるだけでも苦勞の多い世の中ですが、それでも死んで花実を咲かせません。

本書は足掻きながら生き続けている彼らの、少し力の抜けた素顔を垣間見る一冊です。

これらの物語が、お手に取ってくださった方の気持ちを和らげ、一服の清涼剤となれば幸いです。

それでは、また次巻にてお会いしましょう！

# はたらく魔王さま!14

た げはらまさま  
和・原 聰司

発 行 2015 年 9 月 10 日 初版発行

発行所 塚田正晃  
発行所 株式会社 KADOKAWA  
〒102-8577 東京都千代田区富士見 2-12-3  
プロデュース アスキー・メディアワークス  
〒102-8584 東京都千代田区富士見 1-6-13  
03-5516-8299 (編集)  
03-5516-1854 (営業)  
装丁者 原屋祐司 (SETA・MANJIRA)  
印刷 株式会社地印刷  
製本 株式会社ビルデザイン・ブックセンター

本書の複製権(コピー、スキャン、デジタル化等)並びに無断複製物の流通及び配付は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を元行書などを複製・改訂複製して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。

※著了 必ず本は盗取り物といわれます。購入を求む署名名を明記して アスキー・メディアワークス 編輯・会社・本社に送りください。

送料小社負担にてお送りいたします。

※し 古書店で本書を購入されている場合はお取り替えてください。

※盗版はカバーに記述しております。

©2015 SATOSHI WAGABARA  
ISBN778-4-04-865378-4 (C093) Printed in Japan.